也、苦言藥也、甘言疾也、夫子果肯終日正言、鞅之藥也と、

【詩意】良農は耕地の力を惜しむが故に、幸に此の土地は十年も荒蕪に任してある、今遽かに桑柘は一朝に成らずとするも、一麥は收穫あるを望むに難くはない、投種して未だ月を逾えざるに、塊を覆うて麥の芽は已に蒼蒼と生長する、農父は我に忠告する、苗葉を昌んならしめてはいかぬ、君が餅餌を富まさん爲めならば、要ず牛羊の力を借りて之を踐ましむるがよい、我は再拜して其の苦言を謝す、良結果を得る志あれば、其の苦言は敢て忘れない、

【餘論】紀曰く、此亦寓憂戚玉成之意、觀苦言字可見と、

〔六〕

種棗期可剝。種松期可斲。
事在十年外。吾計亦已慤。
十年何足道。千載如風雹。
舊聞李衡奴。此策疑可學。
我有同舍郎。官居在灊岳。
【自注】李公擇也。
遺我三寸甘。照座光卓犖。

〔六〕

棗を種ゑて剝く可きを期す、松を種ゑては斲る可きを期す、
事十年の外に在り、吾計亦已に慤む、
十年何ぞ道ふに足らん、千載風雹の如し、
舊聞く李衡の奴、此策學ぶ可きを疑ふ、
我に同舍の郎あり、官居灊岳に在り、
我に遺る三寸の甘を、座を照して光卓犖、
百栽倘くは致す可し、當に春冰の渥きに及ぶべし、
想ひ見る竹籬の間、青黃屋角に垂る、

【字解】〔一〕可剝　剝落して之を取るを言ふ、〔二〕可斲　斫斲するを言ふ、〔三〕千載　何義門曰、一本作二載、殆謂至黃二年也、作千載豈有味乎と、義門の詩眼無きこと笑ふべきもの、〔四〕李衡奴　「三國志孫休傳注」に、李衡字叔平、入呉爲丹陽太守、每欲治家、妻輒不聽、後密遣客十人於武陵龍陽、泛洲上作宅、種千株、臨死戒兒曰、汝母惡我治家、故窮如是、然吾州里、有千頭木奴、不責汝衣食、歲上一匹絹、亦足可用耳と、甘橘を指して奴と言ふ、〔五〕同舍郎　公の自注に、李公擇也と、〔六〕灊岳　衡山南嶽を言ふ、灊は潛と同じ、潛水出づるが故に此の名がある、李公擇は刑獄提刑の官を以て此に在る、〔七〕三寸甘　三寸の甘橘、〔八〕卓犖　高く拔き出づる、殊絕、超越の義、〔九〕屋角　杜子美の詩、紅稠屋角花と、

【詩意】棗を種ゑては結果剝ぎ食ふべきを期する、松を種ゑては結果斲りて材と爲すべきを期する、然れども事は速刻ではない十年以後に在る、吾が計畫は亦已に慤んで居る、考ふるに十年は三千六百日何ぞ道ふに足らん、千載と雖も風雹の過ぎるが如く疾速である、舊くから聞いて居る李衡が橘樹を種ゑし事を、此の策は果して學ぶべきや否やを疑ふ、然るに我に同舍郎あり、我に三寸餘の甘橘を遺らる、其の實の光は座を照して卓犖たるものである、百本も願ふことなら之を致して、當に春冰の渥きころに種ゑん、豫め想ひ見る竹籬の間、青黃の實が纍纍として屋角に垂るることを、

〔七〕

潘子久不調。沽酒江南邨。

〔七〕

潘子久しく調せられず、酒を江南の邨に沽る、

郭生本將種、藥を西市垣に賣る、
古生も亦好事、恐らくは是れ押牙の孫ならん、
家に十畝の竹あり、時に客の門を叩く無し、
我窮して交舊絶つ、三子獨り存せらる、
我に東坡に從ふ、勞餉同じく一飧、
憐む可し杜拾遺、事朱阮と論ず、
吾師卜子夏、四海皆弟昆、

郭生本將種。賣藥西市垣。
古生亦好事。恐是押牙孫。
家有十畝竹。無時客叩門。
我窮交舊絶。三子獨見存。
從我於東坡。勞餉同一飧。
可憐杜拾遺。事與朱阮論。
吾師卜子夏。四海皆弟昆。

【字解】〔一〕潘子　名は大臨、字は邠老、滎陽の人、〔二〕不調　「漢張釋之傳」に、十年不レ得レ調と、調は調遷、長く一官一役に沈滯して進級せざるを謂ふ、〔三〕郭生　名は遵、汾陽の人、〔四〕將種　「漢書齊悼惠王傳」に、朱虛侯劉章、侍二高后宴一、爲二酒吏一、請曰、臣將種也、請以二軍法一行レ酒と、〔五〕古生　名は黃道、新平の人、〔六〕押牙孫　王梅谿曰く、古押牙、富平縣俠客也、盜取二奉陵宮女無雙一、以與二王仙客一爲レ妻、寃死者數人、押牙亦自刎、事詳二見麗情集一と、「麗情集」に、劉振女曰二無雙一、許以レ妻二王仙客一、未レ果、而振授二朱泚僞官一、無雙籍入二掖庭一、仙客怨慕不レ已、聞二富平古押牙、人間有レ心人一、以情告レ之、古生作二奇法一取レ之、使二復爲二夫婦一五十年と、〔七〕三子　潘と郭と古と、〔八〕杜拾遺　杜子美は官拾遺である、〔九〕朱阮論　杜子美の詩、梅熟許下同二朱老一喫、松高擬レ對二阮生一論と、〔一〇〕卜子夏　「論語顏淵篇」に、司馬牛憂曰、人皆有二兄弟一、我獨亡、子夏曰、商聞レ之矣、死生有レ命、富貴在レ天、君子敬而無レ失、與レ人恭而有レ禮、四海之內、皆兄弟也と、

【詩意】潘子は有用の才を抱き乍ら久しく調せられず、酒を江南の郫里に沽りて生活する、郭生も亦本軍人の家である、不幸にして西市に賣藥して生活する、古生も亦好事の人である、恐らくは古の俠客たる古押牙の孫であらう、我が家に十畝の竹林がある、客の門を叩きて來るの時は無い、我は窮して交游の知己今は絶えて居る、幸に君等三人があるのみ、我に此の僻地の東坡に從游して、勞餉同じく一飧する、憐れなるは杜拾遺である、萬事朱阮の二子と論ずるのみ、又大きく考へて見ると吾が師と爲すべきは子夏である、四海の內は皆弟昆であると言うて司馬牛を慰めて居る、

〔八〕

馬生本窮士。從我二十年。
日夜望我貴。求分買山錢。
我今反累君。借耕輟茲田。
刮毛龜背上。何時得成氈。
可憐馬生癡。至今夸我賢。
衆笑終不悔。施一當獲千。

〔八〕

馬生本窮士、我に從ふ二十年、
日夜に我が貴を望む、買山の錢を分たんことを求む、
我今反つて君を累す、借耕茲田を輟む、
刮毛龜背の上、何れの時か氈を成すを得ん、
憐む可し馬生の癡、今に至りて我賢を夸る、
衆笑ふも終に悔いず、一を施して千を獲るに當る、

【字解】〔一〕馬生　「東坡志林」に、馬夢得、與レ僕同二歲月一生、少レ僕八日、是歲生者、無二富貴人一、而僕與二夢得一、爲二窮之冠一、卽吾二人而觀レ之、當下推二夢得一爲上首と、〔二〕買山錢　唐の范攄の「雲溪友議」に、符載山人、以二青書一抵二于頔一、乞二買山錢百萬一、與レ之と、〔三〕借耕輟茲田　輟は止也、已也、「史記陳涉世家」に、輟レ耕之壟上と、休息の意、〔四〕刮毛　梅谿曰く、龜背上刮毛、乃諺

語也と、其の實に無きことを謂ふ、

【詩意】馬生は本窮乏の士である、我に從游すること二十年、日夜に我が出世することを望む、其の時は買山の錢を分與せんことを求む、然るに我は反對に君を累して、吾が耕田を君の力を借りるに至る、龜背上の毛を刮りて、氈を成すは畢竟空想にて何れの時か其の實際を見ることが出來ようぞ、憐む可きは馬生の癡である、今日に至りて聊か我の方が賢であることに夸る、衆人が笑ふとも終に悔いはない、一を施して千を獲るに當る、

【餘論】紀曰く、刮毛二句、微嫌二其纖一、結用二陶公冥報相貽意一と、查初白曰く、立言失レ體亦是と、戲の極此に至る、公諧謔を好むの性、往往詩の本旨を失するに至る、其の人の性と、其の時代の弊は以て見るべきである、

次韻回文三首

次韻回文　三首

(一)春機滿織回文錦。
(二)粉淚揮殘露井桐。
人遠寄レ情書字小。
柳絲低日晚庭空。

【字解】(一)春機　徐陵の詩、春機當二戸前一と、(二)粉淚　李端の樂府に、唯餘壞粉淚と、美人の淚の義、(三)露井　陸龜蒙の詩、朱閣前頭露井多、碧梧桐下美人過と、屋根の無き井戸を露井と謂ふ、

【題義】回文の詩は、倒に讀めば又一首となる、晉の溫嶠始めて是の體を作る、後、竇滔の妻蘇氏が八百十二字の詩を作る、郎君が家を出づるも、回ると云ふ意より成るもの、乃ち多く婦人の事を敍するのである、公は此の外金山寺の七律もある、

【詩意】倒讀して出して見る、空庭晚日低絲の柳、小字情を書して遠人に寄す、桐井露殘して淚粉を揮ひ、錦文回織して機春滿つ、

〔一〕

(一)紅牋短寫空深恨。
錦句新翻欲斷腸。
風葉落殘驚夢蝶。
戍邊回雁寄情郎。

〔二〕

紅牋短寫空しく深恨、
錦句新翻斷腸せんと欲す、
風葉落殘して夢蝶を驚かす、
戍邊の回雁情郎に寄す、

【字解】(一)紅牋　韓翃の詩、紅牋色奪風流座と、(二)回雁　元微之の詩、悵望悲二回雁一と、(三)情郎　韓偓の詩、書中說却平生事、猶疑未レ滿二情郎意一と、

【詩意】郎が情雁に寄せて邊戍より回る、蝶夢驚き殘す落葉の風、腸斷翻へさんと欲す新句の錦、恨深うして空しく寫す短牋の紅に、

〔三〕

羞雲斂慘傷春暮。

〔三〕

羞雲斂慘春暮を傷む、

細縷詩成織意深。　細縷詩成りて織意深し、
頭畔枕屏山掩レ恨。　頭畔枕屏山恨を掩ふ、
日昏塵暗玉窗琴。　日昏く塵暗し玉窗の琴、

【詩意】琴窗玉暗し塵昏の日、恨は掩ふ山屏枕畔の頭、深意織成す詩縷細、暮春傷慘雲を斂めて羞づ、

【餘論】紀曰く、東坡何以墮二此惡趣一と、或は謂ふ東坡が作にあらずと、今眞僞を判ずるに苦しむ、

附江南本織錦圖上回文原作三首

附す、江南本織錦の圖上回文原作　三首

春晩落花餘碧草。　春晩れて落花碧草を餘し、
夜涼低月半枯桐。　夜涼しくして低月枯桐に半す、
人隨遠雁邊城暮。　人は遠雁に隨ふ邊城の暮、
雨映疎簾繡閣空。　雨は映ず疎簾繡閣空し、

【詩意】倒讀して見ん、空閣繡簾疎にして雨に映ず、暮城邊雁遠く人に隨ふ、桐枯れて半月涼夜に低れ、草碧にして餘花晩春に落つ、

【字解】〔一〕碧草　杜子美の詩、映レ階碧草自春色と、〔二〕疎簾　杜子美の詩、江色映二疎簾一と、

〔一〕
紅手素絲千字錦。　紅手素絲千字の錦、
故人新曲九廻腸。　故人新曲九廻腸す、
風吹二絮雪一愁縈レ骨。　風は絮雪を吹いて愁は骨を縈る、
淚灑二縑書一恨レ見レ郎。　淚は縑書に灑ぎ郎を見るを恨む、

【詩意】郎見て書を恨み縑に淚を灑ぐ、骨縈愁雪絮風を吹く、腸廻九曲新人故なり、錦字千絲素手紅なり、

【字解】〔一〕紅手　白樂天の詩、戲團雅女呵二紅手一と、〔二〕九廻腸　司馬子長報二任安一書、腸一日而九廻、居則忽忽、若レ有レ所レ忘と、〔三〕縑書　縑は絹の細密なるもの、

〔二〕
羞レ看一首回文錦。　看るを羞づ一首の回文錦、
錦似二文君一別恨深。　錦は文君に似て別恨深し、
頭白自吟悲賦客。　頭白自から吟ず悲賦の客、
斷腸愁是斷絃琴。　斷腸愁は是れ斷絃の琴、

【字解】〔一〕文君　「西京雜記」に、司馬相如、將下聘二茂陵女子一爲上レ妾、卓文君作二白頭吟一以自絕、相如乃止、其詞曰、皚如二山上雪一、皎若二雲間月一、聞君有二兩意一、故來相決絕、平生共城中、何嘗斗酒會、今日斗酒間、明旦溝水頭、躞蹀御溝上、溝水東西流、郭東亦有レ樵、郭西亦有レ樵、兩樵相推與、無レ親爲レ誰嬌、凄凄重凄凄、嫁娶不レ須レ啼、願得二一レ心人一、白頭不二相離一と、

【詩意】琴絃斷ずるは是れ愁腸斷なり、客は悲吟を賦して自から白頭、深く恨む君に別るる文錦に似たるを、錦文首を回らし一に看るを羞ず、

【餘論】錦を織り、句句往反回りて讀む故に回文錦字と言ふ、蘇蕙が作るもの是である、而かも是は倒讀するものではなく、つまり横讀するものである、「詩法入門」に云ふ、回文詩者、反覆成レ章、隨レ舉二一字一、皆成レ詩、蘇氏之回文、八百一十二字、縱横讀レ之、得レ詩三千七百五十二首、今回文、順讀成二一首一、倒讀成二一首一、今學者、止學二此法一と、今此の第二首の如き、倒讀して果して詩を成すや、骨縈愁雪、是れ何の句ぞや、紀曉嵐の罵るは極めて理がある、

數日前夢一僧出二一鏡一求レ詩。僧以レ鏡置二日中一。其影甚異。其一

如二芭蕉一。其一如二蓮花一。夢中作二此詩一

數日前夢む、一僧二鏡を出して詩を求む、僧鏡を以て日中に置く、其の影甚だ異、

其の一は芭蕉の如く、其の一は蓮花の如し、夢中此の詩を作る、

君家有二二鏡一。光景如二湛盧一。

君が家二鏡あり、光景湛盧の如し、

或長如二芭蕉一。或圓如二芙蕖一。

或は長くして芭蕉の如く、或は圓にして芙蕖の如し、

飛電著二子壁一。明月入二我廬一。

飛電子の壁に著き、明月我が廬に入る、

月下合二三壁一。日月跳二明珠一。

月下三壁合し、日月明珠跳る、

問レ子是非レ我。我是非文殊。

子に問ふ是れ我にあらず、我は是れ文殊にあらず、

【字解】【一】湛盧　古の名劍の名、【二】文殊　文殊室利の略稱、滿殊尸利、曼殊室利とも書す、文殊は妙と譯し、室利は吉祥と譯す、釋尊の左方に侍して智慧を司る、「放鉢經」に、今我得レ佛、皆是文殊師利之恩也、過去無央數諸佛、皆是文殊師利弟子、當來者、亦是其威神力所レ致、譬如二世間小兒有二父母一、文殊者佛道中父母也と、

【詩意】夢中に僧が來りて言ふ我に二鏡あるが、君が家にも亦二鏡がある、其の光景は湛盧の如く明明である、一鏡は長くして芭蕉の如く、一鏡は圓くして蓮花の如く、其の光りは飛電の如く子が壁に著き、又明月が我廬に入る、天上の明月と合して都合三壁と爲る、日月の明珠を跳らすの狀である、問ふ子は自から子にて、我は是れ文殊ではない、

【餘論】紀曰く、此種可レ入二說部一、不レ可レ入二詩集一と、案ずるに此等の文字は所謂邪魔外道にて、禪者の「語錄」には或は入らんも斷じて詩中に入るべきものではない、

岐亭道上見梅花。戲贈季常

岐亭道上、梅花を見る、戲れに季常に贈る

蕙死蘭枯菊亦摧。　蕙死し蘭枯れ菊亦摧く、

返魂香入嶺頭梅。　返魂香は入る嶺頭の梅、

【字解】【一】返魂香　遷應劭曰く「洞冥記」、有二懷夢草一、武帝思二李夫人一、不レ可レ得、朔乃獻二一枝一、帝懷

數枝殘綠風吹盡。　數枝殘綠風吹き盡し、
一點芳心雀(三)啅開。　一點の芳心雀啅開す、
野店初嘗竹(四)葉酒。　野店初めて嘗む竹葉酒、
江雲欲レ落豆(五)稭灰。　江雲落ちんと欲す豆稭灰、
行當レ更向鈔頭見。(上)　行いて當に鈔頭に向うて見るべし、
病起烏(六)雲正作レ堆。　病より起ち烏雲正に堆を作す、

【題義】岐亭道上に於て梅花を見て、戲れに此の詩を作りて季常に贈りしもの、察するに季常は妻が病んで心樂しまないのであらう、

【詩意】蕙も蘭も枯死して菊も亦摧けて居る、返魂香は獨り嶺頭の梅に在るのみ、其の梅も數枝の殘綠を風が吹き盡してある、が一點の芳心は雀が啅みて開く、野店に憩うて初めて嘗む竹葉の酒を、江雲が落ちんと欲する其の狀は豆稭灰の如くである、行いて當に更に鈔頭に向つて見玉へ、病より起つて烏雲が正に堆を作すであらう、

【字解】【一】地行山　「首楞嚴經」に、有二十種仙一堅固服餌、而不二休息一、食道圓成、名二地行仙一、皆於二人中一鍊レ心、不レ修二正覺一、別得二生理一、壽千萬歲と、【二】住世　「法華經」に、正法住世、二十小劫、像法亦住二十小劫と、【三】銅人　「後漢蒯子訓傳」に、人於二長安東霸城一見之、與二一老翁一、共摩挲銅人一、相謂曰、適見レ鑄レ此、而已近二五百歲一矣と、銅造の人形である、或は銅佛、【四】清堅　「陳琳武軍賦」に、清堅皓錫と、

【五】倚壁　韓退之の赤藤杖歌に、空堂晝眠倚二牖戶一、飛電著壁搜二蛟螭一と、【六】方丈　「孟子盡心章」に、食前方丈、侍妾數百人と、一丈四方の小室を謂ふ、維摩居士の室十笏を容るるのみ、之を方丈と謂ふ、【七】野狐禪　「傳燈錄」に、百丈山大智禪師、每日上堂、有二一老人一、隨レ衆聽レ法、一日衆散、老人不レ去、師問レ之、老人曰非レ人也、師曰因レ何到レ此、答曰、過去生中、曾住二此山一、有二學人一問、

レ之、夜果夢二夫人一、續注所レ云、未レ知二何本一、白樂天亦云、返魂香降二夫人魂一也と、「續注」に曰く、李夫人死、武帝念レ之不レ已、乃令レ方士作二返魂香一燒レ之、夫人乃降と、查初白曰く、按禪宗頌古所レ載、唐僧古梅詩云、雪虐風饕水浸レ根、石邊尙有二古苔痕一、天公未二肯隨レ寒住一、又蘂清香與二返魂一、東坡詩用レ此と、【二】風吹盡　杜子美の詩、不レ如醉裏風吹盡と、【三】雀啅　杜子美の詩、上レ天燒レ下豆稭灰、烏李須教レ做二白梅一と、【六】烏雲　鬢髮を謂ふ、

【餘論】紀曰く、究非二雅語一と、嶺頭、鈔頭、江雲、烏雲、例の病である、

樂泉先生生日。以鐵拄杖爲壽。二首

樂泉先生の生日、鐵拄杖を以て壽を爲す　二首

先生眞是地(一)行仙。　先生眞に是れ地行の仙、
住(二)世因循五百年。　住世因循五百年、
每向二銅(三)人一話二疇昔一。　每に銅人に向うて疇昔を話す、
故敎二鐵杖鬪(四)清堅一。　故に鐵杖をして清堅を鬪はしむ、
入レ懷冰雪生二秋思一。　懷に入る冰雪秋思を生じ、
倚(五)レ壁蛟龍護二畫眠一。　壁に倚る蛟龍畫眠を護す、
遙想人天會二方丈(六)一。　遙かに想ふ人天方丈に會し、
衆中驚倒野(七)狐禪。　衆中驚倒す野狐の禪、

大修行底人、還落二因果一也無、對曰、不レ落二因果一、遂墮二在野狐身一、今請和尚、代二一轉語一、師曰、汝但問、老人便問、師曰、不昧因果、老人言下大悟、告辭曰、今已免二野狐身一、只在二山後一住、乞依二亡僧例一焚燒、師令二維那白レ槌、齋後於二嚴中一、果見二一死野狐一、積レ薪化レ之と、

【題義】　樂全先生の生日に、鐵拄杖を呈して、其の祝賀を爲すのである、

【詩意】　先生は眞に是れ地行の仙である、住世すること因循五百年の舊きに度る、毎に銅人に向つて疇昔の事を話す、是の故に鐵杖をして互に淸堅を鬪はしむるのである、懷に入る冰雪は淸うして秋思を生ぜしむ、壁に倚つて怖ろしき蛟龍は晝眠を護る、因つて遙に想ふ人間や天人が方丈に集會して、衆中に導師が驚倒せしむ野狐禪の事を、

〔一〕

二年相伴影隨身。
踏徧江湖草木春。
(三)擿石舊痕猶在眼。
閉門高節欲生鱗。
(四)畏塗自衞眞無敵。
(五)捷徑爭先却累人。

〔二〕

遠寄知公不レ嫌重。
(六)筆端猶自斡千鈞。

馬承禎一日、此中大有二佳處一、承禎曰、以レ僕視レ之、仕宦之捷徑耳と、【六】筆端　筆頭、筆尖、皆同じ、【七】千鈞　千斤と同じ、歐陽修の詩、興來筆下千鈞重と、

【詩意】　二年間相伴うて影の身に隨ふ如き杖である、乃ち踏み徧くす江湖草木の春を、出游の際の擿石の舊痕は猶ほ依然として眼に在る、家に掛けてあるときは高節が鱗を生ぜんと欲するを覺ゆ、畏塗の自衞としては眞に敵が無い、捷徑先を爭ふには不如意なれば却つて人を累はすのである、是を公に呈するが公は其の重量を嫌ふまい、なぜなれば筆端平生自から千鈞の重きを自由に斡旋する、

【餘論】　紀曰く、野狐禪、意有レ所レ斥、然語殊不レ雅、又後首の畏塗の十四字を評して、五六極用意而不レ佳と、元來禪語を運用して詩語に化せしめんとするは、大神力あるも能はざる所、其の不雅を知りつつ用ふる所に坡公の面目が露はる、不雅と評する紀は淸濁幷呑を出來ない人である、

【字解】　〔一〕影隨身　李太白の詩、舉レ杯邀二明月一、對レ影成二三人一、月既不レ解レ飲、影徒隨二我身一と、〔二〕擿石　擿は投擿、石を投げつける、〔三〕欲生鱗　費長房、杖を葛陂中に投ずれば化して龍と成る、此の句は是を謂ふか、〔四〕畏塗　「莊子達生篇」に、夫畏塗者、十殺二一人一、則父子兄弟相戒也、必盛二卒徒一而後敢出焉と、〔五〕捷徑　スグレタルミチ、又ハヤミチ、「唐書」盧藏用、始隱二終南山一、晚狥二權利一、嘗謂二司馬承禎一曰、此中大有二佳處一、承禎曰、以レ僕視レ之、仕宦之捷徑耳と、

杭州故人信至齊安

昨夜風月淸。夢到西湖上。
朝來聞好語。扣戶得吳餉。

杭州故人の信、齊安に至る

昨夜風月淸し、夢は西湖の上に到る、
朝に來りて好語を聞き、戶を扣きて吳餉を得たり、

輕圓白(一)曬荔。脆醲(二)紅螺醬。
更將西菴茶。勸我洗江瘴。
故人情義重。說我必西向。
一年兩僕夫。千里問(四)無恙。
相期結(五)書社。【自注】偃僕夫。一歲再至黃。
未怕供(六)詩帳。
【自注】僕頃以詩得罪有司。移杭。取境內所留詩。杭州供數百首。謂之詩帳。
還將夢魂去。一夜到(七)江漲。
【自注】江漲杭州橋名。

輕圓白曬荔、脆醲紅螺の醬、
更に西菴の茶を將て、我に勸む江瘴を洗へと、
故人情義重し、我に說く必ず西向せよと、
一年兩僕夫、千里問ふ恙無きやと、
相期す書社を結ばんと、
未だ怕れず詩帳を供するを、
還た夢魂を將て去り、一夜江漲に到る、

【字解】【一】白曬荔　蔡君謨の「荔枝譜」に、福州舊貢紅鹽蜜煎二種、慶歷初、知州沈邈、以道遠不可致、減紅鹽之數、而增白曬者と、白荔子、閩廣地方多く產す、其の果、龍眼に似て肉は白く味は甘し、【二】脆醲　美味の義、字の本義は脆は柔、醲は濃である、【三】紅螺醬　螺をシシビシホに製したるもの、【四】無恙　韓退之の書、問無恙外、不暇出一語と、【五】結書社　公の自注に、故人相約醵錢、偃僕夫一歲再至黃と、【六】詩帳　公の自注に、僕頃以詩得罪有司、移杭、取境內所留詩、杭州供數百首、謂之詩帳と、【七】江漲　公の自注に、江漲橋杭州橋名と、又「臨安志」に、江漲橋在餘杭門外と、

【題義】杭州の友人即ち王復や張弼や辯才等の雁信が齊安に至るを得て此を作る、

【詩意】昨夜は天晴れて風月淸涼である、我が魂夢は杭州西湖の上に飛到する、而して朝來に及んで好語を聞くことが出來た、戶を扣く者は我に吳餉を送り來るのである、それは輕圓なる白曬荔と、脆醲なる紅螺醬とである、更に加ふるに西菴の茶を以てせらる、是を飮んで江瘴を洗へよと、故人は眞に情義重し、說き示さる我に必ず西向せよと、一年に雇ひし兩僕夫も、千里恙無きやと問ふ、相期す書社の同盟を結んで、未だ怕れない詩帳を供して亦役人の罪に觸れるを、還た夢魂を將て去り、一夜にして江漲に飛び到るを、

【餘論】紀曰く、剽而不留と、要するに公の詩として尋常喫茶飯に屬するものである、

送牛尾貍與徐使君【自注】時大雪中。

牛尾貍を送られ徐使君に與ふ　【自ら注す】時に大雪中。

風捲飛花自入帷。　風は飛花を捲いて自から帷に入る、
一尊遙想破秋眉。　一尊遙かに想ふ愁眉を破るを、
泥深厭聽雞頭鶻。　泥深うして聽くを厭ふ雞頭鶻、
【自注】蜀人謂泥滑滑爲雞頭鶻。
酒淺欣嘗牛尾貍。　酒淺くして嘗むるを欣ぶ牛尾貍、

【字解】【一】雞頭鶻　公の自注に、蜀人謂泥滑滑爲雞頭鶻と、查初白云ふ、本草、竹雞一名山菌子、注蜀人呼爲雞頭鶻、南人呼爲泥滑と、【二】牛尾貍　「酉陽雜俎」に、洪州有牛尾貍肉甚美と、「本草注」に、南方有白面而尾似牛者名牛

通印子魚猶帶骨。　通印の子魚猶ほ骨を帶び、
披緜黃雀漫多脂。　披緜の黃雀漫に脂多し、
殷勤送去煩纖手。　殷勤に送り去る纖手を煩はす、
爲我磨刀削玉肌。　我が爲めに刀を磨し玉肌を削る、

陽雞俎」に魚長一尺三寸、額上四方、如レ印有レ字、諸大魚應レ死者、先以レ印封レ之と、【四】披緜黃雀　施德初云ふ、黃雀出二江西一、臨江軍土人、謂二脂厚一爲二披緜一と、

【題義】牛尾貍の肉を送られたる徐使君に謝する詩である、

【詩意】風は飛花卽ち雪を吹き捲いて帷に入る時である、此時や一尊に對して正に愁眉を破る君の情を想ふ、泥深くして此の上にも竹雞（ウバシギ）の鳴聲を聽くは厭になる、酒は淺酌して其の肴に牛尾貍を嘗むるがよい、通印の子魚も美は美であるが骨がある、披緜の黃雀も佳は佳であるが脂が多い、殷勤に送去せらるるは定めし纖手を煩はして、我が爲めに刀を磨して其の白肉の所を削りたるものであらう、

【餘論】題目は「牛尾貍ヲ送リ徐使君ニ與フ」とも讀める、が詩を讀めば我より送つたのではなく、彼より送られたるものである、紀は太俚太滑としてあるが、題目此の如し、俚滑は當然である、

尾貍一、專上レ樹食二百果一、冬月極肥、人多糟爲二珍品一と、【三】通印子魚　「遯齋閒覽」に、莆陽通應、子魚名著二天下一、蓋其地有二通應侯廟一、廟前有レ港、港中之魚最佳、今人必求二其大可レ容レ印者一、謂二之通印子魚一と、「酉

四時詞。四首

春雲陰陰雪欲レ落。　春雲陰陰として雪落ちんと欲す、
東風和冷驚二簾幙一。　東風和冷にして簾幙を驚かす、
漸看遠水綠生レ漪。　漸く看る遠水綠漪を生ずるを、
未レ放小桃紅入レ蓼。　未だ放さず小桃紅蓼に入るを、

佳人瘦盡雪膚肌。　佳人瘦せ盡す雪膚肌、
眉斂二春愁一知爲レ誰。　眉は春愁に斂む知る誰が爲めぞ、
深院無レ人剪刀響。　深院人無く剪刀の響、
應下將二白紵一作春衣上。　應に白紵を將て春衣を作るなるべし、

【題義】春夏秋冬の四時に對して、閨婦の詞を歌うたものである、

【詩意】春雲は陰陰として暗く雪も落ちんとする景色である、加ふるに東風も冷氣を以て簾幙を驚かすが、但漸く遠水が綠色を湛はして漪漣を生ずるを見る、未だ小桃は紅の蓼に入るを放さない、佳人は瘦せ盡す雪膚肌を、眉を斂めて春愁の態を爲すは畢竟誰の爲めである、深院は人無きが如きも翦刀の響がする、想ふに是れ美人が白紵を裁して春衣を作る爲めであらう、

【字解】【一】簾幙　陸士衡の詩、蘭室接二羅幕一と、幕はトバリ、帷幕である、【二】綠生漪　漪は漪漣、サザナミ、【三】紅入蓼　杜子美の詩、紅入桃葉嫩、青歸柳葉新と、【四】知爲誰　李太白の詩、美人卷二珠簾一、獨坐顰二蛾眉一、但見淚痕溼、不レ知心恨レ誰と、【五】剪刀　ハサミ、【六】白紵　柳子厚の詩、青衫裁二白紵一と、

〔二〕

垂柳(一)陰陰日初永。
蔗漿酪(二)粉金盤冷。
簾額低垂紫燕忙。
蜜(四)脾已滿黃蜂靜。
高樓睡起翠(五)眉嚬。
枕畔斜(六)紅未肯匀。
玉腕半(七)揎雲碧袖。
樓前知有斷腸人。

【詩意】垂柳は鬱茂陰陰として日初めて永し、初夏の永日を消する爲め蔗漿や酪粉が金盤上に如何にも冷氣に見える、簾額は低く垂れて紫燕が忙はしく飛ぶ、蜜脾も已に滿ちて黃蜂は靜かである、美人は高樓に睡起して翠眉を嚬めて居る、一枕も其の儘に化妝も斜紅に未だ肯て匀はない、玉腕半ば揎げて露はす雲碧の袖を、樓前知る斷腸の人あるを、

【字解】〔一〕陰陰　羅隱の詩、斜陽澹澹柳陰陰と、柳の茂りて暗き貌、〔二〕蔗漿　蔗は砂糖のキビ、漿して汁を取り以て飲料となすもの、〔三〕酪粉　牛羊馬等の乳を煮て、飲料と爲すものを酪と言ふ、〔四〕蜜脾　李義山の詩、花房與蜜脾、蓬雄蛺蝶雌と、歐陽修の詩、蜜脾未滿蜂採花と、〔五〕翠眉嚬　杜子美の詩、勞生重馬翠眉疎と、〔六〕斜紅　白樂天の詩、斜紅不暈頰面女と、〔七〕半揎　揎は袂をかかげ臂を出す、

〔三〕

新愁舊恨眉生綠。
粉(一)汗餘香在蘄(二)竹。
象(三)牀素手熨(四)寒衣。
爍(五)爍風燈動華屋。
夜香燒罷掩重扃。
香霧空濛月滿庭。
抱琴轉(六)軸無人見。
門外空聞裂帛聲。

【詩意】新愁も舊恨も眉が綠を生ずる間にも認む、粉汗の餘香は蘄竹に在るのみ、象牙の牀に於て素手を張りて寒衣を熨斗する、爍爍として風燈は華屋を燿かし動く、夜香も燒き罷んで重扃を掩ふの頃は、香霧が空濛として月色は滿庭である、琴を抱き軸を轉ずるも人は見えない、門外に空しく裂帛の聲を聞くの思がある、

【字解】〔一〕粉汗　盧思道の採蓮曲に妝消粉汗滋と、〔二〕蘄竹　簟、タカムシロ、竹にて編みたる敷物である、韓退之の詩、蘄州笛竹天下知、鄒君所レ賣尤瑰奇、攜來當晝不レ得レ臥、一府傳看黃琉璃と、〔三〕象牀　杜子美の詩、象牀玉手亂二殷紅一、萬草千花動二凝碧一、美人細意熨二帖平一、裁縫滅盡鍼線跡と、「戰國策」に、孟嘗君至レ楚、楚獻二象牀一と、〔四〕熨　熨斗の器にても知る、火にて布帛の皺をのばすのである、〔五〕爍爍　かがやく貌、韓退之の詩、紅燈爍爍綠盤龍と、〔六〕轉軸　白樂天の詩、轉レ軸撥レ弦三兩聲、四弦一聲如レ裂レ帛と、

〔四〕

霜葉蕭蕭鳴屋角。
黄昏陡覺羅衾薄。
夜風搖動鎭帷犀。
酒醒夢回聞雪落。
起來呵手畫雙鴉。
醉臉輕匀襯眼霞。
眞態生香誰畫得。
玉如纖手嗅梅花。

【詩意】霜葉は其の響蕭蕭として屋角に鳴る、黄昏に及んで頓に覺ゆ羅衾の薄くして寒きを、夜風は搖動する鎭帷の犀を、酒は醒め夢より回りて雪の落つる響を聞く、起ち來りて手を呵して眉上に雙鴉を畫く、其の容の樣は醉臉輕匀にして眼霞に襯する、其の美人の眞態は香を生ずるが誰か此の姿を畫き得る者ぞ、玉の如き纖手を以て梅花を嗅ぐ、

【餘論】紀曰く、純是詩餘、似二稗官中、才子佳人語一、不レ知何以出二東坡手一、と、溫柔鄕の語、杜韓大家の集無き所、公として小家の爲す所を學ぶ、曉嵐先生の評語、余も大に嘆ずる所である、

太守徐君猷通守孟亨之皆不レ飲レ酒。以レ詩戲之

太守徐君猷、通守孟亨之、皆酒を飲まず、詩を以て之に戲る

孟嘉嗜レ酒桓溫笑。
徐邈狂言孟德疑。
公獨未レ知二其趣一爾。
臣今時復一中レ之。
風流自有二高人識一。
通介寧隨二薄俗一移。
二子有レ靈應撫掌。
吾孫還有二獨醒時一。

人何在、亮曰在レ坐、卿自寬、哀歷觀、指レ嘉曰、此君小異、將無レ是乎、亮欣然喜二哀得一レ嘉、而奇二嘉爲一哀所一レ得、と、【五】通介　通達堅介の人、杜子美の詩、勿レ問通與レ介、徐公自有レ常と、【六】隨薄俗移　「徐邈傳」に、徐雅尙自若、不二與レ俗同一、と、【七】二子　孟嘉と徐邈、【八】獨醒　「史記屈原傳」に、擧世皆濁、而我獨淸、衆人皆醉、而我獨醒と、

【字解】〔一〕陡覺　陡は字音トウ、訓は頓、ニハカである、杜子美の詩、陡上捩二弧影一、と、〔二〕鎭帷犀　杜牧の詩、金縷犀鎭帷と、犀角を置いて帷を鎭衞する、〔三〕畫雙鴉　虞世南の詩、學レ畫二鴉兒一半未レ成と、〔四〕生香　薛能の詩、活色生レ香第一流と、〔五〕玉如　玉如に作る本は誤る、玉の如き纖手である、

【字解】〔一〕孟嘉　「晉書孟嘉傳」に、嘉江夏人、字萬年、少知レ名、太尉庾亮、領二江州一、辟爲二從事一、後爲二桓溫參軍一、九日宴二龍山一、風吹レ帽落、嘉不レ覺、桓溫命二孫盛一、爲レ文嘲レ之、嘉卽爲二答文一甚美、四座歎賞、嘉飲多不レ亂、溫問、酒有二何好一、嘉曰、明公但不レ得二酒中趣一耳、と、〔二〕徐邈　三國魏の人、〔三〕孟德　曹操の字、〔四〕風流　「晉書」に、孟嘉、庾亮、正旦大會二州府人士一、褚裒問レ亮、聞江州有二孟嘉一、其二子靈應撫掌、吾孫還有獨醒時、と、

【題義】太守の徐君猷と、通守の孟亨之の二人、共に酒を飲まない、昔孟姓の人と徐姓の人は大に酒を飲んで、而して人格者である、今の孟と徐は人格者であるが、之は反對に飲まない、是に於て戲れに是の詩を作るのである、

【詩意】高士の孟嘉は酒を嗜んで姦雄の桓溫は嘲笑する、豪傑の徐邈はワザと狂言を吐いて是も姦雄の孟德は疑問とする、桓公曹公等は酒中の趣を解しない人である、所で後生の吾等は偶然にも趣を解しない人に一致する、孟嘉の風流は自から高人の識る者がある、徐邈の通介は寧ろ時代の薄俗とは和しない、二子に若し靈があれば應に撫掌して喜ぶべきと思ふ、吾等の孫には還た獨醒の人あるを、

【餘論】紀曰く、小品自佳、此種從レ姓起レ義、恰有二孟徐二酒事一佐レ之、又不二以レ切レ姓爲レ嫌と、査初白云ふ、中二聯、兩兩分二承起句一、章法獨勍と、此等の詩を作る、學博く且大なる者にあらざれば、決して作る能はざるもの、但し自有、有靈、還有の同字多きは病の致す所、考ふるに自有は自是、有靈は其靈にて妨げなきものと、

姪安節遠來夜坐。三首

姪安節遠來す、夜坐　三首

南來不レ覺歲崢嶸。
夜撥二寒灰一聽二雨聲一。

南來覺えず歲の崢嶸、
夜寒灰を撥して雨聲を聽く、

【字解】【一】歲崢嶸　杜子美の詩、旅食歲崢嶸と、卽ち歲月の積み重れたるを謂ふ、【二】夜撥寒灰　撥は撥除、撥無、撥開と成語するが、今は寒灰を搔きのけるのである、【三】遮眼　「傳燈錄」に、有レ僧問二藥山惟儼禪師一、和尙尋常、不レ許二人看經一、什麼却自看、師曰、我只圖二遮眼一と、【四】燈火　韓退之の詩、燈火稍可レ親と、【五】潦倒　「嵇叔夜絕交書」に、足下舊、知二吾潦倒麤疎、不レ切二事情一と、多義に用ふる

遮レ眼文書原不レ讀。
伴レ人燈火亦多情。
嗟予潦倒無二歸日一。
令二汝蹉跎一已半生。
免レ使二韓公悲二世事一。
白頭還對短燈檠。

眼を遮る文書原讀まず、
人に伴ふ燈火亦多情、
嗟予潦倒歸日無く、
汝をして蹉跎せしむ已に半生、
韓公をして世事を悲しましむるを免る、
白頭還た對す短燈檠、

が、老衰の貌を本義とする、【六】蹉跎　杜子美の詩、聞君已朱紱、且得レ慰二蹉跎一と、世路につまづくのである、【七】韓公　韓退之の「短燈檠歌」に、長檠八尺空自長、短檠二尺便且光と、【八】檠　燈火の臺を謂ふ、

【題義】姪の安節が遠くより訪來するを以て夜坐して情懷を敍せしものである、

【詩意】南方より來りて歲月の崢嶸たるを忘れ去る、對坐して寒灰を撥きながら雨聲を聽く、眼を遮るの文書は心を勞すること多ければ讀まない、座邊にて人に伴ふ所の燈火は亦言ふべからざる情味が多い、唯嗟するは予は潦倒して歸日の無きことを、汝を世話すること能はずして半生を蹉跎せしむ、然るに汝は我をして韓公の如く世事を悲しましむるの思を免れしむ、白頭今夜の如く歡話して還た短燈檠に對する、

〔一〕　〔二〕

心衰面改瘦崢嶸。
相見惟應識舊聲。
永夜思家在何處。
殘年知汝遠來情。
畏人默坐成癡鈍。
問舊驚呼半死生。
夢斷酒醒山雨絶。
笑看飢鼠上燈檠。

心衰へ面改まり瘦せて崢嶸、
相見て惟應に舊聲を識るべし、
永夜家を思うて何れの處に在る、
殘年知る汝が遠來の情、
人を畏れて默坐癡鈍を成し、
舊を問うて驚呼し死生を半す、
夢斷え酒醒め山雨絶え、
笑つて看る飢鼠の燈檠に上るを、

【詩意】心が衰へ面も亦改まるは世路の崢嶸たるを歷來る爲めである、相見て唯變らないのは舊聲である、永夜に家を思ふそれは何れの處にか在る、吾が殘年に及んで、汝が遠來するは如何なる情であるかを知る、人を畏るる如く默坐する恰も癡鈍の態を成す、舊知の事を問へば驚呼する故人の半は死するを、夢斷え酒醒めて山雨も亦罷むの時、笑うて看る飢鼠の燈檠に上るを、

〔三〕

落第汝爲中酒味。
吟詩我作忍飢聲。
便思絶粒眞無策。
苦說歸田似不情。
腰下牛閒方解佩。
洲中奴長足爲生。
大弨一弛何緣彀。
已覺翻翻不受檠。

落第汝は中酒の味を爲し、
吟詩我は忍飢の聲を作す、
便ち思ふ絶粒は眞に無策、
苦に說く歸田は情ならざるに似たり、
腰下牛閒に方に佩を解き、
洲中奴長じて生を爲すに足る、
大弨一弛何ぞ彀に緣らん、
已に覺ゆ翻翻檠を受けざるを、

【詩意】落第して汝は酒に中毒したるの味を爲し、吟詩の我は朗吟せずして唯忍飢の苦聲を爲す、便ち思ふ絶粒絶食などは眞に意氣地が無い、丁寧に說く歸田歸田と云ふもそれも情でないと思ふ、劍を賣つて牛を買ひ官の窮屈を脫せると昔計りし者もある、大弨の一弛するは弓を引きしぼりたるに緣るのではない、洲中に種種の果樹を栽ゑて生計をも爲すに足る、正しうする器を受けざるのである、

【字解】〔一〕思家在何處　韓退之の示姪孫湘詩に、雲橫秦嶺家何在と、〔二〕知汝　韓退之の示姪詩に、知汝遠來應有意と、〔三〕癡鈍　「顏氏家訓」に、梁世有一侯一嘗對元帝一、飲讌自陳、癡鈍乃成、飈段一、元帝答之曰、飈異涼風一、段非干木一と、〔四〕問舊　杜子美の詩、訪舊半爲鬼と、

〔三〕

落第汝爲中酒味。

落第汝は中酒の味を爲し、

【字解】〔一〕中酒　唐の李廓落第の詩、氣味如中酒、情懷似別人一と、〔二〕忍飢　秦韜玉の詩、却笑儒生把書卷一、學得顏回一忍飢面と、〔三〕絶粒　「後漢范丹傳」に、有時絶粒と、〔四〕無策　「匈奴傳」に、嚴尤曰、周得中策一、漢得下策一、秦無策焉と、〔五〕解佩　「漢書」に、龔遂爲渤海太守一、民有帶持刀劍一者、使賣劍買牛、賣刀買犢、曰何爲帶牛佩犢と、〔六〕洲中奴　水菜でもあれ、園樹でもあれ、活計の助けになるものを指す、〔七〕大弨　弓が絲を張りて無きもの、韓退之の詩、大弨挂壁無由彎と、揚子曰く、見弓之張一兮、弛而不失其良一兮、何謂也、曰撤之而已矣と、撤は弓を正すの器械、〔八〕不受檠　顏師古曰く、檠謂輔正弓弩一と、

【餘論】三律共に韓退之の左遷至二藍關一示二姪孫湘一の詩より粉本し來るものであるが、其の氣魄の盛んなるは到底凌駕することは出來ない、且第一首、不覺、不讀、燈火、燈蘂、第三首、汝爲、爲生、不情、不受、蘇家の法であるか、蘇家の病であるか、

冬至日贈二安節一

我生幾冬至。少小如二昨日一。
當時事二父兄一。上レ壽拜脫膝。
十年閱二彫謝一。白髮催二衰疾一。
瞻レ前惟兄三。顧レ後子由一。
近者隔二濤江一。遠者天一壁。
今朝復何幸。見二此萬里姪一。
憶汝總角時。啼哭爲二梨栗一。
今來能慷慨。志氣堅鐵石。
諸孫行復爾。世事何時畢。
詩成却超然。老淚不レ成レ滴。

冬至の日、安節に贈る

我生幾冬至、少小昨日の如し、
當時父兄に事へ、壽を上り拜して脫膝す、
十年彫謝を閱し、白髮衰疾を催す、
前を瞻れば惟れ兄三、後を顧みれば子由一、
近きもの濤江を隔て、遠きもの天の一壁、
今朝復た何の幸ぞ、此の萬里の姪を見る、
憶ふ汝が總角の時、啼哭は梨栗の爲めなり、
今來りて能く慷慨し、志氣鐵石堅し、
諸孫行復た爾り、世事何れの時か畢らん、
詩成りて却つて超然、老淚滴りを成さず、

【字解】【一】少小　韓退之の詩、少小聚嬉戲と、【二】拜脫膝　兒童の拜する狀を言ふ、【三】兄三　蘇頴濱の「欒城集」伯父墓表、子三人、不欺、官太子中舍、不疑、承議郎通判嘉州、不危、家居不レ求二祿仕一と、【四】顧後　「離騷」に、瞻レ前而顧レ後兮、相觀民之計極と、【五】隔濤江　歐陽永叔の詩、更欲レ呼二子美一、子美隔二濤江一と、【六】總角　「謝安傳」に、總角神識沈敏、風宇條暢と、「詩齊風」に、總角丱兮と、小兒の髮を束ねて角の形に結ぶ、【七】梨栗　淵明責子詩に、通子垂二九齡一、但覓二梨與一栗と、【八】慷慨　「後漢馬援傳」に、慷慨多二大志一と、【九】何時畢　杜子美の詩、憂虞何時畢と、【一〇】老淚　孟東野の詩に、徘徊相思心、老淚雙滂沱と、

【題義】冬至は夏至と同じく賀日である、此の日懷を書して安節に贈りしものである、

【詩意】我れ生れてより幾冬至を閱する、考ふれば少小の時猶ほ昨日の如き思ひである、當時父兄に事へて、冬至の日は父兄の壽を祝うて拜するに膝を脫ぐの狀を記憶して居る、而かも十年を歷れば長上の彫謝を閱して、我頭は白髮衰疾を催すに至る、前を瞻れば伯兄は三人である、後を顧みれば家弟は唯子由一人である、而かも近き子由の如きものは濤江を隔てて居る、遠きものは已に天の一壁である、今朝は復た何の幸福ぞや、此の萬里より來る姪を見る、記憶する汝が總角の時代を、啼哭するは梨栗を求むる爲めである、今や天下の爲め慷慨する志氣を抱き、其の志氣は鐵石より堅固である、諸孫の行も復た同樣で賴もしい、世事は何れの時にか畢るや、詩成りて却つて超然として氣が强い、故に老淚滴るの弱い念は起らない、

【餘論】紀曰く、眞至之語、朴而不レ俚と、詩の中脫膝の語、他に多く見ざる所、「佩文韻府」にも公が此の句あるのみ、屈膝の常語に對して特に奇看を作すのである、小兒拜跪の狀、姿態を極む、

雪後到乾明寺遂宿

雪後乾明寺に到り遂に宿す

門外山光馬亦驚。
階前屐齒我先行。
風花誤入長春苑。
雲月長臨不夜城。
未許牛羊傷至潔。
且看鴉鵲弄新晴。
更須攜被留僧榻。
待聽擺簷瀉竹聲。

門外の山光馬も亦驚く、
階前屐齒我先づ行く、
風花誤つて入る長春苑、
雲月長く臨む不夜城、
未だ許さず牛羊至潔を傷るを、
且看る鴉鵲の新晴を弄するを、
更に須らく攜へて僧榻に留められ、
待聽せん擺簷竹に瀉ぐの聲、

「寰宇記」に、不夜城、在二登州文登縣一、春秋時、萊子所レ置、邑以二日出二于東一、故以二不夜一爲レ名と、

【詩意】寺門外の山光は雪後の燦暉あつて馬も亦驚く、階前の屐齒は我が先登第一である、時ならぬ風花は誤つて長春苑に入り、雲月は長く不夜城に臨む、未だ許さず牛羊來りて雪景の至潔を傷るを、且つ看る鴉と鵲とは雪後の新晴を弄して居る、更に寺僧に攜へられて僧榻に留められる、待つて聽かしめらる擺簷より降りて竹に瀉ぐ聲を、

【字解】〔一〕門外　唐の韋莊の詩、馬驚門外山如レ活と、〔二〕屐齒　白樂天の詩、沙乾屐齒輕と、〔三〕長春苑　樂史の「寰宇記」に、長春宮在二同州朝邑縣、强梁原上一、周武帝保定五年、宇文護所レ築、初名二晉城一、建德二年、名二長春宮一、高祖起二義兵一、自二太原一、赴二京師一、舍二於此宮上一、休レ甲養レ士、後牧二此州一者、多帶二長春宮使一、尉遲偓、「中朝故事」長春宮、園林繁茂、花木無レ所レ不レ有、芳菲長如二三春節一と、〔四〕不夜城

【餘論】紀曰く、似レ用二白馬花頻驚、三更灞陵雪意一、然不レ成レ語、二四俗格、五句拙と、要するに曉嵐は佳什と認めざるのである、余は謂ふ寺と雪とに就いて故典の來歴を用ふれば佳なるものあらんと、

伯父送二先人下第歸蜀詩云。人稀野店休レ安レ枕。路入二靈關一穩跨レ驢。安節將レ去。爲誦二此句一。因以爲レ韻。作二小詩十四首一送レ之

伯父、先人の下第して蜀に歸るを送る詩に云ふ、人稀に野店に枕を安んずるを休めよ、路靈關に入つて穩かに驢に跨るると、安節將に去らんとし、爲めに此の句を誦す、因つて以て韻と爲し、小詩十四首を作り之を送る

索漠齊安郡。從來著放臣。
如何風雪裏。更送獨歸人。

索漠たり齊安郡、從來放臣を著く、
如何ぞ風雪の裏、更に獨歸の人を送る、

【字解】〔一〕索漠　李白の詩、祇應自索漠と、多くは索莫と書す、ものさびしき貌、〔二〕齊安郡　黃州齊安郡、齊安城は今の湖北黃岡縣西北百二十里に在り、〔三〕放臣　王梅谿曰く、在レ唐如二杜牧之一、在二本朝一如二王元之一、是著二放臣一也と、

【題義】伯父が嘗て公の父老泉が下第して蜀に歸るを送る詩あるを以て乃ち其の十四字を韻と爲して、十四首の五絕を作るのである、

【詩意】索漠たる此の齊安郡は、昔から放逐せられた臣の住著する所である、其の索漠たる氣分を持して居る者が、如何ぞ風雪の裏に於て、更に獨歸の人を送るに耐へ得るぞ、

〔一〕

瘦骨寒將(一)斷。衰髯摘更稀。
未甘爲死別(二)。猶恐得生歸(三)。

【字解】〔一〕將斷　寒の極まるを謂ふ、杜子美の詩、杜陵野老骨欲レ折と、〔二〕衰髯　李中漁父の詞、雪鬢衰髯白布袍と、〔三〕死別　杜子美の詩、孰知是死別と、〔四〕得生歸　「後漢班超傳」に、願得二生歸一と、

【詩意】瘦骨は寒に遇うて骨斷折せらるる思がある、其の上に衰髯摘むも稀少である、而かも未だ死別を甘んずる意は起らず、さりながら猶ほ生きて歸るを得るのも恐れる、

〔二〕

〔三〕

日上氣暾(一)江。雪晴光眩(二)野。
記取到家時。鋤耰(三)吾正把。

【字解】〔一〕暾江　暾は旭光の盛なるを謂ふ、〔二〕眩野　雪後の陽光が目をくらますのである、〔三〕鋤耰　鋤はスキ、耰は土ならし器、

【詩意】日上りて先づ江に暾光を發する、雪晴れて曙光が之を照らし野は眩暈せるが如くである、汝は能く記取せよ吾が家に到るの時を、其の時は吾は必ず鋤を把つて自から耕作することを、

〔四〕

月明穿破裘。霜氣澀(一)孤劍。
歸來閉戸坐。默數來時店。

【字解】〔一〕澀　澀滯などと成語して滑の反對、

【詩意】月明の光は下第して歸る者の破裘を穿ち、又霜氣は孤劍を澀らすが如きの嚴である、歸來戸を閉ぢて坐し、沈默して唯來時の店を數ふるのみ、

〔五〕

諸兄無可寄。一語會須酬。
晚歲俱黃髮。相看萬事休。

【詩意】諸兄に向つて一一語を寄せることが出來ない、唯一語會ず酬ゆべしと言うて吳れ、晚歲相俱に黃髮、相看て萬事休すと語らんのみ、

〔六〕

故人如念我。爲說瘦欒(一)欒。
尙有身(二)爲患。已無心可安。

【字解】〔一〕欒欒　「詩檜風」に、棘人欒欒と、瘦せたる貌、〔二〕身爲患　「老子」に、吾所二以有一大患一者、爲二吾有一身と、

【詩意】故人が如し我を念はば、爲めに說けよ東坡は瘦せて欒欒たる貌である、而かも尙ほ身の患を

爲して、已に心の安んべき無しと、

〔七〕

吾兄喜酒人。今汝亦能飲。
一杯歸誦此。萬事邯鄲枕。

【詩意】吾兄は天性酒を喜むの人である、今汝も亦能く飲む、歸來一杯を傾けながら此の語を誦せよ、人間萬事邯鄲一睡の枕である、

〔七〕

吾兄は酒を喜むの人、今汝亦能く飲む、
一杯歸りて此を誦せよ、萬事邯鄲の枕、

〔八〕

東阡在何許。寒食江頭路。
哀哉魏城君。宿草荒新墓。

【字解】〔一〕東阡　阡は田間のアゼ路、東西を阡、南北を陌と謂ふ、〔二〕何許　謝元暉の詩、佳期在何許と、杜子美の詩、我生本飄蓬、今復在何許と、「世說新語」に、張玄與王建武、初不相識、後過于范豫章許と、乃ち皆所と同義に用ふる、〔三〕寒食　食は從來吳晉ジキに訓む、〔四〕魏城君　坡公の夫人王氏である、公撰する「王氏墓志」に、生十有六歲而歸于軾、至治平二年卒、年二十有七と、〔五〕宿草　「禮」に、朋友之墓、有宿草而不哭焉と、

【詩意】東阡は何れの許に在るや、東阡は寒食江頭の路である、哀しいかな魏城君は此に埋めて、最早や宿艸が新墓を荒涼ならしめたであらう、

〔八〕

東阡何許に在る、寒食江頭の路、
哀しい哉魏城君、宿草新墓荒る、

〔九〕

臨分亦泫然。不爲窮途泣。
東阡時一到。莫遣牛羊入。

【字解】〔一〕窮途　「晉阮籍傳」に、率意獨駕、不由徑路、車迹所窮、輒慟哭而返と、

【詩意】分離に臨んで涙の泫然たるを免れない、而かも窮途の爲め泣くのではない、若し東阡に時に一到せば、牛羊を縱に入らしめてはいかぬ、

〔九〕

分れに臨んで亦泫然、窮途の爲め泣くにあらず、
東阡時に一たび到れば、牛羊をして入らしむる莫かれ、

〔十〕

我夢隨汝去。東阡松柏青。
却入西州門。永媿北山靈。

【字解】〔一〕西州門　「晉謝安傳」に、羊曇爲安所愛重、安薨、輟樂彌年、嘗因石頭大醉、扶路唱樂、不覺至西州門、因痛哭而去と、〔二〕北山靈　齊の孔德璋の「北山移文」に、鍾山之英、草堂之靈、馳煙驛路、勒移山庭と、山神の靈を謂ふ、

【詩意】我が夢は汝に隨つて歸り去る、歸りて見れば墓林である東阡は松柏青青である、却つて西州の門に入れば、永く北山の靈に媿づ、

〔十〕

我が夢汝に隨つて去る、東阡松柏青し、
却つて西州の門に入れば、永く媿づ北山の靈に、

〔十一〕

乞播何足羨。負米可忘艱。
莫爲無車馬。含羞入劍關。

〔十一〕

播に乞ふ何ぞ羨むに足らん、米を負ふ艱を忘る可し、
車馬無きが爲めに、羞を含んで劍關に入ること莫かれ、

【字解】〔一〕乞墦　「孟子」に、卒之二東郭墦間之祭者一と、祭餘の飯食を乞うて妻妾を欺むく者、〔二〕負米　「家語」に、子路曰、昔者由也、事二親一之時、常食二藜藿之實一、爲レ親負二米百里之外一、親沒之後、列鼎而食、願レ食二藜藿一、爲レ親負レ米、不レ可二復得一也と、〔三〕車馬　晉の常璩の「華陽國志」に、漢司馬相如、成都人、蜀有二昇僊橋一、相如出レ關、題二其柱一云、大丈夫、不レ乘二赤車駟馬一、不レ過二汝下一也、後奉レ使入レ蜀と、

【詩意】如何に美食も墦間に乞ひたるものは何ぞ羨むに足らんや、貧なるも孝道を知つて米を負ひ以て艱難を忘れよ、車馬鄉俗に誇るの榮達ならざるも、堂堂として劍關に入り羞を含む狀態をしてはいかぬ、

〔十二〕

我坐名過實。讙譁自招損。
汝幸無人知。莫厭家山穩。

【字解】〔一〕我坐　崔瑗の「座右銘」に、無レ使二名過レ實、守レ愚聖所レ臧と、「越絕書」に、名過レ實者滅と、〔二〕招損　「尙書」に、滿招レ損、謙受レ益と、

【詩意】我は高名が實より過ぎたるに依つて、小人の爲め讙譁自から損を招く、汝は幸に人の爲めに名を知られて居ない、故に家山の平穩なるを厭ふな、

〔十三〕

竹筍與練裙。隨時畢婚嫁。

【字解】〔一〕竹筍　「後漢逸民傳」に、戴良有二五女一、疎裳布被、竹筍未展以遣レ之と、

【詩意】疎末ながら竹筍と練裙とを備へ、隨時に婚嫁の禮を畢り、身が無事となり若し思を我に馳せるあらば、征鞍に還た一跨して來游せられよ、

〔十四〕

萬里却來日。一菴仍獨居。
應笑謀レ生拙。團團如磨驢。

【詩意】君が萬里に歸りて却來の日は、吾は依然として一菴に仍ほ獨居の身である、必ず應に笑ふべし吾が謀生の拙にして、其の狀は恰も一所を唯團團する磨驢の如きであるを、

【餘論】此の他人の詩を以て韻と爲すの法、唐人に見ざる所、恐らくは宋人に始まるものであらう、紀曉嵐は第八首を以て第一と爲すものの如きも、特殊に佳きを覺えないのである、

次韻和王鞏六首

君談陽朔山。不レ作一錢直。
巖藏兩頭蛇。瘴落千仞翼。

次韻王鞏に和す　六首

君は談ず陽朔山、一錢の直を作さず、
巖には藏す兩頭の蛇、瘴には落つ千仞の翼、

無事若相思。征鞍還一跨。

無事若し相思はば、征鞍還た一跨せよ、

〔十四〕

萬里却來の日、一菴仍ほ獨居す、
應に笑ふべし生を謀るの拙なるを、團團磨驢の如し、

雅宜驩兜放。頗訝虞舜陟。
暫來已可畏。覽鏡憂面黑。
況子三年囚。苦霧變飲食。
吉人終不死。仰荷天地德。
我來黃岡下。攲枕江流碧。
江南武昌山。向我如咫尺。
春蔬黃土軟。凍筍蒼崖坼。
茲行我累君。乃反得安宅。
遙知丹穴近。爲斷勾漏石。
他年分刀圭。名字挂仙籍。

【自注】君許レ惠二桂州丹砂一。

【字解】【一】陽朔山　桂州の陽朔縣に在り、王定國が謫せられ在住する賓州に近き山、【二】一錢直　「漢淮夫傳」に、平生毀二程不識一、不レ直二一錢一と、【三】兩頭蛇　「賈誼新書」に、孫叔敖、爲二嬰兒一出游、見二兩頭蛇一而埋レ之と、【四】千仞翼　柳子厚の詩、渚行狐作レ孽、林宿鳥爲レ殘、豈知千仞墜、祇爲二一毫差一と、【五】驩兜放　「尚書」に、放二驩兜于崇山一と、唐堯の時、共工と比周して惡をなせし人、崇山は今の湖南大庸縣の西南、【六】虞舜陟　「尚書」に、舜陟レ方乃死と、注に升レ遐南方巡狩、死二于蒼梧之野一と、【七】面黑

雅宜し驩兜の放つに、頗る訝る虞舜の陟るに、
暫く來りて已に畏る可し、鏡を覽て面の黑きを憂ふ、
況んや子は三年の囚、苦霧飲食變ず、
吉人終に死せず、仰いで荷ふ天地の德、
我黃岡の下に來り、枕を攲つ江流の碧に、
江南武昌の山、我に向つて咫尺の如し、
春蔬黃土軟かに、凍筍蒼崖坼く、
茲行我君を累はす、乃ち反りて安宅を得たり、
遙かに知る丹穴近しと、爲めに斷る勾漏石、
他年刀圭を分ち、名字仙籍に挂く、

「戰國策」に、蘇秦面目黧黑と、【八】苦霧　鮑明遠の賦、嚴嚴苦霧、皎皎悲泉と、【九】吉人　善人と同じ、「詩大雅」に、靄靄王多二吉人一と、【一〇】天地德　「周易」に、天地之大德曰レ生と、【一一】黃岡下　齊安郡治、卽ち黃州である、【一二】攲枕　攲は傾攲である、【一三】武昌山　黃州の對岸鄂州に在る山、【一四】我累君　王定國は學問は公の弟子、文章を善く屬る、官は祕書省正字と爲る、公が事に連坐と認められ賓州に貶せらる、【一五】安宅　「毛詩」に、之子于垣、百堵皆作、雖二則劬勞一、其究二安宅一と、【一六】丹穴　丹沙の產する穴、史記貨殖傳にあり、【一七】刀圭　藥匙である、【一八】名字　公の自注に、君許レ惠二桂州丹砂一と、查初白云ふ、烏臺詩案、收二蘇軾有二譏諷文字一、不二申繳一者二十九人、王鞏名列二第一一と、

【詩意】君は陽朔山の事を談ず、而して是の山は一錢の直も無きヤクザの山である、其の理由は巖中には兩頭の毒蛇を藏して、其の瘴霧の毒氣は千仞の上を飛ぶの鳥も落す、こんな山は雅驩兜の如き惡人を放逐するによい、虞舜の如き聖人の陟るのは變に思ふ、暫時の間來るも已に畏るべきである、其の證據には忽ちにして面色が黑くなる、況んや子は三年の久しき此に囚人と爲り、苦霧の爲め每日飲食の味も變ずる、而かも吉人は終に死なない、仰いで天地の德を荷ふ、我は黃岡の下に來りて、枕を攲てて江流の碧なるを見る、江南は武昌山である、我面に對して咫尺の如く、春蔬は黃土軟かなるが故に長じ、凍筍は蒼崖を坼きて出づ、茲の行我は君を累はして居る、君を累はしたるが爲めに我は安宅を得たのである、遙かに想像して知る丹穴が近うして、爲めに勾漏石を斷らるるであらう、他年我等と刀圭を分ちて、同じく名字を仙人の籍に挂けん、

【餘論】紀曰く、頗訝句未二甚解一と、又曰く、覽鏡句拙と、公が詩は公自身外頗る解し難きものが多い、但し此の詩に限るのではない、

〔一〕

(一)少年帶(二)刀劍。但識(三)從軍樂。
老大服(四)犂鋤。解(五)佩付(六)鎔鑠。
雖無(七)獻捷功。會賜(八)力田爵。
敲(九)氷春搗(一〇)紙。刈(一一)葦秋織(一二)箔。
櫟林斬(一三)冬炭。竹塢收(一四)夏籜。
四時俯有(一五)取。一飽天所(一六)酢。
君生(一七)紈綺間。欲(一八)學(一九)非其脚。
左右玉(二〇)纖纖。束薪誰爲(二一)縛。
勿(二二)令聞此語。翠黛(二三)頻(二四)將惡。
笑我一間茅。婦姑紛(二五)六鑿。

〔二〕

少年刀劍を帶び、但從軍の樂を識る、
老大犂鋤に服し、佩を解きて鎔鑠に付す、
捷功を獻ずる無しと雖も、會ま力田の爵を賜ふ、
氷を敲きて春紙を搗き、葦を刈りて秋箔を織る、
櫟林冬炭を斬り、竹塢夏籜を收む、
四時俯して取るあり、一飽天の酢ゆる所、
君紈綺の間に生れて、學ばんと欲するは其の脚にあらず、
左右玉纖纖、束薪誰か縛を爲す、
此語を聞かしむる勿れ、翠黛頻として將に惡しからんとす、
笑ふ我が一間の茅、婦姑六鑿紛たり、

【字解】〔一〕少年　「前漢書韓信傳」に、淮陰少年、侮ニ韓信一曰、雖ニ長大好帶ニ刀劍一怯耳と、〔二〕從軍樂　王粲の詩、從軍有ニ苦樂一、但問所レ從誰と、〔三〕服犂鋤　歸農する、〔四〕鎔鑠　「宋趙安易傳」に、蓋鎔ニ鑠其精液一、トカスのである、〔五〕獻捷功　春秋僖公二十一年、楚人使ニ宜申來獻ニ捷と、〔六〕力田　「漢文帝紀」に、遣使勞ニ賜孝弟力田一、置ニ三老孝弟力田常員一と、〔七〕斬冬炭　「周禮」に、仲冬斬ニ陰木一、仲夏斬ニ陽木一と、〔八〕夏籜　籜は筍の皮、〔九〕所酢　酢は報と酬との義に用ふ、〔一〇〕紈綺　「漢班固敍傳」に、在ニ於綺襦紈袴之間一、非ニ其好一也と、富貴の家に生るる意、〔一一〕非其脚　今日俗語に云ふ「我が立場ではない」と云ふ意、王梅谿曰く、事有レ非ニ素所レ謂習而謾爲ニ之、諺云不ニ是脚一、此語蓋方言耳と、〔一二〕玉纖纖　美人の玉手を謂ふ、家に美人多くあるを謂ふ、〔一三〕翠黛　美人を指す、〔一四〕頻　「楚辭遠游章」に、玉色頻以艷顏兮、精神粹而始壯と、「柳子厚謫龍說」に、澤州郊亭、有ニ奇女一、墜レ地光曄然、少年駭且悅レ之、稍狎焉、奇女頻爾怒と、二說ある、氣の壯なる貌と、怒りて顏色の靑くなる貌と、〔一五〕六鑿　六情を言ふ、「莊子」に、心無ニ天游一、則六鑿相攘と、

【詩意】少年の多くは腰に刀劍を帶びて、意氣揚揚として但從軍の樂を夢む。老大に及んで刀劍を舍てて犂鋤を執り、總ての軍飾を解いて皆鎔鑠に付し去る、從軍して別に殊功を奏したのではないが、會ま朝廷は生活安定として田畝を賜はる、歸農後は氷を敲きて春寒には紙を搗き、又秋日には葦を刈りて以て箔を織り、冬日には櫟林を燒きて以て炭を製造する、春夏秋冬滿足なる收穫がある、財富に一飽するは天の酢ゆる所である、君は寒衣敝袍の反對なる紈綺の間に生長して、而かも學ばんと欲するは其れ等の事ではない、然れども左右は玉纖纖の美人に圍繞せらる、束薪の如く誰か縛を爲すものぞ、かく言ふ我が此の語を美人に聞かしめてはいかぬ、若し聞かしむる時は翠黛憤然として顏色が變ずるであらう、但笑ふ我が一間の茅屋には、金が不足ぢや米が缺乏だとか婦や姑が六鑿を紛爭する、

【餘論】紀曰く、收得少レ力、然此處甚難レ措レ語、亦只得ニ如レ此結束一と、又曰く不レ免ニ牽綴一と、

〔三〕

欲レ結千年實。先(一)摧二月花。
故敎窮(二)到骨。要レ使二壽無(三)涯。
久已逃二天網(四)。何須服(五)日華。
賓州在二何處。爲レ子上(七)栖霞(六)。

【自注】樓名。

【字解】【一】先摧　先催に作る本あり、【二】到骨　杜子美の詩、已訴徵求貧到レ骨、正思戎馬淚盈レ巾と、【三】無涯　韓退之の詩、垂祥紛可レ錄、俾二壽浩無レ涯と、【四】天網　「老子」に、天網恢恢、疎而不レ失と、【五】日華　「內景經」に、東華眞人、服二日月之象一、五臟生レ華、長生不死之道也と、【六】賓州　廣西省思恩府、民國改めて賓陽縣と爲す、【七】栖霞　公の自注に樓名と、

【詩意】千年の實を結ばんと欲する果は、先づ二月の花の因より來るのである、是の故に徹底的貧の因を經來り、以て始めて壽涯り無き果を得、久しく已に天の罪過を受けない、何ぞ煩はしく日華を服するを須ひんや、賓州は何處の邊に在る、子が賓州に在るが爲めに之を望んで眺望佳絕の栖霞樓に上る、

【餘論】紀曰く、語意甚淺と、如何に公の詩なるも逃二天網一の三字、字已に弊と爲る、紀評當れるか、

〔四〕

鄰里有二異趣一。何妨傾蓋新。
殊(一)方君莫レ厭。數(二)面自成レ親。
默坐無二餘事一。回(三)光照二此身一。
他年赤(四)墀下。玉(五)立看二垂紳一。

【字解】【一】殊方　班孟堅が「西都賦」に、殊方異類、至二于三萬里一と、又「董仲舒傳」に、今師異レ道、人異レ論、百家殊レ方、指意不レ同と、方法を互に別にするを謂ふ、【二】數面　陶淵明の語に、數面成二親舊一、況其情過レ此者乎と、數次面會するを言ふ、【三】回光　「禪宗廣燈錄」に、古德云、若能回光返照、直下承當、則千足萬足と、一旦藏れし日が、再び顯はれしを回光と謂ふ、【四】赤墀　宮廷である、【五】玉立　桓元子、薦二譙元彥一表、抗節玉立、誓不二降辱一と、其人如レ玉と云ふの類、

【詩意】鄰里は總てのもの異なる趣味を持つて居る、何ぞ妨げん物珍らしく車蓋を傾けて看又語るを、其の總ての物殊方なるは君厭うてはならぬ、數ば面會すれば厭なものも自然と親近と成る、默坐して餘事無きときは、回光が反つて此の身を照らすのである、今まで他年赤墀の下に在つて、堂堂と玉立高佩垂紳を看飽きて居る、

【餘論】紀曰く、語意甚淺と、回光は元來佛語であつて、詩語でない、何の意義ありて、此に使用せられたのであるか、判じ難い、

〔五〕

平生我亦輕餘子。　平生我亦餘子を輕んず、
晚歲人誰念此翁。　晚歲人誰か此の翁を念はん、
巧語屢曾遭薏苡。　巧語屢ば曾て薏苡に遭ひ、
廋詞聊復託芎藭。　廋詞聊か復た芎藭に託す、
子還可責同元亮。　子還た責む可きは元亮に同じ、
妻却差賢勝敬通。　妻却つて差賢敬通に勝る、
若問我貧天所賦。　若し我が貧を問はば天の賦する所、
不因遷謫始囊空。　遷謫に因つて始めて囊空しからず、

【自注】僕文章雖不逮馮衍。而慷慨大節。乃不愧此翁。衍逢世祖英睿好士。而獨不遇流離擯逐。與僕相似。而衍妻妒悍甚。僕少此一事。故有勝敬通之句。

驕之有、餘子瑣瑣、安足錄哉、因仰天太息、此亦原父之雅趣也、吾後在黃州作詩云、平生我亦輕餘子、晚歲人誰念此翁、蓋記原父語也、【三】巧語「毛詩」に、巧言如簧と、【四】薏苡　藥艸、ズズダマ、「後漢書馬援傳」に、援在交阯、嘗飼薏苡實、用能輕身省慾、以勝瘴氣、南土薏苡實大、援欲以爲種、軍還載之一車、及卒後、有上書譖之者、以爲前所載還、皆明珠文犀、帝益怒と、【五】廋詞　一種のナゾ、隱語である、晉語、有秦客廋詞於朝と、隱伏譎詭の言、【六】芎藭　「ヲンナカヅラ」と香艸、秋に花開き、根を藥用とする、「左傳宣公十二年」に、冬楚子伐鄭、宋華椒救鄭、(中省)還無社、與司馬卯言、號申叔展、叔展曰、有麥麴乎、曰無、有山鞠窮乎、曰無、河魚腹疾奈何、曰目於眢井而拯之、麥麴はモヤシ、消化を助く、山鞠窮は川芎、カハカ

【字解】【一】輕餘子　漢末の禰衡は孔融を重んじ、孔融は亦禰衡を重んじ、其の餘の人間は皆輕視せることを用ふ、【二】念此翁　「東坡詩話」に、昔吾爲鳳翔幕、過長安、見劉原父、留吾劇飲、酒間謂吾曰、昔陳季弼、告陳元龍曰、開遠近之論、謂明府、驕而矜、元龍曰、夫閨門雍穆、有德有行、吾敬陳元方兄弟、淵淸玉潔、有禮有法、吾敬華子魚、淸修疾惡、有識有義、吾敬趙元達、博聞强記、奇逸卓犖、吾敬孔文擧、雄姿傑出、有王霸之略、吾敬劉元德、所敬如此、何

ッラ、風氣を去るもの、內憂を去る藥も無く、外患を除く藥も無しと云ふ謎である、【七】可責　陶淵明に子を責むる詩あり、【八】敬通　公の自注に、僕文章雖不逮馮衍、而慷慨大節、乃不愧此翁、衍逢世祖英睿好士、而獨不遇流離擯逐、與僕相似、而衍妻妒悍甚、僕少此一事、故有勝敬通之句と、敬通は馮衍の字、妻妒悍なれば馮媛姜を畜ふる能はざるのである、

【詩意】平生は我も亦餘子を輕視する、晚歲人誰か此の翁を敬念するぞや、巧語屢ば曾て薏苡に遭ひ、廋詞聊か復た芎藭に託することもある、子の不肖を責むるは陶元亮に同じきも、妻の貞賢なることは敬通に勝る、若し人の我貧を訝かり問ふ者あらばそは天賦であると答ふるのみ、遷謫に因つて始めて貧乏と爲つたのではない、

【餘論】紀曰く、起句太激、三句太露、四句無所取義と、此等の詩は學力の餘、强ひて韻語と爲せしものかと思ふ、紀評の無所取義の四字は、公の靈宜しく甘受すべきである、

〔六八〕

君家玉臂貫銅青。　君が家の玉臂銅青を貫く、
下客何時見目成。　下客何の時か目成を見る、
勤把鉛黃記宮樣。　勤めて鉛黃を把つて宮樣を記す、
莫教弦管作蠻聲。　弦管をして蠻聲を作さしむる莫かれ、
熏衣漸嘆銜香少。　熏衣漸く嘆ず銜香少れなるを、

〔六九〕

【字解】【一】銅青　銅青は衣服の色、以て玉臂の飾裝と爲す、【二】下客　下男、下女と例して知れ、「史記范雎傳注」に、食以下客之具と、【三】目成　「屈原九歌少司命」に、滿堂兮美人、忽獨與予兮目成、「王逸注」に、獨與我睨而相視、成爲親

擁髻遙憐夜語清。　擁髻遙かに憐む夜語の清きを、
記取北歸攜過我。　記取す北歸攜へて我に過ぎ、
南江風浪雪山傾。　南江の風浪雪山傾く、

【自注】君自南江赴任。不一過我。

と、【六】 蠻聲 「世說」に、郝隆作レ詩云、娶隅躍二清池一、桓溫問、娶隅是何物、隆曰、蠻名魚也、溫曰、何以作二蠻語一、隆曰、千里投レ公、始得二蠻府參軍一、那得レ不レ作二蠻語一と、【七】 衒香 「香譜」に、有二開元蘇牙香、化度寺牙香法、雍文徹郎中牙香法一と、衒と牙と音義通ずるのである、象牙にて製せる器にて香を焚くのであらう、【八】 擁髻 「拾遺記」に、伶元買二姿樊通德一、談二趙飛燕姉妹事一、以レ手擁レ髻、凄然泣下と、モトドリを持つこと、【九】 過我 公の自注に、君自南江赴任、不レ一二過我一と、

【詩意】 君が家の美人は玉臂に銅青を貫くの飾を爲す、下客は何れの時にか其の美容を目成することが出來るか、勤めて鉛黃を把つて宮女の姿態に傚ふ、宮女の姿態に傚ふからには弦管も蠻人の聲を作さしめてはいかぬ、衣を熏ずる香は漸く牙香が少くなりたるを歎じ、又髻を擁して遙かに夜語の清きを憐まざるを得ない、我は記憶する君が北歸のときは此の美人を攜帶して我が家に過ぐと言うたことを、然るに不幸南江の風浪は雪山傾くの荒景にて君は竟に攜へて來ない、

【餘論】 紀曰く、三四却有二風調一と、

親一也と、成の義は好を結ぶこと、【四】 鉛黃 陶翰の詩、終年事二鉛黃一と、是は文字を校勘する義、今は鉛白と同じく女の化粧する具、黃色の粉を以て額上に施すのである、【五】 宮樣 劉夢得の詩、高髻雲鬟宮樣妝

元豐四年十月二十二日。謁二王文父齊萬於江南。坐上得陳季常書。報是月四日。种諤領レ兵。深入破二殺西夏六萬餘人。獲馬五千匹。衆喜忭唱レ樂。各飲二一巨觥一

元豐四年十月二十二日、王文父齊萬に江南に謁す、坐上陳季常の書を得たり、報ずは是の月四日、种諤兵を領して、深く入り、西夏の六萬餘人を破り殺し、馬五千匹を獲たりと、衆喜び忭し樂を唱へ、各の一巨觥を飲む

聞說官軍取二乞閻一。　聞く說らく官軍乞閻を取ると、
將軍旗鼓捷如レ神。　將軍旗鼓捷きこと神の如し、
故知無定河邊柳。　故に知る無定河邊の柳、
得レ共中原雪絮春。　共にするを得たり中原雪絮の春、

【字解】 【一】 乞閻 人名か地名か不詳、虜語に驄馬を乞銀と呼ぶ、或は是か、【二】 將軍 「宋史」に、元豐四年八月丙午、种諤、將二鄜延及畿內兵九萬三千一、出二綏德城一、九月諤圍二米脂一、夏人來救、戰二于無定河一、河邊骨、猶是深閨夢裏人と、大破レ之と、【三】 無定河 一名桑乾河と云ふ、陝西の邊外、鄂爾多斯より出で、東南に流れて黃河に入る、陳陶の隴西行に、可レ憐無定

【題義】 王文父齊萬を訪うて、其の席上王師大捷せりとの報を聞いて以て此の詩を作る、

【詩意】 聞く今官軍が乞閻を取るとの快報を、將軍の旗鼓は敏捷にして鬼神の如くである、是の故に

知る無定河邊の柳も今より邊土の柳ではない、中原雪絮の春を共にするを得たのである、

【餘論】紀曰く、措レ語甚拙、似レ非二東坡筆墨一と、公の作たるは疑ふべからず、唯所謂率爾にして成るもの、巧拙は論外である、

聞二洮西捷報一

洮西の捷報を聞く

漢家將軍一丈佛。　漢家の將軍一丈の佛、

詔賜天池八尺龍。　詔して賜ふ天池八尺の龍、

露布朝馳玉關塞。　露布朝に馳す玉關の塞、

捷書夜到甘泉宮。　捷書夜到る甘泉宮、

似聞指揮築二上郡一。　聞くに似たり指揮して上郡を築くを、

已覺談笑無二西戎一。　已に覺ゆ談笑して西戎なし、

放臣不見天顏喜。　放臣は見ず天顏の喜びを、

但驚草木回春容。　但驚く草木回春の容に、

【字解】〔一〕一丈佛　「漢武故事」に、昆耶、殺二休屠王一、以二其衆一來降、得二其金人一、置二之甘泉宮一、金人皆高丈餘と、蠻土にて造れる多くの銅佛である、〔二〕八尺龍　「公羊傳隱公元年注」に、天子馬曰レ龍、高七尺以上と、〔三〕露布　戰捷の功を帛に書して朝に奏す、之を露布と云ふ、緘封の如く祕密にせざるのである、又軍中の檄文をも云ふ、〔四〕玉關　甘肅燉煌郡、長安を去る三千六百里、〔五〕捷書　杜子美の詩、捷書夜報清晝同と、〔六〕上郡　秦置く、并州に屬す、〔七〕談笑　杜子美の詩、談笑無二河北一と、〔八〕放臣　漂謫の身なれば謂ふ、〔九〕天顏喜　杜子美の詩、天顏有レ喜近臣知と、

【題義】洮西より來る捷報を聞いて喜んで作る、

【詩意】昔漢家の將軍は洮西を伏して金の佛像を分捕する、其の功を賞し詔を下して天池に產する龍馬を賜はる、今も亦露布が玉關の塞より朝に馳せて來る、捷書は夜中に甘泉宮に奏上する、又眼の前に將軍が諸兵を指揮して上郡を築くの威風を聞くが如く、已に覺る將軍が談笑する餘勇のあるは眼中に西戎なぞ認めて居らないことを、我は今都を去る邊境の放臣なれば天顏の喜びを見ることが出來ない、但驚くことには無情の草木ですら總て春容を回したるに、

【餘論】紀曰く、露布卽捷書、未レ免二犯複一、此詩本集不レ載、疑王詔之黨、獵二取賜御書詩一爲レ之、以二東坡一爲レ重耳と、曉嵐以外の詩家も亦疑ふ所のもの、然りと雖も孰れが眞の本集と定むる能はざるもの、如何ぞ其の一本を信じて、諸本を疑ふを得んや、但露布と捷書とを別義として用ひたるは、眞に是れ犯複である、

記夢回文二首

夢を記す、回文二首

十二月二十五日大雪。始晴。夢人以雪水烹小團茶。使美人歌以飲余。夢中爲作回文詩。覺而記其一句云。亂點餘花唾碧衫。意用飛燕故事一

也。乃續之爲二絶句一云。

【訓讀】十二月二十五日大雪、始めて晴る、夢に人雪水を以て小團茶を烹、美人をして歌うて以て余に飲ましむ、夢中爲めに回文詩を作る、覺めて其の一句を記す、云ふ、亂點して餘花碧衫に唾すと、意は飛燕が故事を用ふるなり、乃ち之に續ぎて二絶句を爲ると云ふ、

〔一〕
酡顏玉盌捧纖纖。
亂點餘花唾碧衫。
歌咽水雲凝靜院。
夢驚松雪落空巖。

〔二〕
酡顏玉盌捧げて纖纖、
亂點して餘花碧衫に唾す、
歌咽んで水雲靜院に凝り、
夢は驚く松雪空巖に落つるに、

【字解】〔一〕酡顏　「楚辭」に、美人既醉、朱顏酡些と、顏色の赤くなる貌、〔二〕纖纖　王梅谿曰く、纖纖當レ作二攕攕一と、十五成の韻、纖は十四鹽の韻、字義は同じく女子の手の美なるを云ふ、〔三〕唾碧衫

【題義】夢中に一句を得て醒めて一詩を爲り回文詩と爲したものである、

【詩意】美人が玉盌を纖纖たる手で捧げて居る、亂點する餘花は碧衫に唾するの狀である、歌聲は咽んで水雲が靜院に凝結するかと思ふ、夢中に我は驚く松雪が空巖に落ちるかと、

「趙飛燕外傳」に、后與二其妹倢伃一坐、后誤唾二倢伃袖一、倢伃曰、姊唾染二人紺裳一、正似二石上花一、假令、尙方爲レ之、未レ必能如レ此、衣之華、以爲石華廣袖と、【四】落空巖　杜子美の詩、晴雪落二長松一と、

〔一〕
空花落盡酒傾缸。
日上山融雪漲江。
紅焙淺甌新火活。
龍團小碾鬬晴窗。

〔二〕
空花落ち盡して酒缸を傾く、
日上りて山融し雪は江に漲る、
紅は淺甌を焙して新火活す、
龍團小碾晴窗に鬬はす、

【字解】〔一〕紅焙　焙は茶をはうじること、〔二〕淺甌　淺き瓶、カメである、〔三〕龍團　極めて上品の茶、

【詩意】空花は落ち盡して酒は一缸を傾け飲む、日が上り山は融色を呈して雪は江に漲る、茶を焙して淺甌は新火活するの盛んなる狀である、其の茶は龍團の美である、是を小碾にして晴窗に其のきしる狀を鬬はして居る、

三朶花

房州通判許安世。以レ書遺レ予言。吾州有二異人一。常戴二三朶花一。莫レ知二其姓名一。郡人因以二三朶花一名レ之。能作レ詩。皆神仙意。又能自寫レ眞。人有二得レ之者一。許欲以二一本一見惠。乃爲作二此詩一。

三朶花

【訓讀】房州通判許安世、書を以て予に遺りて言ふ、吾州に異人あり、常に三朶花を戴く、其の姓名

を知ること莫し、郡人因つて三朶花を以て之に名く、能く詩を作る、皆神仙の意、又能く自から眞を寫す、人之を得る者あらば、許すに一本を以て惠まれんと欲す、乃ち爲めに此の詩を作る、

學道無ㇾ成鬢已華。　學道成ること無く鬢已に華、
不ㇾ勞千劫漫烝砂。　勞せず千劫漫に砂を烝すを、
歸來且看一宿覺。　歸來且つ看る一宿覺、
未ㇾ暇遠尋三朶花。　未だ暇あらず遠く三朶花を尋ぬるに、
兩手欲ㇾ遮瓶裏雀。　兩手遮らんと欲す瓶裏の雀、
四條深怕井中蛇。　四條深く怕る井中の蛇、
畫圖要ㇾ識先生面。　畫圖識らんと要す先生の面、
試問房陵好事家。　試みに問ふ房陵好事の家、

【字解】【一】蠶已華　盧綸の詩、去矣謝ニ親愛一、知余鬢已華と、【二】烝砂　「首楞嚴經」に、佛云若不ㇾ斷ㇾ淫、修ニ禪定一者、如ㇾ烝ニ砂石一、欲ニ其成ㇾ飯、經ニ百千劫一、只是熱砂と、【三】一宿覺　「傳燈錄」に、永嘉元覺禪師、詣ニ曹溪一、初到振ㇾ錫、繞ニ六祖一三匝、卓然而立、須臾告ㇾ辭、祖曰返太速乎、曰本自非ㇾ動、豈有ㇾ速乎、祖嘆曰、少留一宿、時謂ニ一宿覺一と、【四】瓶裏雀　人身を瓶に譬へ、精神を雀に譬ふ、四條の條は繩の事、繩を以て人身を樹上に縛す、【五】井中蛇　繩が切るれば身井に墮し、蛇に齧まるるのである、【六】房陵　「輿地紀勝」に、三花洞、在ニ房陵福溪巖下一と、

【題義】房州通判の官たる許安世が、書を寄せて、房州に一異人ありて、頭上に常に三朶花を戴く、衆人は其の人の名を知らぬから三朶花を以て其の人を呼ぶ、其の人詩も作り畫も作る、公乃ち詩を作りて其の事を言ふ、

【詩意】道を學んで成就せざる中に鬢は已に華白となる、勞せず千劫の長き間漫に砂を烝すの徒爾を、歸り來りて且つ看る一宿覺の機敏なるを、未だ吾は遠く三朶花を尋ぬるの暇がない、戒定の兩手を以て身が心慾の爲め惱まさるるを遮らんと欲するも、又煩惱の繩に縛せられ樹上に在つて怕るる井中の蛇を、畫圖を見て以て先生の面を識らんと思ひ、試みに之を房陵の好事家に問ふ、

【餘論】此等の詩は所謂邪魔が公の胷中に入つて、公が平生の宗旨を紊亂したるもの、紀曉嵐は五六二句を抹殺し去るが、五六のみでない、一二の句も意義を成さず、一宿覺の如きも、方角違ひのものである、

次韻陳四雪中賞梅

陳四が雪中賞梅に次韻す

臘酒詩催ㇾ熟。寒梅雪鬬ㇾ新。　臘酒詩熟を催し、寒梅雪新を鬬はす、
杜陵休ㇾ嘆ㇾ老。韋曲已先ㇾ春。　杜陵老を嘆ずるを休めよ、韋曲已に春に先んず、
獨秀驚ニ凡目一。遺英臥ニ逸民一。　獨秀凡目を驚かし、遺英逸民臥す、
高歌對ニ三白一。遲暮慰ニ安仁一。　高歌三白に對し、遲暮安仁を慰す、

【字解】〔一〕臘酒　杜子美の詩、蟻浮仍臘味と、〔二〕嘆老　杜子美の早梅詩、江邊一樹垂垂發、朝夕催レ人自白頭と、〔三〕韋曲　長安の地名、杜子美の詩、韋曲花無頼と、〔四〕獨秀　陳謝燮の早梅詩に、迎レ春故早發、獨自不レ疑レ寒、畏レ落レ衆花後一、無二人別意看一と、〔五〕臥逸民　東漢の袁安が雪中に高臥するを謂ふ、遺逸の士、之を逸民と呼ぶ、〔六〕對三白　王梅谿曰く、西人語曰、要レ宜レ麥見二三白一、臘月に三度雪を見るを宜しとするのである、〔七〕慰安仁　晉潘岳、字は安仁、閒居賦を作りて曰く、自二弱冠一涉二於知命之年一、八徙レ官、一進レ階、再免、一除名、一不レ拜レ職、遷者、三而已矣、雖二通塞有レ遇、抑亦拙之效也、其辭曰、人生安樂、孰知二其他一と、

【題義】陳四字は季常が雪中賞梅詩に次韻するもの、

【詩意】臘酒の熟する候には詩も亦熟を催す候である、詩の材料たる寒梅も已に新妝を鬬はして居る、杜陵の詩翁も老を嘆じてはならぬ、韋曲は詩翁の平生敬慕の處それが已に他處より早春である、萬花未だ開かざるに獨秀は凡目を驚かすに足る、人にしては逸民が雪中に臥するの高風がある、高歌して以て三白に對するによろし、君は安仁と同じく遲暮を慰するに足る身分である、

【餘論】坡公の五律、溫藉に近きものである、

正月二十日。與二潘郭二生一。出レ郊尋レ春。忽記去年是日同至二女王城一作レ詩。乃和二前韻一

正月二十日、潘郭二生と、郊を出で春を尋ぬ、忽ち記す去年是の日、同じく女王城に至り詩を作るを、乃ち前韻に和す

東風未肯入二東門一。　東風未だ肯て東門に入らず、
走レ馬還尋去歲邨。　馬を走らして還た尋ぬ去歲の邨、
人似二秋鴻一來有レ信。　人は秋鴻に似て來りて信あり、
事如二春夢一了無レ痕。　事は春夢の如く了に痕無し、
江城白酒三杯釅。　江城の白酒三杯釅に、
野老蒼顏一笑溫。　野老の蒼顏一笑溫なり、
已約年年爲二此會一。　已に約す年年此の會を爲さんと、
故人不レ用賦二招魂一。　故人用ひず招魂を賦するを、

【字解】〔一〕有信　「禮記」に、季秋之月、鴻雁來賓と、〔二〕春夢　白樂天の詩、人如二春夢一幾多時、〔三〕三杯釅　釅は釅酒、コキサケ、李白の詩、三杯通二大道一、一斗合二自然一と、〔四〕招魂　屈原に招魂章あり、

【題義】元豐四年の正月二十日に潘郭の二生を伴ひ、女王城東の禪莊院に游んで詩を作る、今年も其日に逢うて再游し、前年の韻を以て再び作る、

【詩意】節は已に春ではあるが、まだ東風は吹いて東門に入らない、が馬を走らして去歲游びし邨に再游して見る、恰も人間は秋鴻に似て來るに信がある、蓋し事は春夢の如く了に何等の痕跡も殘らない、江城の白酒は三杯にて醉ふ釅なるが故である、野老は蒼顏なるも一笑して溫存である、已に期約

する年年此の會合を爲すことを、故人は招魂まで賦して喚び起す必要はない、

【餘論】前詩に比すれば稍や遜色はあるが、猶ほ大家の面目を見る、

是日偶至野人汪氏之居。有神降於其室。自稱天人李全字德通。善篆字。用筆奇妙。而字不可識。云天篆也。與予言。有所會者。復作一篇。仍用前韻

是の日偶ま野人汪氏の居に至る、神あり其の室に降り、自から天人李全字は德通と稱す、篆字を善くす、用筆奇妙、而して字は識るべからず、云ふ、天篆なりと、予と言ふ、會する所の者あり、復た一篇を作り、仍ほ前韻を用ふ、

(一)酒渴思茶漫扣門。
那知竹裏是仙邨。
已聞(二)龜策通神語。
更看(三)龍蛇落筆痕。
(四)色瘁形枯應笑屈。
(五)道存目擊豈非溫。
歸來獨掃空齋臥。
猶恐微言入夢魂。

酒渴して茶を思ひ漫に門を扣く、
那ぞ知らん竹裏是れ仙邨、
已に聞く龜策通神の語、
更に看る龍蛇落筆の痕、
色瘁形枯應に屈を笑ふべし、
道存目擊豈溫にあらずや、
歸來獨り空齋を掃うて臥す、
猶ほ恐る微言夢魂に入るを、

【字解】〔一〕酒渴　「裴硎傳奇」に、長慶間、裴航歸二鞏下一、經二藍橋驛一、因レ渴乞二漿於第舍老嫗一、嫗咄曰、雲英(女名)擊二一甌漿一來、郎君要レ飲、航異レ之、俄於二葦箔下一、出二雙手一捧レ瓷飲レ之、眞玉液也、航謂レ嫗曰、願納二厚禮一、娶レ之可乎、嫗乃使レ求二玉杵臼杵刀圭藥一、百日、以レ女妻レ之、遂入二玉峯洞中一、超爲二上仙一と、此の事を暗示する、〔二〕龜策　龜策を以て卜すれば、百の吉凶皆當る、〔三〕龍蛇　詩文を書する筆勢の奔放なるを譬ふ、「法書苑」に、吳季札墓志、變化開合、若二龍蛇盤據一と、〔四〕色瘁　「史記屈原傳」に、顏色憔悴、形容枯槁と、〔五〕道存　「莊子田子方篇」に、溫伯雪子適レ齊、舍二於魯一、仲尼見レ之而不レ言、子路曰、吾子欲レ見二溫伯雪子一久矣、見レ之而不レ言、何邪、仲尼曰、若二夫人一者、目擊而道存矣、亦不レ可二以容一聲矣と、

【題義】女王城に游ぶの日、偶ま野人汪氏の居宅に至る、坐に神と稱し天人李德通と稱するものあり、善く篆字を書す、而かも其字は讀む能はず、天上の篆書なりと云ふ、談話するに會得する者の如くである、乃ち此の詩を作る、

【詩意】酒の爲めに渴を覺え乃ち茶を思うて漫に野人の門を扣く、那ぞ知らんや此の野人の家は卽ち是れ仙邨であると云ふことを、已に能く聞く龜策すれば神の語に通ずると云ふことを、今日更に看る龍蛇が筆端に落ちて痕あるを、顏色が憔悴し形容が枯槁すると叫んだ屈原は笑ふべきである、一反目擊して直ちに道を會得して居らるるを悟るは溫伯雪子の如き人である、辭して家に歸り獨り空齋を掃うて臥せば、猶ほ恐らくは天人の言はれた事は夢魂に入るであらう、

【餘論】紀曰く、溫伯雪子、用二一溫字一似レ未と、公と雖も韻の窮策は論ずるまでも無い、言ふに足

らざる市井の奇人を、之を文に入れ、詩に入るるは公の最も得意とする所、公も亦一種奇を好むの癖あるか、

浚井

古井沒荒萊。不食誰爲惻。
瓶罌下兩綆。蛙蚓飛百尺。
腥風被泥滓。空響聞點滴。
上除青青芹。下洗鑿鑿石。
沾濡愧童僕。杯酒暖寒栗。
白水漸泓渟。青天落寒碧。
云何失舊穢。底處來新潔。
井在有無中。無來亦無失。

【字解】【一】瓶罌　カメとモタヒ、韓退之の詩、瓶大餅罌小、所レ任各有レ宜と、綆はツルベナハ、【二】蛙蚓　ミミズ、多くは蚯蚓に作る、以て綆の長さに譬ふ、【三】腥風　韓退之の詩、腥風遠更飄と、【四】鑿鑿「毛詩唐風」に、揚之水、白石鑿鑿と、水の鮮明なるを云ふ、【五】沾濡　衣服なぞをうるほす、【六】寒栗　樂天の詩、朝傾暖寒酒と、【七】泓渟　柳宗元の文、散爲二疎林一、洄爲二清池一、寥廓泓渟と、水がたまつて深くなりたるを云ふ、【八】有無中　「首楞嚴經」に、鑿レ井求レ水、出レ土一尺、于レ中則有二一尺虛空一、此空爲レ當二因レ土所レ出、因レ鑿所レ有、無レ因自生一と、

【題義】古井戸を浚渫して其の事を作る、

【詩意】古井は久しく荒萊の中に沒してある、知らずして飲まず無しと言うて誰か之を惻むや、瓶罌を二本の綆に付けて下せば、蛙蚓が飛ぶこと百尺の深さである、忽ち腥き風が瓶罌に泥滓を被つて來る、其の空間には點滴の響あるを聞く、而して上には青青の芹を除き、下には鑿鑿の石を洗ふ、我は衣を沾濡したる狀は童僕にも愧づ、是に於て杯酒は寒栗を暖めて飲む、(俗、酒をカンして飲む)白水は漸く泓渟にして、青天の寒碧が影を落すに至る、云何ぞ舊穢を消滅して、底の處よりか此の如き新潔の水出で來るや、井は深暗有無の中に在るも、水は元來來も無ければ亦失も無い、

【餘論】紀曰く、入レ禪是東坡習選、此却太似二偈頌一と、查初白云ふ、三四新警と、結句の十字全く偈頌なるも、其の他の十四句は偈頌にあらず、尋常の詩語である、

紅梅三首

怕愁貪睡獨開遲。
自恐冰容不入時。

【字解】【一】冰容　晉の王融の詩、冰容慙遠鑒と、【二】小紅　杜子美の詩、塞柳行疎翠、山梨結小紅

故作小紅桃杏色。　故に小紅桃杏の色を作し、
尚餘孤瘦雪霜姿。　尚ほ餘す弘瘦雪霜の姿、
寒心未肯隨春態。　寒心未だ肯て春態に隨はず、
酒暈無端上玉肌。　酒暈端無く玉肌に上る、
詩老不知梅格在。　詩老は知らず梅格の在るを、
更看綠葉與青枝。　更に看る綠葉と青枝とを、

【自注】石曼卿紅梅詩云、認レ桃無二綠葉一、辨レ杏有二青枝一。

と、【三】玉肌　韋莊の詩、玉肌香脈透二紅紗一と、【四】詩老　孟東野の詩、唯應レ待二詩老一と、【五】綠葉　公の自注に、石曼卿紅梅詩云、認レ桃無二綠葉一、辨レ杏有二青枝一と、

【詩意】怕愁して睡を貪り目を開くことは遲い、花神は自から恐るる冰容の時期に入らざることを、是の故に小紅を呈して桃杏の色を作すのみならず、尚ほ孤瘦雪霜を冒すの姿を餘して居る、其の凌寒の心は未だ肯て春態に隨はない、が酒暈は端無くも玉肌の表面に上る、世の中の詩老は紅梅の資格は此の如き處にあるを知らず、更に綠葉と青枝とを許看する、

【餘論】紀曰く、細意鈎剔、却不レ入二纖巧一、中有二寓託一、不レ同二刻畫形似一故也と、公同時の人、石延年紅梅の詩を作る、梅好唯傷レ白、今紅是絕奇、認レ桃無二綠葉一、辨レ杏有二青枝一、烘笑從二人贈一、酡顏任二笛吹一、未レ應二嬌意急一、發レ赤怒二春遲一と、公此中二四の句を評して曰く、此至陋語、郁學堂中態也と、費袞の「梁谿漫志」に曰く、世之淺近者、做二月詩一便說レ明、做二雪詩一便說レ白、東坡作レ詩力去二此弊一と、認桃の二句は紅梅の形似を說く者にして、兒童と同じきを笑ふものである、蓋し此等の纖巧自から喜ぶもの、宋人の常態、獨り石曼卿のみにはあらず、況んや石の五律認桃の十字を除き去れば餘の三十字は兒童より以下なるもの、公が此の十字を邨夫子の語と評するは、つまり全首を以て落第點を與へたるものである、是に由つて石の小家であり、公の大家である事が判る、方虛谷の「瀛奎律髓」にも三首中此の一首を取るは識がある、不入、不知、不の同字は疵である、

〔一〕

雪裏開花却是遲。
何如獨占上春時。
也知造物含深意。
故與施朱發妙姿。
細雨裛殘千顆淚。
輕寒瘦損一分肌。
不應便作天桃杏。

〔二〕

雪裏開花却つて是れ遲し、
何如ぞ獨り占む上春の時、
也知る造物の深意を含むを、
故に施朱を與へて妙姿を發す、
細雨裛殘す千顆の淚、
輕寒瘦損す一分の肌、
應に便ち天桃杏と作るべからず、

【字解】【一】獨占　秦韜玉牡丹詩、獨把二一春一皆占斷、固留二三月一始敎開と、【二】發妙姿　唐の歐陽詹の詩、桃李有二奇質一、樗櫟無二妙姿一と、

數點微酸已著枝。　數點の微酸已に枝に著く、

【詩意】雪裏に花を開くは却つて是れ遲しと云ふも、時節から言へば上春の魁を占領するものである、也知る天の造物主は深意を含んで爲す所、故に施朱を付與して妙姿を發せしむるもの、細雨には裒ひ殘す千顆の淚痕を、輕寒には瘦損する一分の肌膚を、併し乍ら彼の天桃杏の質とは相違がある、それは數點の微酸が實と爲りて已に枝に著けてある、

〔三〕

幽人自恨探春遲。
不見檀心未吐時。
丹鼎奪胎那是寶。
【自注】朱砂紅銀謂之不奪胎色。
玉人頩頰更多姿。
抱叢暗蘂初含子。
落盞穠香已透肌。
乞與徐熙畫新樣。

〔三〕

幽人自から恨む春を探るの遲きを、
見ず檀心未だ吐かざる時、
丹鼎奪胎那ぞ是れ寶、
玉人頩頰更に多姿、
叢を抱くの暗蘂初めて子を含み、
盞に落つる穠香已に肌に透る、
乞ふ徐熙に與へて新樣を畫かん、

【字解】〔一〕頩頰　前に辨ず、玉人怒るときは、頰紅色を爲す、以て紅梅に譬ふ、〔二〕多姿　陸士衡の文賦に其爲レ物也多姿と、〔三〕徐熙　沈存中の「夢溪筆談」に、國初江南布衣徐熙、長三于畫二花竹一、以二墨筆一畫レ之、殊草草、略施二丹粉一、神氣迥出、別有二生動之意一と、〔四〕璀璨　花の光る貌、吳筠の詩、璨璨列二玉華一と、

竹間璀璨出斜枝。　竹間璀璨斜枝を出す、

【詩意】幽人は自から遺恨に思ふ春を探るの遲かりしことを、檀心の未だ吐かざるの時期を見ずに過ぎた、丹鼎が奪胎なぞと稱するが那ぞ是れ寶である、玉人が頩頰なるは言ふに言はれぬ姿である、抱叢の暗蘂は初めて子を含む、落盞の穠香は已に肌に透る、乞ふ徐熙に與へて新樣を畫かしめたい、竹間に璨璨として斜枝を出すの圖を、

【餘論】紀曰く、後二首蛇足と、公に在つては蛇足の感あるも、他人に在つては丹鼎の重價がある、石曼卿輩の一指も染むる能はざるもの、

次韻子由寄題孔平仲草菴

子由が孔平仲の草菴に寄題せるに次韻す

逢人欲覓安心法。
到處先爲問道菴。
盧子不須從若士。
蓋公當自過曹參。

人に逢うて安心の法を覓めんと欲す、
到る處先爲に道菴を問ふ、
盧子は須ひず若士に從ふを、
蓋公は當に自から曹參に過ぐべし、

【字解】〔一〕安心法　「傳燈錄」に、慧可曰、覓レ心了不可得、祖曰、與レ汝安心竟と、〔二〕盧子　「神仙傳」に、燕人盧敖、至二蒙谷之山一、而見二若士一焉、方蹠二龜殼一而食二蜃蛤一と、

羨君美玉經三火。　羨む君が美玉三火を經、
笑我枯桑困八蠶。　笑ふ我が枯桑八蠶に困むを、
猶喜大江同一味。　猶ほ喜ぶ大江の同一味なるを、
故應千里共清甘。　故に應に千里清甘を共にすべし、

【題義】孔平仲が江州の官舎に在つて、而かも艸菴に住したるを子由が其の事を歌ふ、公之に次韻して作る、

【詩意】人に逢へば安心の法を授からんと覓むる故に、官游して到る處に先づ高人の道菴を訪問する、盧敖は已に道を知るもの何ぞ若士に從游するに及ばん、蓋公の如き人の處へは曹參が訪ふは宜し、羨む君が心中の美玉は已に三火を經て居るも、笑ふ我が枯桑には八蠶は勿論一蠶を得るにも困む、猶ほ喜ぶ大江の水は何れの處も同一味である、是の故に千里を隔るも飲む味は共に清甘である、

【餘論】仙佛同架にして道菴の清疎を說く所、公の面目躍如たるものがある、

天風」と、【六】八蠶　左太冲の「吳都賦」に、再熟之稻鄉、貢八蠶之繭」と、稻は一年に二度熟し、蠶は一年に八度育するのである、【七】同一味　「華嚴經」に、譬如衆水、皆同一味、隨器異故、水有差別、無念慮」と、

【三】蓋公　「漢書」に、曹參爲齊相、避正堂、舍蓋公」と、蓋公は趙概を謂ふ、【四】三火　白樂天の詩、大圭廉不割、利刀用不缺、當其斬馬時、良玉不如鐵、置鐵在洪爐、鐵消易如雪、良玉同其中、三日燒不熱と、【五】枯桑　古詩に枯桑知

二蟲

君不見水馬兒。　君見ずや水馬兒、
步步逆流水。　步步流水に逆ふ、
大江東流日千里。　大江東流する日に千里、
此蟲趯趯長在此。　此の蟲趯趯長く此に在り、
君不見鷃濫堆。　君見ずや鷃濫堆、
決起隨衝風。　決起衝風に隨ふを、
隨風一去宿何許。　風に隨つて一去何許に宿するや、
逆風還落蓬蒿中。　逆風還た落つ蓬蒿の中、
二蟲愚智俱莫測。　二蟲愚智俱に測る莫く、
江邊一笑無人識。　江邊一笑人の識るなし、

【詩意】君は見ないか彼の水馬兒てふ水蟲を、水上を步步する流れに逆うて行く、大江の水は東流して日に千里である、然るに此の蟲は趯趯としながら長く此に止まる、又君見ないか鷃濫堆てふ蟲を、

【字解】【一】水馬兒　杜子美の詩、雁兒爭水馬」の句あるも、雁は蟲にあらず、後賢の敎を乞ふ、又考ふ莊子逍遙游に之二蟲又何知とあるは、蜩と鷽鳩とを指して二蟲と云ふにあれば、蜩は確かに蟲なれど、鷽鳩は鳥である、然らば此の水馬兒も「太平御覽」に、海中有魚似馬、或黃或黑、名作水馬」とあるを用ひしものか、【二】趯趯　「詩召南」に、草蟲趯趯と、跳る貌である、【三】鷃濫堆　王梅谿曰く、方言阿如軋、亦名鷃濫堆」とあるが、和名は不詳である、【四】決起　「莊子逍遙篇」に、我決起而飛と、【五】隨風　劉禹錫の詩、隨風好去宿誰家」と、

此の蟲は一度決起すれば衝風の勢に隨つて天に上る、風に隨つて一去何許に宿するやを知らない、又風に逆へば還つて蓬蒿の中に落つるのである、此の二蟲孰れか愚孰れか智であるか吾は測ることが出來ない、江邊に立つて一笑するも人の識る者はない、

【餘論】紀曰く、小品寓意、却不二小巧一と、梅谿末句を評して、杜子美縛雞行、雞蟲得失無二了時一、注二目寒江一倚二山閣一同意と曰ふは頗る當る、

陳季常見過三首

仕宦常畏人。退居還喜客。
君來輒館我。未覺雞黍窄。
東坡有二奇事一。已種二十畝麥一。
但得二君眼青一。不レ辭奴飯白。

【字解】〔一〕畏人　魏の文帝の詩、客子常畏レ人と、〔二〕館我　「檀弓」に、子夏曰、賓客至無レ所レ館、夫子曰、生於レ我乎館、死於レ我乎殯と、〔三〕君眼青　「晉書」に、阮籍、又能爲二青白眼一、見二禮俗之士一、以二白眼一對レ之、及レ見二嵇喜一、籍作二白眼一、喜不レ懌而退、喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴而造焉、籍大悅、乃見二青眼一、由レ是禮法之士、疾レ之若レ仇と、〔四〕奴飯白　杜子美の詩、與二奴白飯一馬青芻と、

【詩意】仕宦の身は上下を顧慮して常に人を畏る、退居すれば顧慮する所無ければ還つて客を喜ぶ、今君來りて我が家を館とする、待遇の疎末なるは少しも頓著しない、東坡には奇事がある、東坡には已に十畝の麥を種う、君が青眼にて我に對するを得ば、辭しない奴に白飯を與ふるを、

〔一〕

送レ君四十里。只使一帆風。
江邊千樹柳。落二我酒杯中一。
此行非二遠別一。此樂固無レ窮。
但願長如レ此。來往一生同。

【字解】〔一〕一帆風　孟東野の詩、一帆天外風と、

【詩意】君を送るに四十里、只一帆の順風を使するのみ、江邊千樹の柳色は、影を我が酒杯の中に落す、此の行や遠別にはあらずして、此の樂みは固より窮まりが無い、但願はくは長く此の如き交游を持續して、來往して一生同じからんことを、

〔二〕

君を送る四十里、只使はむ一帆の風を、
江邊千樹の柳、我が酒杯の中に落つ、
此の行遠別にあらず、此の樂み固に窮まり無し、
但願ふ長く此の如く、來往一生同じきを、

〔三〕

聞君開二龜軒一。東檻俯二喬木一。

聞く君が龜軒を開けば、東檻喬木を俯す、

人言君畏事。欲作龜頭縮。　人は言ふ君事を畏れ、龜頭の縮を作さんと欲すと、
我知君不然。朝飯仰暘谷。　我知る君は然らず、朝飯暘谷を仰ぐ、
餘光幸分我。不死安可獨。　餘光幸に我に分て、死せずんば安んぞ獨りす可けん、

【字解】〔一〕龜頭縮　盧仝の詩、北方寒龜被蛇縛、藏頭入殼如入獄と、〔二〕暘谷　日の出づる所、「淮南子」に、龜噏日氣而壽、故養生者、服日華、所以效之と、〔三〕不死　韓退之の李君墓誌に我得秘藥、不可獨不死と、

【詩意】聞く君が新たに龜軒を開くと、其の軒の東檻より喬木を俯視すると、人は言ふ君は事を畏れて、龜が頭を縮むる如き狀であると、我は知る人言は誤つて居ることを、君は頭を縮める所ではない反對に擧げて居る、論より證據朝飯の時などは暘谷を仰ぐの陽氣である、願はくは其の餘光を幸に分與し玉へ、死せざるの間は獨善主義ではならぬ、

【餘論】紀曰く、二詩殊窘弱と、

謝人惠雲巾方舄二首　人の雲巾方舄を惠むを謝す　二首

燕尾稱呼理未便。　燕尾の稱呼理未だ便ならず、
剪裁雲葉却天然。　剪裁雲葉却つて天然、
無心只是青山物。　無心只是れ青山の物、

【字解】〔一〕燕尾　頭巾の先端歧を成して其の狀燕尾に似てゐるのである、〔二〕雲葉　杜子美の詩、雨稀雲葉斷と、〔三〕無心　歸去來辭に、雲無心以出岫と、〔四〕覆頂　道士の頭巾、〔五〕周家　公の自注に、頭巾起後周と、皮日休の詩、周家新樣替三梁と、〔六〕陶令　淵明は常に濁酒を飲む、頭上の巾を以て之を漉して飲む、漉し了れば復た被る、人之を漉酒巾と呼ぶ、〔七〕鹿門　唐の皮日休字は襲美、襄陽の人、詩文を以て著はる、鹿門山に隱れて自から閒氣布衣と稱したのである、〔八〕黑霧　公の自注に、皮襲美、贈天隨子紗巾詩云、掩斂乍疑裁黑霧、輕明渾似帶元霜と、〔九〕比肩　「戰國策」に、淳于髡、一日而見七人、宣王曰、寡人聞千里一士、是比肩而至也と、

覆頂宜歸紫府仙。　覆頂宜しく歸すべし紫府の仙、
轉覺周家新樣俗。　轉た覺ゆ周家新樣の俗なるを、
【自注】頭巾起後周。
未容陶令舊名傳。　未だ容れず陶令が舊名傳ふるを、
鹿門佳士勤相贈。　鹿門の佳士勤めて相贈る、
黑霧元霜合比肩。　黑霧元霜合に比肩すべし、
【自注】皮襲美贈天隨子紗巾詩云。掩斂乍疑裁黑霧。輕明渾似帶元霜。

【題義】雲巾と方舄とを惠む人あり、此を賦して謝したのである、

【詩意】頭巾を燕尾と稱呼するは未だ理便ではない、今雲葉を剪裁する却つて天然の趣がある、雲は無心にして只是れ青山の物である、今巾に雲の名を付け頂を覆ふ宜しく紫府の仙居に歸すべし、轉た覺ゆ周家の頭巾は新樣なるも俗である、陶令の漉酒巾は風雅であるが只舊名が傳ふるのみである、鹿門の佳士が勤めて贈る所の、黑霧と元霜是は只今のものと比肩して愧ぢない、

〔一〕

胡韡(一)短靿(二)格麤疎。
古雅無ㇾ如ニ此樣殊。
妙手不ㇾ勞盤作ㇾ鳳(三)。
輕身只欲化爲ㇾ鳧(四)。
魏風褊(五)儉堪ㇾ羞ㇾ葛。
楚客豪華可ㇾ笑(六)ㇾ珠。
擬學ニ梁家(七)名解脫
便於ニ禪坐ニ作跏趺(八)。

〔二〕

胡韡短靿格麤疎、
古雅此の樣の殊なるに如くは無し、
妙手勞せず盤鳳を作すを、
輕身只欲す化して鳧と爲らんと、
魏風褊儉葛に羞づるに堪へたり、
楚客の豪華珠を笑ふ可し、
梁家を學んで解脫と名けんと擬す、
便ち禪坐に於て跏趺を作す、

脫履と名づく、【八】跏趺　結跏趺坐、右脚を左膝上に置き、左脚を右膝上に置きて坐す、之を跏趺と言ふ、

【詩意】胡韡や短靿は良に格が麤疎にて雅致がない、古雅なるは今贈られたる方舄に如くはない、之を受くれば別に妙手を勞して鳳頭鞾を作らせる要はない、之を脚に服すれば身は輕くなり飄飄化して鳧と爲らんと欲する、魏風の葛屨は儉素は可いが儉に過ぎて羞と爲る、又楚の春申君の客は珠履を躡むが是は豪華に過ぎて又笑ふべきである、我は梁武に倣うて此の舄を解脫と名けんと思ふ、著用しながら禪坐して跏趺を作すことが出來る、

【餘論】紀曰く、純作ニ皮陸格一と、査初白云ふ、舊事新用と、前首、未便と未容、後首、作鳳、作跏趺、皆是れ小疵、

【字解】〔一〕胡韡　胡人製する所の韡、「古今注」に、趙武靈王、好ニ胡服一常服ㇾ之とあれば、韡も亦服と言へるのである、〔二〕短靿　靿は靴のまがる物、「集韻」に、吳聲讀ㇾ曲と、〔三〕作鳳　公の自注に、晉永嘉中、有ニ鳳頭鞾一と、〔四〕爲鳧　仙人の舄、化して鳧と爲る、〔五〕褊儉　「詩魏風」の葛屨は褊卽ち衣の小さきを指す、〔六〕笑珠　楚の春申君は三千の食客に皆珠履を躡ましむ、〔七〕梁家　梁の武帝、靴を作り、解

寒食雨二首

自ニ我來ニ黃州一已過ニ三寒食一。
年年欲ㇾ惜(一)春。春去不ㇾ容ㇾ惜。
今年又苦雨。兩月秋蕭瑟。
臥聞(三)海棠花。泥(四)汙燕脂雪。
暗中偸負去。夜半(五)眞有ㇾ力。
何殊病少年。病起頭已白。

寒食雨　二首

我黃州に來りしより、已に三寒食を過ぐ、
年年春を惜まんと欲す、春去つて惜むを容れず、
今年又苦雨、兩月秋蕭瑟、
臥して聞く海棠花、泥は汙す燕脂の雪、
暗中偸負し去る、夜半眞に力あり、
何ぞ殊ならん病少年、病起すれば頭已に白し、

【字解】〔一〕三寒食　三年黃州にて寒食を閱す、〔二〕惜春　迎春と共に惜春は禮式の一種、〔三〕臥聞　花に灑ぐの雨、〔四〕泥汙　杜子美の詩、林花著ㇾ雨臙脂濕と、〔五〕夜半　「莊子大宗師篇」に、藏ニ舟于壑一、藏ニ山于澤一、謂ニ之固一矣、然夜半有ㇾ力者、負ㇾ之而走、昧者不ㇾ知也と、

【題義】冬至より已に一百五日を經て寒食の節と爲る、乾粥を食ふの時、天雨ふる其の凄狀を作るの

である、

【詩意】我は黄州に赴任してから、已に三度寒食の節を過ぐ、而して年年惜春の情を歌はんと思ひつつ、春は何の容赦も無く堂堂と過ぎ去る、今年も二月と三月の間雨が多く、其の二箇月の間秋の蕭瑟たる景色である、臥して聞く海棠花に灑ぐの雨を、折角燕脂の脣玉雪の如き色も泥に汙される、暗中に其の容姿を偸負して去る、夜半は眞に力あるものである、其の狀態は病んだ少年が、病より起きたときは頭已に白きと殊ならないのである、

〔二〕

春江欲レ入レ戸。雨勢來不レ已。
小屋如二漁舟一。濛濛水雲裏。
空庖煮二寒菜一。破竈燒二溼葦一。
那知是寒食。但感烏銜レ紙。
君門深九重。墳墓在二萬里一。
也擬レ哭二途窮一。死灰吹不レ起。

【字解】〔一〕銜紙　白樂天寒食吟に、風吹二曠野一紙錢飛と、寒食には紙錢を製し、墳墓を祭る、〔二〕九重　「楚辭」に、君之門兮九重と、〔三〕途窮　杜子美の詩、此身醒復醉、不レ擬哭二途窮一と、〔四〕死灰　「前漢書」に、韓安國下レ獄、獄吏辱二安國一、安國曰、死灰獨不二復然一乎、日然則溺之と、宋玉の風賦に吹二死灰一と、

【詩意】雨の爲め春江が漲りて戸に入らんとする勢である、其の上雨勢が猶ほ未だ已まない、人家の小屋は宛然漁舟の如くである、濛濛として水雲の裏に住するのである、空庖に寒菜を煮て、破竈には溼葦を燒くの始末である、那ぞ知らんや是が寒食の節であると、但感ずるは烏が紙錢を啣んで飛ぶことを、君門は深さ九重にして、墳墓は萬里の遠きに在る、我は途窮に哭せんと擬するも、死灰は吹けども已に起たない、

【餘論】紀曰く、暗中二句、用レ事殊笨、末二句比擬亦淺、小屋二句自好、結太盡と、紀は詩句としての佳は、小屋如二漁舟一、濛濛水雲裏の十字のみと評するのである、公の詩は力を故事を運用するに用ひて、景色を自然に歌ふの力に乏しきが如くである、後世摘句圖を製せんと欲する者は、公に取る所少きは是が爲めである、

徐使君分二新火一

臨皐亭中一危坐。
三見清明改二新火一。

徐使君新火を分つ

臨皐亭中一に危坐す、
三たび見る清明新火を改むるを、

【字解】〔一〕臨皐亭　或は臨皐館と曰ふ、黄州の朝宗門外に在り、〔二〕危坐　正坐又は端坐と同義、

溝中枯木應笑人。
鑽斫不然誰似我。
黃州使君憐久病。
分我五更紅一朶。
從來破釜躍江魚。
只有清詩嘲飯顆。
起攜蠟炬遶空室。
欲事烹煎無一可。
爲公分作無盡燈。
照破十方昏暗鎖。

溝中の枯木應に人を笑ふべし、
鑽斫然えず誰か我に似ん、
黃州の使君久病を憐み、
我に分つ五更紅一朶、
從來破釜江魚躍る、
只清詩の飯顆を嘲けるあり、
起つて蠟炬を攜へて空室を遶る、
烹煎を事とせんと欲するも一可無し、
爲めに公は分ち作す無盡燈、
照破す十方昏暗の鎖を、

「淨名經」に諸姉有二法門一、名二無盡燈一、譬如二一燈一、燃二百千燈一、冥者皆明、明終不レ盡と、暗一日破と、

【題義】寒食斷火の後翌日に徐が新火を分つを謝せし詩、

【詩意】臨皐亭中に一人危坐する、而して三年三度清明に逢うて新火を分與せられたるを見る、溝中の枯木は應に人を笑ふであらう、骨を折つて鑽斫するも燃えず其の意氣地無きこと誰か我に似ん、所が黃州の使君は我が久病を憐み、我に分與する五更紅一朶を、我は從來破釜に江魚を躍らす如き貧である、只時あり清詩を作り飯顆を嘲ける、起つて蠟炬を攜へて徒らに空室を遶る、飲食物を調理せんと思ふも一として可なるものは無い、幸に公が新火を分たるに因つて之を無盡に作すを得、照破する十方昏暗の鎖を、

【餘論】紀曰く、工二於簸弄一、妙是實地風光、故不レ比二油滑掉筆一と、結句に至りて唐突佛語を引用して、偈頌體に墜ちざる所に其才力を發揮する、

次韻答二元素一　　次韻元素に答ふ

余舊有贈二元素一詞上云。天涯同是傷二流落一。元素以爲二今日之先兆一。且悲二當時六客之存亡一。六客蓋張子野劉孝叔陳令舉李公擇及元素與余也。

【訓讀】余舊元素に贈る詞あり、云ふ、天涯同じく是れ流落を傷むと、元素以て今日の先兆と爲し、且當時六客の在亡を悲しむ、六客は蓋し張子野・劉孝叔・陳令舉・李公擇及び元素と余となり、

不レ愁春盡絮隨風。　愁へず春盡きて絮風に隨ふを、

【字解】〔一〕隨風　劉禹錫の詩、

〔三〕改新火　「迂叟詩話」に、唐時清明、取二榆柳之火一、以賜二近臣一、本朝因レ之と、之を新火と言ふ、〔四〕溝中　「莊子」に、百年之木、斷在二溝中一と、〔五〕鑽斫　盧仝の詩、不レ堪二鑽灼與二天下一と、木をキルのである、〔六〕破釜　後漢の范史雲は貧にして釜中に魚を生ず、〔七〕飯顆　杜子美は飯顆山下に住したるを以て、「舊唐書」に、太白譏二杜甫一、離騷有二飯顆之嘲一と、〔八〕蠟炬　杜子美の詩、題レ詩蠟炬紅と、〔九〕烹煎　韓退之の詩、刳中事二煎烹一と、〔一〇〕無一可　司馬相如の「子虛賦」に、二者無二一可一也と、〔一一〕無盡燈　照破　「涅槃經」に、一輪降二世間一、黑

但喜丹砂入頰紅。
流落天涯先有識。
摩挲金狄會當同。
蘧蘧未必都非夢。
了了方知不落空。
莫把存亡悲六客。
已將地獄等天宮。

但喜ぶ丹砂頰に入つて紅なるを、天涯に流落す先づ識あり、金狄を摩挲す會ま當に同じかるべし、蘧蘧未だ必ずしも都て夢に非んばあらず、了了方に知る空に落ちざるを、存亡を把つて六客を悲しむ莫かれ、已に地獄を將て天宮に等しくす、

【題義】舊時元素に贈りし詞が、殆んど今日の運命を豫言したごとく考へて元素が悲しむ、乃ち此の詩を作りて元素を慰むるのである、

【詩意】愁へず三春が盡き去つて柳絮風に飛び去るを、但喜ぶ丹砂の靈藥の效が頰に入つて紅を見るを、天涯に流落せる識言は的中せるも、金狄を摩挲して心を愉快にするは會ま同調である、蘧蘧然としたるも我等は夢でなくはないと思ふ、了了明明に文字は方に知る空に落在するものでない、存だの亡だの考へて六人の事を悲むは休めるがよい、由來苦痛の地獄も極樂の天宮も同等のものである、

論是紙墨、文字空設、坐主執滯、豈不落空と、【六】天宮「圓覺經」に、地獄天宮、俱爲淨土と、春盡絮飛留不得、隨風好去落誰家と、【二】有識　識は識驗、しるし、吉凶禍福を豫言すること、【三】金狄「漢晉春秋」に、魏明帝、徙長安銅人、金狄或泣と、銅の佛像である、【四】蘧蘧「莊子」に、蘧蘧然而胡蝶也と、【五】了了「蔡禪師十玄談」に了了了時無可了、玄玄玄處亦須訶と、「傳燈錄」に、慧海禪師、謂法明律師曰、禪師家多落空、法明大驚曰、何得落空、師曰、總

【餘論】紀曰く、五六太滑、落句尤粗曠と、紀は佛典に於ては全く盲人、此の詩意を解する資格が無い、公は地下に於て大笑することであらう、

蜜酒歌

蜜酒の歌

西蜀道士楊世昌。善作蜜酒。絕醇醲。余既得其方。作此歌以遺之。

【訓讀】西蜀の道士楊世昌、善く蜜酒を作る、絕だ醇醲、余既に其の方を得、此の歌を作り以て之に遺る、

眞珠爲漿玉爲醴。
六月田夫汗流泚。
不如春甕自生香。
蜂爲耕耘花作米。
一日小沸魚吐沫。
二日眩轉清光活。

眞珠を漿と爲し玉を醴と爲し、六月田夫汗流泚たり、如かず春甕自から香を生ずるに、蜂を耕耘と爲し花を米と作す、一日小沸して魚沫を吐き、二日眩轉して清光活す、

【字解】【一】眞珠　李賀の詩、小槽酒滴眞珠紅と、【二】醴　甘酒を言ふ、【三】泚　汗の出る貌、【四】眩轉　班孟堅西都賦に、目眩轉而意迷と、【五】撥　「續通鑑長編」に、今醡酒、其齊、冬以二十五日、春秋十五日、夏十日、撥醡甕、而浮蟻涌于面、謂之潑醡、豈所謂泛齊者

三日開甕香滿城。
快瀉銀瓶不須撥。
百錢一斗濃無聲。
甘露微濁醍醐清。
君不見南園采花
蜂似雨。
天敎釀酒醉先生。
先生年來窮到骨。
問人乞米何曾得。
世間萬事眞悠悠。
蜜蜂大勝監河侯。

【題義】西蜀の道士である楊世昌が蜜酒を作るの方法を授けらる、因つて此の歌を作つたのである、

【詩意】眞珠と玉とを以て漿醴と爲したかと思ふ色も味も美である、六月は田夫が汗を流して泚泚然たるは、如かず春甕に自から香を生ずるには、それは蜂が耕耘して花が卽ち米である、其の耕耘する三日甕を開けば香城に滿つ、銀瓶に快瀉して撥するを須たず、百錢一斗濃かに聲無し、甘露微濁なるも醍醐清し、君見ずや南園の采花蜂雨に似たり、天は酒を釀して先生を醉はしむ、先生年來窮骨に到り、人を問ひ米を乞ふも何ぞ曾て得ん、世間萬事眞に悠悠、蜜蜂大に勝る監河侯、

耶と、【六】醍醐　佛敎に味の極まるものを醍醐と言ふ、【七】醽酒　庾開府の詩に、花留釀蜜蜂と、【八】乞米　顏魯公與李太保乞米帖に、拙于生事、擧家食粥來已數月、今又罄竭、祇益憂煎、輒恃深情、故令投告、惠及少米、實濟艱勤と、【九】監河侯　「莊子外物篇」に、莊周家貧、故往貸粟於監河侯と、

一日には小沸して魚が沫を吐くの狀である、二日には眩轉して清光が活現する、三日に至り甕を開けば香氣滿城である、撥醅するを待たずして銀瓶に快瀉する、百錢にして一斗も購ふ濃かにして聲無く、甘露微濁なるも醍醐は清む、君も見ないか南園の采花に集る蜂は雨に似て多し、天は蜂に酒を釀らしめて先生を醉はしむ、東坡先生は年來貧窮骨に到るの極貧である、他人を問うて米を乞ふも何ぞ曾て之を得られようぞや、世間の萬事は眞に悠悠たるを感ずる、今蜜蜂を賜はりたるは監河侯の賜より尙ほ勝ると思ふ、

【餘論】紀曰く、平調直走、便嫌淺率と、又曰く、結句太淺露と、蜂爲耕耘花作米は眞に奇語である、平調淺率の評語は當らない、

又一首。答二猶子與王郎見和

又一首、二猶子と王郎と和せらるるに答ふ

脯青苔。炙青蒲。
爛蒸鵝鴨乃瓠壺。
煮豆作乳脂爲酥。
高燒油燭斟蜜酒。

【字解】【一】脯青苔「潘岳西征賦」に、野蒲變而成脯、注云趙高欲爲亂、先設驗以蒲爲脯、二世不覺、羣臣敢言蒲者、陰誅之と、堯卿曰、南人以菁苔爲脯と、脯はホシシ、乾肉を云ふ、「論語鄉黨篇」

貧家百物初何有。
古來百巧出窮人。
搜羅假合亂天眞。
詩書與我爲麴糵。
醞釀老夫成搢紳。
質非文是終難久。
脫冠還作扶犂叟。
不如蜜酒無燠寒。
冬不加甜夏不酸。
老夫作詩殊少味。
愛此三篇如酒美。
封胡羯末已可憐。
不知更有王郎子。

貧家百物初めは何ぞ有せん、
古來百巧窮人より出づ、
搜羅假合は天眞を亂す、
詩書我と麴糵爲り、
醞釀老夫搢紳と成る、
質は非文は是なるは終に久しき難し、
脫冠還た扶犂の叟と作る、
如かず蜜酒燠寒無く、
冬甜を加へず夏酸ならざるに、
老夫詩を作り殊に味少し、
愛す此の三篇酒の如く美なるを、
封胡羯末已に憐む可し、
知らず更に王郎子あるを、

宗室一書、詩書甘二于酒醴一と、【九】麴糵　共にカウジである、【一〇】老夫「左傳隱公四年」に、石碏曰、老夫耄矣、無二能爲一也と、に、沽酒市脯不レ食と、「呂覽」に、殺二鬼侯一而脯レ之と、人を極刑に處するを云ふ、【一二】炙　肉を火あぶりすること、【一三】鵝鴨　ガテウとカモ、「盧氏雜說」に、鄭餘慶、召レ人會食、呼二左右一曰、處方厨家、爛蒸去レ毛勿レ拗二折項一、諸人相顧、以爲二必鵝鴨之類一、良久就レ餐、每人前下二栗飯一椀一、蒸二壺盧一枚一、相國餐美、諸人先笑、强進而罷と、【一四】瓠壺　ヒサゴの壺、【一五】油燭　馮延巳の辭、高燒銀燭照二流蘇一と、【一六】百巧　王梅谿曰く、昔を以て脯と爲し、沸を以て炙と爲し、瓠を以て鵝鴨と爲し、豆を以て乳と爲し、脂を以て酥と爲し、油を以て燭と爲し、蜜を以て酒と爲す、皆百巧の爲す所なりと、【一七】假合「原人論」に、此身但是衆緣假合と、【一八】詩書　徐陵與二

【一一】搢紳「史記封禪書」に、因雜二搢紳先生之略術一と、【一二】質非文是「揚子法言」に、其文是也、其質非也、羊質而虎皮也と、【一三】脫冠　謝靈運の詩、歸客遂海隅、脫冠謝二朝列一と、【一四】扶犂「洞仙傳」に、郭璞曰、吾昨夜夢在二石頭外一、江中扶犂而耕と、【一五】如酒美　杜牧之の詩、酒旗誇二酒美一と、【一六】封胡羯末「晉書」に、謝奕女韞、初適二王凝之一、還甚不レ樂、安曰、王郎逸少子不レ惡、汝何恨乎、答曰、一門叔父則有二阿大中郎、羣從兄弟一、復有二封胡羯末一、不レ意天壤之中、乃有二王郎一、封謂二謝歆一、胡謂二謝朗一、羯謂二謝元一、末謂二謝川一、皆其小字也と、

【詩意】青苔を乾肉となし青蒲を炙にする、瓠を以て又鵝鴨の如く爛蒸する、又豆を煮て乳と作し脂を酥と爲す、又油を以て燭と爲して以て蜜酒を斟む、貧家には百物は愚か一物も初めはない、しかも古來より種種の發明は其の貧家の窮人より出るのである、搜羅して假合する者は由來天眞を亂る、詩や書は我に於ては其の樂麴糵と同じである、其の詩書の力が老夫を醞釀して一箇の搢紳と成化せしむ、されど本質が文にあらざるものは終に箔が剝げる、搢紳の冠を脫いで老夫の犂に扶けられて活きることになる、如かず蜜酒の燠も寒も無く、又冬も甜味を加へず夏も酸味を增さざるに、老夫が此の如き事を歌ふも詩に味が少い、只愛す公等の三篇は酒の如く美であるを、封胡羯末の四人は憐むべきである、知らず更に王郎子てふ愛すべき人あることを、

【餘論】紀曰く、亦是滑調と、余謂ふ此の如き詩は英雄欺レ人の類、又空拳誑二小兒一の類、老夫作レ詩殊少レ味、公自から公の非を知る、又仔細に評すれば假合の二字と亂二天眞一の三字は意義を爲さない、假合本非レ眞でなければならぬ、假合には亂すことが出來ない、公の靈余に敎ふるあれば幸福である、

謝陳季常惠一搢巾

陳季常の一搢巾を惠むを謝す

夫子胷中萬斛寬。
此巾何事小團團。
半升僅漉淵明酒。
二寸纔容子夏冠。
好戴黃金雙得勝。
休教白苧一生酸。
臂弓腰箭何時去。
直上陰山取可汗。

夫子胷中萬斛寬かなるに、
此の巾何事ぞ小團團たる、
半升僅かに漉す淵明の酒、
二寸纔に容る子夏の冠、
好戴す黃金雙得勝を、
白苧一生酸ならしむるを休めよ、
臂弓腰箭何れの時にか去り、
直ちに陰山に上りて可汗を取らん、

【題義】陳季常が一搢巾乃ち頭を深く藏する所の巾を惠むを謝する詩である、

【詩意】陳夫子は胷中萬斛寬かであるに、それに反して此の巾は何事ぞや小團團である、淵明の漉酒巾も一升は漉すべし此れは半升より容れない、子夏の冠は二寸の罵りを受けたるがそれと同樣である、所ゝ戴也と、施王二家の說共に其の意あるものと思ふ、【三】白苧　白苧にて製する巾袍、【四】可汗　唐代夷狄の君主の稱、妻を可敦と稱す、

【字解】【一】二寸　「漢杜欽傳」に、欽字子夏、茂陵杜鄴與ゝ欽同ニ姓字一、俱以ニ才能一稱ニ京師一、而欽目偏盲、故衣冠謂ゝ欽爲ニ盲杜子夏一、以相別、欽惡ニ以ゝ疾見ゝ詆、廼爲ニ小冠高廣纔二寸一、由ゝ是京師更謂ゝ欽爲ニ小冠杜子夏一と、【二】黃金　施德初曰く、世人巾裏以ニ黃金一爲ニ大環一、雙繫ニ其帶一、謂ニ之得勝環一、疑用ニ此事一、亦恐自有ニ故實一、不ニ敢臆決一、姑俟ニ知者一と、王梅谿曰く、季常有ニ文事一、而又有ニ武備一、黃金得勝、乃戰陳得捷之人と、王梅谿曰く、季常有ニ文事一、而又有ニ武備一、黃金得勝、乃戰陳得捷之人

丈夫たる者は宜しく黃金雙得勝をして、白苧巾の貧弱に甘んじ一生を酸に終るものではない、弓を臂にし、箭を腰にして何れの時にか去り、其の雄姿にて直ちに陰山に上り可汗王を捕虜とするぞや、

【餘論】題目に戲賦の二字を添へて見るべきである、紀曰く、小品却不ニ小樣一と、

贈黃山人

黃山人に贈る

面頰照人元自赤。
眉毛覆眼見來烏。
倦游不擬談玄牝。
示病何妨出白鬚。
絕學已生眞定慧。
說禪長笑老浮屠。
東坡若肯三年住。
親與先生看藥爐。

面頰人を照らし元自から赤く、
眉毛眼を覆ひ見來りて烏し、
倦游玄牝を談ずるを擬せず、
示病何ぞ妨げん白鬚出づるを、
絕學已に生ず眞の定慧、
說禪長く笑ふ老浮屠、
東坡若し肯て三年住せば、
親しく先生と藥爐を看ん、

【題義】黃山人は道にあらず僧にあらず、半道半僧の人ならんか、詩中に於て其意明明である、

【字解】【一】眉毛　「唐書毛若虛傳」に眉毛覆ニ于眼一と、【二】倦游　漫游に厭きたるを言ふ、【三】玄牝　「老子」に、谷神不ゝ死、是謂ニ玄牝一、玄牝之門、是謂ニ天地根一と、幽玄にして萬物を生むの母、【四】示病　「淨名經」に、維摩示病と、【五】絕學　「老子」に、絕學無ゝ憂と、【六】定慧　定は禪定、慧は智慧、【七】老浮屠　浮屠は僧の義に代用する、【八】藥爐　韓偓の詩、許到名山看ニ藥爐一と、

【詩意】山人の面色や頰色は赤くして人を照らす如くである、而して眉毛は長く垂れて眼を覆ひ見れば唯烏し、游びに倦んで最早や道士の教を宣布する氣は無い、假りに病を示して何ぞ妨げん白鬚を生ずるを、理窟を言ふ學を絶てば眞の定慧は茲に生ずるのである、徒らに野狐禪を說く所の老僧は山人の長笑する所、此の東坡も若し肯て三年も此の世に住すれば、親しく先生と丹藥を練るの爐を看んと願ふ、

【餘論】紀曰く、俚甚と、已生、先生、東坡の詩法か、東坡の病か、

贈人

人に贈る

別後休論信息疎。　別後論ずるを休めよ信息の疎なるを、
仙凡自古亦殊途。　仙凡古より亦途を殊にす、
蓬山路遠人難到。　蓬山路遠くして人到り難く、
霜柏威高道轉孤。　霜柏威高うして道轉た孤なり、
舊賞未應忘楚國。　舊賞未だ應に楚國を忘るべからず、
新詩聞已滿皇都。　新詩聞く已に皇都に滿つと、

【字解】〔一〕別後　李陵答蘇武書、與子別後、益復無聊と、
〔二〕殊途　「易」に、殊途而同歸と、
〔三〕蓬山　李義山の詩、劉郎已恨蓬山遠、又隔蓬山一萬重と、

誰憐澤畔行吟者。　誰か憐む澤畔行吟の者、
目斷長安貌欲枯。　目斷す長安貌枯れんと欲す、

【詩意】一別以來消息疎なりと論じてはいかぬ、仙と凡とは古來より途を殊にして居る、蓬山は路遠くして人容易に到り難い、其の上に霜柏が風威高くして道は轉た孤である、舊日賞游せる楚國の事は猶ほ忘れぬであらう、楚國を歌ふ新詩は皇都の人皆傳唱して居る、誰か憐むぞや澤畔に行吟する者、長安を目斷し盡くして形貌は枯槁せんとするを、

〔四〕澤畔行吟者　屈原を言ふ、

問大冶長老乞桃花茶栽東坡

大冶長老に問ひ、桃花茶を東坡に栽せんと乞ふ、

周詩記茶苦。茗飲出近世。　周詩茶の苦きを記す、茗飲は近世に出づ、
初緣厭粱肉。假此雪昏滯。　初め粱肉に厭くに緣つて、此を假りて昏滯を雪ぐ、
嗟我五畝園。桑麥蒙翳。　嗟我が五畝の園、桑麥蒙翳に苦しむ、
不令寸地閒。更乞茶子藝。　寸地も閒ならしめず、更に茶子を乞うて藝う、
饑寒未知免。已作太飽計。　饑寒未だ免かるるを知らず、已に太飽の計を作す、

庶將通有無。農末不相戾。　庶うて將に有無を通せんとす、農末相戾らず、
春來凍地裂。紫筍森已鋭。　春來凍地裂け、紫筍森として已に鋭、
牛羊煩呵叱。筐筥未敢睨。　牛羊煩はしく呵叱、筐筥未だ敢て睨ず、
江南老道人。齒髮日夜逝。　江南の老道人、齒髮日夜に逝く、
他年雪堂品。空記桃花裔。　他年雪堂の品、空しく記す桃花裔、

【字解】〔一〕周詩　「毛詩」に、誰謂茶苦、其甘如薺と、〔二〕若飲　梅谿曰く、晉宋喫茶、謂之若飲と、後魏の楊衒之の「洛陽伽藍記」に、齊王肅、初好茗飲、及歸魏、高祖問曰、若飲何如酪漿、肅曰、若不中、與酪作奴、高祖大笑、因號茗飲爲酪奴と、〔三〕昏滯　昏塵濁滯である、「茶錄」に、昏俗塵勞、一啜而散と、〔四〕寸地　杜子美の詩、寸地尺天俱入貢と、〔五〕通有無　「漢書食貨志」に、分財布利、通有無者也と、〔六〕農末　農は本を言ふ、末は工商を言ふ、〔七〕紫筍　顧渚の地、義興の地に產する茶を紫筍と云ふ、「茶經」に、紫者上、綠者次、筍者上、芽者次と、〔八〕筐筥　茶具である、筐は手持するもの、筥は背に負うて茶を採るもの、〔九〕日夜逝　日夜に衰白なるを言ふ、〔一〇〕雪堂　公の堂名である、

【題義】大冶長老に桃花茶の種子を乞うて之を東坡に栽うる詩である、

【詩意】周詩に茶の苦きを記してある、茗は近世卽ち晉以來である、人は初め粱肉に厭きて、此の飲料を假りて胷中の昏滯を雪ぐ、嗟于我が所有する五畝の園は、桑や麥が蒙翳なるに苦む、而かも寸地も無駄にしない、更に茶子を乞うて蔬ゑて、飢寒は未だ免かるると信じない、是に於てか充分の飽計を作すのである、庶ふ所は有無を善通せんと、農の本も末の工商と通じて相戾らざることと信ずる、春來凍地が裂けて、紫筍が已に森として新鋭を現はして居る、牛羊の力を煩はすが爲め之を呵叱して手入れをする、筐筥には未だ其の採取するを睨ないのである、江南の老道人卽ち大冶長老は、齒髮日夜に衰殘に逝くのであるが、他年雪堂の茗品は、空しく之が桃花茶の後裔であると記して傳ふる、

【餘論】紀曰く、結四句、不甚醒快と、

寄子由

子由に寄す

厭暑多應一向慵。　暑を厭うて多く應に一向慵かるべし、
銀鉤秀句益疎通。　銀鉤秀句益す疎通す、
也知堆案文書滿。　也知る堆案文書滿つ、
未暇開軒硯墨中。　未だ暇あらず開軒硯墨の中、
湖面新荷空照水。　湖面の新荷空しく水を照らし、
城頭高柳漫搖風。　城頭の高柳漫に風に搖く、
吏曹不是尊賢事。　吏曹是れ賢を尊ぶ事にあらず、
誰把前言語化工。　誰か前言を把つて語工と化す、

【字解】〔一〕銀鉤　「法書苑」に、索靖、矜其書、名曰銀鉤蠆尾と、其の草書の狀を言ふ、銀鉤は元來銀のスダレカケである、〔二〕堆案　嵇康與山濤書、素不便書、又不喜作書、而人間多事、堆案盈几、不相酬答、則犯敎傷義と、劉禹錫の詩、莫言堆案無餘地と、〔三〕搖風　「隋書」に、楊素見柳調言曰、柳條通體弱、獨搖不須風と、〔四〕吏曹　「蜀志」に、杜瓊謂譙周曰、古者名官職不言曹、始自漢已

來、名レ官盡言レ曹、吏言ニ屬曹一、辛言ニ侍曹一、此殆天意也と、

【詩意】暑を厭ふの人は多くして一向に萬事慵く思ふ、君はさうでない簡を認むるにも美事の筆跡を以て益す疎通する、我は知る君の案上に文書が堆滿するであらう、我は未だ暇がない軒を開きて硯墨中に親むに、湖面に浮ぶ新荷は空しく水を照らして居る、併し城頭の高柳は條枝が漫に風に搖いて居る、吏曹の名は畢竟賢人を尊ぶの事ではない、誰か吏曹の語を賢を尊ぶ語に化せしむる者ぞ、

次韻孔毅父久旱已而甚雨三首

孔毅父の久旱已にして甚雨に次韻す　三首

(一)饑人忽夢飯甑溢。
夢中一飽百憂失。
只知夢飽本來空。
未レ悟眞饑定何物。
我生無レ田食(四)破硯。
爾來硯枯磨不レ出。
去年太歲空在酉。
旁舍壺漿不レ容レ乞。
今年旱勢復如レ此。
歲晚何以黔(七)吾突。
青天蕩蕩(九)呼不レ聞。
況欲ニ稽(一〇)首號(一一)泥佛。
甕中蜥蜴尤可レ笑。
(一二)跂跂脈脈何等秩(一四)。
陰陽有レ時雨有レ數。
民是天民天自卹。
我雖ニ窮苦一不レ如レ人。
要亦自是民之一。
形容雖ニ是喪(一五)家狗一。
未ニ肯聃(一六)耳爭投レ骨。
倒(一七)冠落幘謝ニ朋友一。

【字解】【一】饑人　自樂天の詩渴人多夢レ飲、飢人多夢レ飧と、
【二】甑　コシキ、食物を蒸す具、
【三】一飽　公の門人黃山谷は、飢人常夢レ飽、病人常夢レ醫と、
【四】食破硯　筆耘舌耕に衣食するを言ふ、
【五】去年　元豐四年辛酉である、
【六】壺漿　林袁雅曰く太歲在レ酉、乞レ漿得レ酒、太歲在レ巳、敗レ妻鬻レ子、則知ニ災祥有ニ自然之理一と、
【七】黔吾突　「淮南子」に、孔子無ニ黔突一、墨子無ニ暖席一、魯連子竈、五突分煙者衆矣と、
【八】蕩蕩　「前漢禮樂志」に、天門開訣蕩蕩と、
【九】呼不聞　「莊子山木篇」に、一呼而不レ聞、再呼而不レ聞、於レ是乎三呼耶と、
【一〇】稽首　印度の禮法、首を地に俯すこと、
【一一】泥佛　「傳燈錄」に、趙州從諗禪師云、金佛不レ度レ爐、木佛不レ度レ火、泥佛不レ度レ水、眞佛內裏坐と、
【一二】蜥蜴　トカゲ、嵩山の蜥蜴が雨を降らしたること前に辨あり、
【一三】跂跂脈脈　東方朔曰く、有レ足跂跂脈脈、善緣レ壁、是非ニ守宮一即

獨與蚊雷共圭蓽。
故人嗔我不開門。
君視我門誰肯屈。
可憐明月如潑水。
夜半清光翻我室。
風從南來非雨候。
且爲疲人洗蒸鬱。
褰裳一和快哉謠。
未暇饑寒念明日。
去年東坡拾瓦礫。
自種黃桑三百尺。
今年刈草蓋雪堂。
日炙風吹面如墨。
平生懶惰今始悔。
老大勸農天所直。
沛然例賜三尺雨。
造物無心恍難測。
四方上下同一雲。
甘霪不爲龍所隔。
【自注】俗有分龍日。
蓬蒿下溼迎曉耒。
燈火新涼催夜織。
老夫作罷得甘寢。
臥聽牆東人響屐。
奔流未已坑谷平。
折葦枯荷恣漂溺。
腐儒麤糲支百年。
力耕不受衆目憐。

獨り蚊雷と圭蓽を共にす、
故人嗔る我が門を開かざるを、
君我門を視よ誰か肯て屈するや、
憐む可し明月潑水の如し、
夜半清光我が室に翻へる、
風は南より來る雨候にあらず、
且らく疲人の爲めに蒸鬱を洗ふ、
裳を褰げて一和す快哉の謠、
未だ暇あらず饑寒の明日を念ふに、
去年東坡に瓦礫を拾ひ、
自から種う黃桑三百尺、
今年草を刈る蓋し雪堂、
日炙り風吹き面墨の如し、
平生の懶惰今始めて悔ゆ、
老大勸農天の直とする所、
沛然例賜ふ三尺の雨、
造物無心恍として測り難し、
四方上下同一雲、
甘霪は龍の隔つる所とならず、
蓬蒿下溼　曉を迎へて耒す、
燈火新涼夜織を催す、
老夫罷れを作して甘寢を得たり、
臥して聽く牆東人展を響かす、
奔流未だ已まず坑谷平か、
折葦枯荷　恣に漂溺す、
腐儒麤糲百年を支ふ、
力耕して受けず衆目の憐みを、

蜥蜴と、守宮はヤモリである、跂跂脈脈は守宮や蜥蜴のはひ行く貌、
【一四】秩　秩序、次第を言ふ、
【一五】喪家狗　「孔子家語」に鄭人見孔子曰、若喪家之狗、孔子欣然と、
【一六】聃耳　聃は「廣韻」に、垂貌とある、「淮南子」に、弭耳掉尾而逃と、
【一七】倒冠　杜牧之の「晚晴賦」に、倒冠落佩兮、與世闊疎と、
【一八】蚊雷　「漢中山靖王傳」に、衆呴漂山、聚蚊成雷と、
【一九】圭蓽　圭竇と蓽門、梁の昭明太子の文、蓽門鳥宿、圭竇狐潛と、圭竇は犬のくぐる道、蓽は荆蓽、イバラ門、
【二〇】潑水　潑は光の盛んなる貌、潑剌、潑散と成語する、
【二一】從南來　「天官書」に、風從南方來大旱と、
【二二】快哉　宋玉の賦、快哉此風と、
【二三】日炙　白樂天の詩、風吹日炙不成凝と、
【二四】所直　漢書「高五王傳」に、着天與直と、
【二五】同一雲　杜子美の詩、四海八荒同一雲と、
【二六】甘霪　霖雨を言ふ、
【二七】龍所隔　公の自注、俗有分龍日と、「埤雅」に、今俗五月、謂之分龍、雨曰隔轍、言夏雨暴至、龍各有分域、雨暘往往隔一轍而異也と、
【二八】甘寢　「莊子徐無鬼篇」に、孫叔敖、甘寢秉羽と、甘寢は安臥すること、
【二九】腐儒　杜子美の詩、麤糲腐儒餐と、
【三〇】衆目憐　杜子美の詩、常受衆目憐と、

破陂漏水不耐旱。
人力未至求天全。
會當作塘徑千步。
橫斷西北遮山泉。
四鄰相率助舉杵。
人人知我囊無錢。
明年共看決渠雨。
饑飽在我寧關天。
誰能伴我田間飲。
醉倒惟有支頭甎。

破陂は漏水旱に耐へず、
人力未だ至らず天全を求む、
會ず當に塘を作る徑千歩なるべし、
西北を横斷して山泉を遮る、
四鄰相率ゐて舉杵を助く、
人人知る我が囊に錢無きを、
明年共に看ん決渠の雨を、
饑飽我に在り寧ぞ天に關せん、
誰か能く我に伴うて田間に飲まん、
醉倒惟有り支頭甎、

【題義】孔毅父が久しく旱にして忽ち甚雨なるを歌ふ詩に次韻して作られたるもの、

【詩意】饑人は食より外思ふ物はない、是の故に夢にも飯甎が溢れたのを見る、夢中にも一飽して百憂を忘失する、只知る夢中に飽食したるは其の實がない本來空である、誰もまだ悟らない眞の飢は定んで何物であると云ふことを、我が身生を考ふるに產田は無い唯破硯の力を賴むのみ、爾來は硯水が枯死して磨けども水は出ない、去年は太歲が空しく酉に在りて、壺漿を旁舍に乞ふも乞を容れて呉れない、今年の旱勢も又復去年と似て居る、今日から思ふ歲晚には何を以てか吾が厨の竈を點くすることが出來るぞ、青天に向つて呼べども天は蕩蕩として聞かざる如くである、況んや稽首して泥佛に號び問はんと欲するも是は答へは無い、蜥蜴は昔雨を降らしたるが今や甕中に跂跂するのみ是も笑ふべし、跂跂脈脈たる果して何等の秩かある、幸に陰陽は時節あり雨にも數がある、斯の民は是れ天の民天も自から邺みを垂る、我は窮苦であるが他人の如く忍耐せぬでもない、要するに自から天民の一員である、形容は纍纍然として喪家の狗の如く見ゆれども、未だ肯て耳を垂れて爭うて肉や骨に向投はしない、けれども倒冠脫幘は窮人の常態是は朋友に謝する所である、獨り蚊羣の常に集まる貧家の中に居る、幸に故人は嗔りてはいかぬ我が開門せざるを、君は我門を視玉へ開くも開かんもない曲りて自由がきかぬ、唯憐むは明月の貧家を嫌はず水を潑する如くに光が入る、夜半なぞは清光が室に翻る、時に風は南方より來るも雨の候ではない、且らく疲人の爲めに蒸鬱を洗ふの惠みである、裳を褰げて君が快哉の謠歌を和せんと思ふ、未だ飢寒が明日に逼るを念はぬ、去年は東坡を開墾して瓦礫を拾ひ、手自から種うる黃桑は三百尺と成る、今年は草を刈る雪堂の庭に、日光に炙られ風威に吹かれて面は墨の如くになる、是に至りて平生懶惰手入れをせざりしことを今始めて悔ゆ、老大にして勸農は天も亦心の直なるを照鑑する、其の證據には沛然として例賜ふ三尺の雨を、造物は由來無心なるや有心なるや悅として測り難いが、四方上下同一雲である、甘霖は所謂何百里も皆雨であるから、龍が甲地乙

【三二】決渠雨　「漢書溝洫志」に、白公穿レ渠、民歌レ之曰、鄭國在レ前、白渠起レ後、舉レ苗爲レ雲、決渠爲レ雨と、

【三三】支頭甎　韓退之の詩、暫拳二一手一支レ頭臥と、

地と隔てる所は無い、蓬蒿下濕の地は曉色を迎へるや未を將て來る、而して新秋の燈火親むべき候には家に在つて夜織を催す、老夫此の如くにして罷勞を作すときは甘寢を求むる、臥して聽く牆東に當りて人の屐聲を響かすを、其の人は言ふ奔流が滾滾して未だ已まず坑谷は一面水が平等である、折れた葦や枯れた荷が漂溺を恣にして居る、腐儒は麤糲に甘んずれば百年の一生を支へる、自分で力耕して衆目の憐みを受けない、破陂は必ず水漏る漏れば旱には耐へない、人力の及ばざる所は天全を求むるのみ、先づ人力にて塘を作りて徑千歩を開くべきである、而して西北を横斷して山泉を遮り止む、此の計畫あるや四鄰が互に相率ゐて協力する、人人は知る東坡は元來貧であることを、是に於て明年は必ず決渠の雨を看るであらう、一饑一飽は我が勤と惰とに在つて天に關するものではない、斯く觀じ來れば實に愉快である、田間に於て一杯飲むが誰か酌の對手となる、醉倒すれば唯頭を支へる甎瓦の枕あるのみ、

〔一〕

天公號令不再出。
十日愁霖併爲一。
君家有田水冒田。
我家無田憂入室。

〔二〕

天公の號令再出せず、
十日愁霖併せて一と爲る、
君が家田あり水田を冒す、
我家田無し憂室に入る、

【字解】〔一〕號令「揚子法言」に、鼓舞萬物者、其雷風乎、鼓舞萬民者、其號令乎、雷不一、風不再と、〔二〕愁霖「梁元帝纂要」に、久雨曰苦雨、亦曰愁霖と、〔三〕君家　公自身の家、〔四〕我家　公自身の家、〔五〕楊道士　公自ら言ふ、一則有田、一則有室、若楊道士、無田則無室、空手一身無所憂也と、〔六〕不惡　白樂天の詩、閒行亦不惡と、〔七〕山芎　前に辨ぜり、〔八〕露宿「後漢趙壹傳」に、柴車草屏、露宿其傍と、風餐露宿は禪語に多く見る所、〔九〕夜來　昨夜來である、〔一〇〕不可開　庾信の「愁賦」に、細酌榴花一兩杯、蕩彼愁門終不開と、〔一一〕洞簫　無底の笛、〔一二〕秋井塌　杜子美の詩、忽憶雨時秋井塌、古人白骨生蒼苔、如今不飲令心哀と、塌はひくし、地が低下なるを云ふ、

不如西州楊道士。
萬里隨身惟兩膝。
沿流不惡泝亦佳。
一葉扁舟任飄突。
山芎麥麴都不用。
泥行露宿終無疾。
夜來饑腸如轉雷。
旅愁非酒不可開。
楊生自言識音律。
洞簫入手清且哀。
不須更待秋井塌。
見人白骨方銜杯。

如かず西州の楊道士、
萬里身に隨ふ惟兩膝、
流に沿ふも惡しからず泝る亦佳し、
一葉の扁舟飄突に任す、
山芎麥麴都て用ひず、
泥行露宿終に疾無し、
夜來飢腸轉雷の如し、
旅愁酒にあらざれば開く可からず、
楊生自から言ふ音律を識ると、
洞簫手に入りて清且つ哀、
須ひず更に秋井塌を待ち、
人の白骨を見て方に杯を銜むを、

【詩意】天公の號令は一令して再出の要はない、十日愁霖併せて一と爲つてある、君が家には田あり田あれば水害がある、我が家は田は有せざるが家屋を有す是も亦水害を蒙る、兩人共に如かず西州の

楊道士には、道士は田も室も無く萬里隨身のものは兩膝のみである、而して流れに沿うて下るも流に逆うて上るも意の儘である、一葉の扁舟に身を飄突に任せ、山芎麥麴の心配は無い、泥行露宿も終に疾を起さない、僕は夜來より飢腸が轟轟と鳴る、旅愁は酒にあらざれば開くことが出來ない、楊道士は自から言ふ余は音律を識ると、そこで洞簫を吹くことを乞へば一曲良に淸哀である、須ひず更に秋井塌の寂寞たる處の成るを待つて、人の白骨を見て其の前に於て口に杯を銜むは、

【餘論】　此の篇題に三首とある、起句より念二明日一に至る三十句を一首と爲し、去年東坡より支頭甎に至る二十八句を一首と爲せば都合三首と爲る、然るに起句の甑溢卽ち入聲四質の韻と漂溺の十二錫の韻とを以て同一通韻として用ふるものとすれば二首に區別せずして一首と見ることも出來る、漂溺以下は平聲一先にて十二句であれば要するに二度換韻の詩と見るを得、天公號令の詩も兩度換韻して成るもの、紀は評して曰く、三首皆排宕兀傲、奇氣縱橫、妙俱從二自己現境一生レ情、不レ作二應酬泛語一、凡和詩最忌下作二應酬一、人與レ己兩無レ涉と、紀は又前首の破陂漏水以下の句を評して忽地跳二出題外一、却仍是題中、筆力恣逸之至、順手寫二出景象一、便是凡筆と、旱と雨とを縱橫に說く所、始めて大手筆を見る、玉局を以て宗祖と奉ずる者は、此等の雄篇を研究すべきである、

魚蠻子

江淮水爲(一)田。舟楫爲二室居一。

魚蠻子

江淮水を田と爲し、舟楫を室居と爲し、

魚蝦以爲レ糧。不レ耕自有レ餘。
異哉魚蠻子。本非二左衽徒一。(二)
連排入レ江住。竹瓦三尺廬。
於(四)焉長二子孫一。戚(五)施且侏儒。
擘(七)水取二魴(八)鯉一。易如(九)拾二諸塗一。
破釜不レ著レ鹽。雪鱗芼(一〇)二青蔬一。
一飽便甘寢。何異獺(一一)與レ狙。
人間行(一二)路難。踏地出二賦租一。(一三)
不レ如魚蠻子。駕レ浪浮二空虛一。
空虛未レ可レ知。會當算二舟車一。(一四)
蠻子叩頭泣。勿レ語桑(一五)大夫。

魚蝦以て糧と爲し、耕さざるも自から餘りあり、
異なる哉魚蠻子、本左衽の徒にあらず、
連排江に入つて住す、竹瓦三尺の廬、
焉に於て子孫を長ず、戚施且つ侏儒、
水を擘きて魴鯉を取る、易きこと諸を塗に拾ふが如し、
破釜鹽を著けず、雪鱗青蔬を芼ふ、
一飽すれば便ち甘寢、何ぞ異ならん獺と狙とに、
人間行路難、踏地賦租を出だす、
如かず魚蠻子、浪に駕して空虛に浮ぶ、
空虛未だ知るべからず、會ず當に舟車を算すべし、
蠻子叩頭して泣く、語る勿かれ桑大夫、

【字解】　【一】爲田　下に不耕の語があるより此の二字活用する、「漢書五行志」に、吳地以レ船爲レ家、以レ魚爲レ食と、【二】左衽　衣をヒダリマヘに著る、「論語憲問」に、微二管仲一、吾其被髮在衽矣と、蠻人の風俗である、【三】連排　王梅谿曰く、江南多以二竹木一爲レ排、浮二水中一、排上以二葦竹瓦一爲レ屋と、黃岡の地、大竹多く、之を以て陶瓦に代用する、【四】於焉　於是と同じ、公の此の句以外に他に多く用ひしを見ない、【五】戚施　戚は蹙、施は斜、身を伸ばして仰視することが出來ない、俗にセムシである、「國語」に、戚施不レ可

レ使レ仰と、【六】侏儒　俗に一すぼうし、「國語」に、侏儒不レ可レ使レ援と、「孔子世家」に、優倡侏儒戲而前と、【七】擘水　擘は擘開、水を擘き開くのである、【八】魴鯉　魴はチシキウヲ、鯉はコヒ、【九】如拾　如拾に作る本がある、【一〇】芼青蔬　肉を野菜と共に烹て食ふを芼と言ふ、「禮記」に、芼レ之以二蘋藻一とある、【一一】獺與狙　獺はカハヲソ、狙はサル、【一二】行路難　杜子美の詩、信有二人間行路難一と、生活に辛苦の多きを言ふ、【一三】賦租　「左傳宣公十五年」に、初稅レ畝と、【一四】舟車　「漢書食貨志」に、武帝元光六年冬、初算二商車一と、李奇注に、始稅二商賈車船一、令レ出レ算と、【一五】桑大夫　「前漢書桑宏羊、洛陽賈人子、能以レ心計、年十二、爲二武帝侍中一、言レ利析二秋毫一、請非二吏比一者、三老北邊騎士軺車一算、商旅人軺車二算、船五丈以上一算と、

【題義】水上に生活する者を魚蠻子の名を設けて歌うたものである、張芸叟が漁父の詩を粉本としたるは明白であるが、詩意は漁父と限つたのではない、

【詩意】江淮の間は水鄉にて水を以て田地と爲す、舟楫を以て人人が皆室居と定む、魚蝦を以て米の代食とする、耕さざるも食糧には餘裕がある、其の中で異とするは魚蠻子である、此の人は本野蠻の左衽徒ではない、竹瓦を連排して江心を住家と爲し、其の竹瓦に於て三尺の廬を作る、焉に於て子子孫孫に傳ふ、而して戚施の人と侏儒の人と、水を擘開して魴と鯉とを手取りにして來る、其の容易なること諸を塗に於て拾ふが如くである、破釜は鹽を著けることが出來ない、雪鱗は青蔬を芼して食ふ、一飽すれば便ち安臥するのみ、何ぞ異ならんや獺や狙の類と、人間は畢竟行路難である、地上に生活するものは皆賦租を取られる、此等の人は魚蠻子の、浪の上に生活する者には及ばない、去り乍ら浪の上も賦租を免かることが出來なくなる、舟車に曾て稅を施したことがある、斯く語れば蠻子は叩頭して泣く、此の事を桑大夫に語りてはいかぬと、

【餘論】紀曰く、香山一派、讀レ之宛然秦中吟也と、公は妄なぞを畜へて樂天と類似のものがある、詩も亦樂天より得來るものが多いのは、當然と思ふ、

夜坐與邁聯句

清風來無邊。明月翳復吐。自松聲滿二虛空一。竹影侵二半戸一。邁暗枝有二驚鵲一。壞壁鳴二饑鼠一。自露葉耿二高梧一。風螢落二空廡一。邁微涼感二團扇一。古意歌二白紵一。自樂哉今夕游。獲二此陪杖屨一。邁傳家詩律細。已自過二宗武一。短詩膝上成。聊以感二懷祖一。自

清風來ること無邊、明月翳く復た吐く、
松聲虛空に滿つ、竹影半戸を侵す、
暗枝驚鵲あり、壞壁饑鼠鳴く、
露葉高梧に耿たり、風螢空廡に落つ、
微涼團扇を感じ、古意白紵を歌ふ、
樂しい哉今夕の游び、此の陪杖屨を獲たり、
傳家詩律細か、已に自から宗武に過ぐ、
短詩膝上に成る、聊か以て懷祖に感ず、

【字解】【一】壞壁　劉歆傳に出づる語なれども、引用する例ではない、【二】詩律　杜子美の詩、晚節漸於二詩律一細と、【三】宗武　杜子美の子、【四】膝上　「晉王逸傳」に、愛二子坦之一、雖二長大一獨抱二置膝上一と、【五】懷祖　祖を懷うて墓前を遠ざからざること、韓

子華の事、

【題義】夜坐して甥の邁と聯句せるもの、

【詩意】清風は吹き來ること無邊である、明月は或は雲に翳れ或は雲を出る、而して松聲は謖謖として虛空に滿つ、竹影は時に半戸を侵す、暗處の樹枝には驚鵲が一聲鳴き、家屋の壞壁には飢鼠が鳴く、露を帶びて耿たる光あるは高梧である、風に飛ばされ來る螢火は空庶に落ちる、微涼なる夜は團扇の捨てらるることを感ずる、又古意を發して白紵を歌うて見る、樂みに思ふ今夕の游びを、我が大人叔父の杖屨に陪することを得たるは、家に傳ふる詩律は良に精細である、爾の才は宗武に過ぐ、短詩は膝上にて成る、聊か以て當時懷祖の事に感ずる、

【餘論】紀曰く、佳處便有三二謝意一と、大人が小兒と相撲を取るのであるから、公としては骨の折れたことと思ふ、しかも句としては邁の方が佳い、

弔李臺卿

李臺卿を弔す

李臺卿。字明仲。廬州人。貌陋甚。性介不羣。而博學强記。罕見其比。好左氏。有史學考正同異。多所發明。知天文律歷。千歲之日。可坐數也。軾謫居黃州。臺卿爲麻城主簿。始識之。既罷居於廬。而曹光州演甫。以書報其亡。臺卿光州之妻黨也。

【訓讀】李臺卿、字は明仲、廬州の人、貌陋甚だし、性介不羣、而かも博學强記、其の比を見ること罕なり、左氏を好み、史學考正同異あり、發明する所多し、天文律歷を知り、千歲の日、坐ながら數ふべし、軾黃州に謫居す、臺卿麻城の主簿たり、始めて之を識る、既に罷めて廬に居る、而して曹光州演甫、書を以て其の亡を報ず、臺卿は光州の妻黨なり、

我初未識君。人以君爲笑。
垂頭老鸛雀。煙雨霾七竅。
敝衣來過我。危坐若持釣。
褚裒半面新。醜蔑一語妙。
徐徐涉其瀾。極望不可徼。
却觀元嫵媚。士固難輕料。
看書眼如月。罅隙靡不照。
我老多遺忘。得君如再少。

我初め未だ君を識らず、人君を以て笑を爲す、
頭を垂るる老鸛雀、煙雨七竅を霾らす、
敝衣來りて我に過ぎり、危坐釣を持するが若し、
褚裒半面新たなり、醜蔑一語妙、
徐徐として其の瀾を涉り、極望徼すべからず、
却つて元嫵媚を觀る、士は固より輕料し難し、
看書の眼月の如く、罅隙照らさざるは靡し、
我老いて多く遺忘す、君を得て再少の如し、

從横通雜藝。甚博且知要。
所恨言無文。至老幽不耀。
其生世莫識。已死誰復弔。
作詩遺故人。庶解俗子譙。

從横雜藝に通ず、甚博且つ要を知る、
恨む所言文無く、老に至るまで幽にして耀かず、
其の生世識ること莫し、已に死して誰か復た弔せん、
詩を作りて故人に遺る、庶はくは俗子の譙を解かん、

【字解】【一】老鵶雀　「唐裴寬傳」に、韋詵有レ女、擇レ所レ宜レ歸、見二裴寬一、引爲二按察判官一、許妻以レ女、歸語レ妻曰、常求二佳壻一、今得矣、明日幃二其族一使レ觀レ之、寬時衣レ碧揩而長、既入、族人皆笑、呼爲二碧鵶雀一と、鵶雀はコウヅル、【二】霾　霾晦、風、土を降らして暗きを言ふ、【三】七竅　「莊子應帝王篇」に、人皆有二七竅一、以視聽食息と、「史記殷紀」に、聖人心有二七竅一、剖二比干一觀二其心一と、人は顏面にも七つの穴あり、人の胷にもある七つの穴、【四】持釣　「莊子秋水篇」に、釣二於濮水一、楚王使二大夫二人往見一焉、莊子持レ竿不レ顧と、【五】褚裒　晉人、客座に於て孟嘉を認めし人、【六】半面　「後漢書」に、應奉、見二造車匠門間一半面、他日路逢而識レ之と、【七】䙝蔑　春秋鄭の人、容貌の醜なる人、「左傳昭公二十八年」に、叔向適レ鄭、䙝蔑惡、欲レ觀二叔向一、從二使之牧レ器者一、而往立二於堂下一、一言而善、叔向將レ飲レ酒、聞レ之曰、必䙝明也、下執二其手一以上と、【八】不可徵　「史記司馬相如傳」に、南至二牂牁一爲レ徵と、徵の義は小道、又は國界、邊塞である、【九】嫵媚　「舊唐書」に、太宗大笑曰、人言二魏徵舉動疏慢一、我但覺二其嫵媚一耳と、なまめきこぶるのである、【一〇】士固　「史記范雎傳」に、侯嬴曰、人固未レ易レ知、知レ人亦未レ易と、【一一】看書　「世說」に、支道林曰、北人看書、如二顯處視一レ月、南人學問、如二牖中窺一レ日と、【一二】遺忘　「南史」に、劉士深、博二綜羣書一、沈約、任昉以下、每レ有二遺忘一、皆訪問焉と、【一三】甚博　「漢司馬遷傳」に、儒者博而寡レ要と、「唐蕭德言傳」に、太宗詔裒レ次經史、百代帝王、所二以興衰一者上レ之、帝愛二其書博而要一と、【一四】言無文　「左傳襄公二十五年」に、孔子曰、言之無レ文、行之不レ遠と、【一五】不耀　「老子」に、聖人直而不レ肆、光而不レ耀と、【一六】俗士譙　譙は責讓、せむる、とがむる、

【題義】李臺卿は博學强記の人にて、其の著述も一家の見識を持つて居りしが、容貌甚だ陋なるが爲めに高官にも上らずして逝いたのである、之を弔して此の詩を作る、

【詩意】我は君と舊知でなかつた、が他人は君の事を言うて笑うたのである、例せば頭を垂れて居る老鵶雀である、或は煙雨が七竅を霾らする容貌であるとか、一朝敝れた衣服を著けて我を訪問せられ、座に危坐して釣を持するが如く何の愛相も無い、併し乍ら我は君の偉人であること、昔の褚裒や䙝蔑の如き人であることを、半面見たのみで記憶して居る、一語を聞いて其の妙言であることも知つて居る、譬へば徐徐と其の瀾を涉るに、望極まるも界すべからざる廣さと同樣である、非常に頑固なるやに思ふ者は誤りで、却つて嫵媚の柔らかき所がある、豪傑の士は輕輕に料り知ることが出來ない、而かも看書の眼は月の如く明らかで、少しの罅隙でも照らさざるはない、我は老耄して遺忘することが多い、君を得て再び少年の記性となる、君は從横に雜藝に通達して、而かも博く而かも要を知る、唯恨む所は世に處して言行に粉飾なく、折角の博學も幽にして外面に耀きを發せざるを、其の生前も世人の多くは識らず、其の死後も亦弔する人が無いやうである、我は其の弔詩を作りて之を故人に遺る、俗子の責讓せる誤りを解かんと庶ふのである、

【餘論】紀曰く、寫照如レ生と、又、其生世莫レ識の十字を評して沈著と、晉の道安は一代の高僧であるが、其の師が容貌の醜を嫌うたと傳にある、世外に形骸を土木視する者も是である、況んや煩惱粉塵海の人をや、

曹既見和。復次韻

造物本兒嬉。風噫雷電笑。
誰令妄驚怪。失匕號萬竅。
人人走江湖。一一操網釣。
偶然連六鰲。便謂此手妙。
空令任公子。三歲蹲海徼。
長貧固不辭。一死實未料。
難將蓍草算。除用佛眼照。
何人嗣家學。恨子兒尚少。
嗟我與曹君。衰老世不要。
空言今無救。奇志後必耀。
吟君五字詩。義重千金弔。
收藏愼勿出。免使羣兒譙。

曹既に和せらる、復た次韻す

造物本兒嬉、風噫し雷電笑ふ、
誰か妄りに驚怪せしむる、失匕して萬竅號ぶ、
人人江湖に走り、一一網釣を操る、
偶然六鰲を連ね、便ち謂ふ此の手妙なりと、
空しく任公子をして、三歲海徼に蹲まらしむ、
長貧固より辭せず、一死實に未だ料らざりき、
蓍草を將て算し難し、佛眼を用ひて照らすを除く、
何人か家學を嗣がん、恨む子が兒尚ほ少なるを、
嗟我と曹君と、衰老世に不要、
空言今救ふこと無し、奇志は後必ず耀かん、
君が五字の詩を吟ずれば、義は千金の弔より重し、
收藏して愼んで出す勿れ、羣兒をして譙らしむるを免る、

【字解】〔一〕造物　「舊唐書杜審言傳」に、甚爲造物小兒相苦と、〔二〕風噫　「莊子齊物篇」に、大塊噫氣、其名爲風と、〔三〕電笑　電光を笑と云ふ、〔四〕失匕　匕はサジ、匙、飲食中に驚いて匙を投げる、〔五〕六鰲　「列子湯問篇」に、龍伯之國、有大人舉足不盈數步、而曁五山之所、一釣而連六鰲と、〔六〕任公子　「莊子外物篇」に、任公子爲大鈎巨緇、五十犗以爲餌、蹲乎會稽、投竿東海、旦旦而釣、期年不得魚と、〔七〕一死　「晉載記」に、卜祟曰、所欠唯一死耳と、杜子美の詩、百年不敢料と、〔八〕佛眼照　晉の傅大士の頌に、佛眼如千日、照異體還同と、〔九〕家學　劉禹錫の詩、知傳家學與青箱と、

【題義】　弔李臺卿の詩を曹光州に遺りしに、曹は和詩を作るに依つて、復た次韻したるものである、

【詩意】　造物と云ふものは全く兒嬉に類するものである、風はオクビをしたり雷電は笑ふ、誰か妄りに此の驚怪を爲して、人をして匕を失して萬竅を號ばしむる者である、皆な造物の戲れである、人人が江湖に走りて、一人一人に網釣を操り、偶然にも六鰲の連るを見て、便ち謂ふ我が此の釣手は妙であると、又任公子の如きは、三年も海徼に蹲踞して一尾を獲ざらしむ、人間長貧は固より辭せざる所であるが、一死も亦實に未だ料らざる所である、蓍草を將ても算することは出來ない、唯佛眼を用て照すを除くのみ、何人か家學を嗣ぐや、恨むに臺卿が兒は尙ほ少年である、而して我と曹君とは、共に衰老して世に不要の人間である、何事を言うても空言にて世を救ふの策はない、が李の奇志は後來必ず耀くであらう、今曹君が五字の詩を吟ずれば、千金の弔賻より義は重い、此の詩は自珍して出して人に示してはいかぬ、盲目の羣兒は詩が判らずに譙るからだ、

【餘論】　弔詩に和すること禮なるや否やを知らない、唐人の集には多く見ない、坡公を宗とする人は學んでも可、

弔徐德占

徐德占を弔す

余初不識德占。但聞其初爲呂惠卿所薦。以處士用。元豐五年三月。偶以事至蘄水。德占聞余在傳舍。惠然見訪。與之語。有過人者。是歲十月。聞其遇禍。作詩弔之。

【訓讀】余初め德占を識らず、但聞く其の初め呂惠卿の薦むる所と爲り、處士を以て用ひらる、元豐五年三月、偶ま事を以て蘄水に至る、德占余が傳舍に在るを聞いて、惠然訪はる、之と語る、人に過ぐる者あり、是の歲十月、其の遇禍を聞き、詩を作り之を弔す、

美人種松柏。欲使低映門。
栽培雖易長。流惡病其根。
哀哉歲寒姿。骫骳誰與論。
竟爲明所誤。不免刀斧痕。
一遭兒女汚。始覺山林尊。
從來覓棟梁。未省傍籬藩。
南山隔秦嶺。千樹龍蛇奔。

美人松柏を種う、低れて門に映ぜしめんと欲す、
栽培長じ易しと雖も、流れ惡しければ其の根を病む、
哀しい哉歲寒の姿、骫骳誰と與に論ぜん、
竟に明の誤る所と爲り、刀斧の痕を免れず、
一たび兒女の汚に遭うて、始めて覺る山林の尊きを、
從來棟梁を覓め、未だ省みず籬藩に傍ふを、
南山は秦嶺を隔つ、千樹龍蛇奔る、

大厦若畏傾。萬牛何足言。
不然老巖壑。含抱枝生孫。
死者不可悔。吾將遺後昆。

大厦若し傾くを畏れば、萬牛何ぞ言ふに足らん、
然らずんば巖壑に老い、合抱枝孫を生ぜん、
死者悔ゆべからず、吾將に後昆に遺らんとす、

【字解】〔一〕骫骳「後漢趙壹傳」に、抗骳倚門邊」と、たかぶり屈せざる貌、〔二〕明所誤　柳子厚、孤松の詩、不以險自防、遂爲明所誤と、〔三〕萬牛　杜子美の詩、大厦如傾要棟梁、萬牛回首邱山重と、

【題義】徐德占は黃山谷の外兒である、呂惠卿の知遇を蒙り國事に用ひらる、年四十にして殺害せらる、公が蘄水の旅舍に在るとき謁見して、公は初めて其の人物を知り、其の奇禍に遇ふを聞いて、詩を作り之を弔したのである、

【詩意】美人が松柏を種うるは何の爲めである、其の陰が低れて門に映ずるを見んが爲めである、栽培は方法を得れば成長し難くはない、が其の水の流れが惡きときは其の根に病氣を起す、哀しい哉歲寒の姿、他木と異なり骫骳たる處は誰と此の風骨を論ぜんとする、竟には、聰明が身を誤らすに足り、刀斧の痕を免れない、一たび兒女輩の汚れに遭うて、始めて山林に住するの尊なるを覺る、從來棟梁の材を覓むるに、美人の家の籬藩なぞには覓むること出來ない、看玉へ南山は秦嶺を隔てて聳ゆる、其の山頭の千樹は龍蛇奔るの概がある、大厦が若し傾くを畏るれば、萬牛があるとも何の用も作さない、然らずして巖壑に老ゆれば、十丈百丈合抱して子孫を長ずることが出來る、されど死者は悔ゆる

も及ばない、吾が此の言は後昆に遺るの婆言である、

【餘論】此の篇は佶屈の典故を用ひず、殆んど漢詩を讀むの概がある、

武昌主簿吳亮君采。攜其友人沈君十二琴之說。與高齋先生。空同子之文。太平之頌。以示予。予不識沈君。而讀其書如見其人。如聞十二琴之聲。予昔從高齋先生游。嘗見其寶一琴。無銘無識。不知其何代物也。請以告二子。使從先生求觀之。此十二琴者。待其琴而後和。元豐五年閏六月。

武昌の主簿吳亮君采、其の友人沈君の十二琴の說、高齋先生に與ふ、空同子の文、太平の頌を攜へて、以て予に示す、予沈君を識らず、而して其の書を讀み其の人を見るが如く、十二琴の聲を聞くが如し、予昔高齋先生に從つて游び、嘗て其の一琴を寶とするを見る、無銘無識、其の何代の物なるを知らざるなり、請うて以て二子に告げ、先生に從つて之を求觀せしむ、此の十二琴は、其の琴を待つて而して後和せん、元豐五年閏六月、

若言琴上有琴聲。放在匣中何不鳴。若言聲在指頭上。何不於君指上聽。

若し琴上に琴聲ありと言はば、放ちて匣中に在り何ぞ鳴かざる、若し聲は指頭の上に在りと言はば、何ぞ君が指上に於て聽かざる、

【餘論】紀曰く、此隨手寫二四句一、本不二是詩一、蒐輯者强收入レ集、千古詩集、有二此體一否と、馮惟訥の古詩紀を讀む、其の古逸と稱するもの、多く此の類の詩である、紀の如く詩にあらずと見る者は誤る、然れども圭臬とする所は、楞嚴經にあるのであるから偈頌を以て見るを正當と思ふ、余も多く論ずるを欲しない、

李委吹レ笛

李委笛を吹く

元豐五年十二月十九日。東坡生日。置酒赤壁磯下。踞高峰俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生。頗知レ音。謂レ坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之則進士李委。聞坡生日作新曲。曰鶴南飛。以獻。呼之使前。則青巾紫裘。腰笛而已。既奏新曲。又快作數弄。嘹然有穿雲裂石之聲。

坐客皆引滿醉倒。委袖出嘉紙一幅曰。吾無求於公。得一絶句足矣。坡笑而從之。

【訓讀】元豐五年十二月十九日東坡の生日、酒を赤壁磯下に置き、高峰に踞し、鵲巣を俯し、酒酣にして笛聲江上に起る、客に郭古二生あり、頗く音を知る、坡に謂つて曰く、笛聲新意あり、俗工にあらざるなり、人をして之を問はしむれば、則ち進士李委、坡の生日を聞いて新曲を作り、鶴南飛と曰ひ以て獻ずと、之を呼んで前ましむ、則ち青巾紫裘、笛を腰にするのみ、既に新曲を奏し、又快よく數弄を作す、嘹然穿雲裂石の聲あり、坐客皆滿を引いて醉倒す、委、袖より嘉紙一幅を出して曰く、吾公に求むる無し、一絶句を得ば足る、坡笑つて之に從ふ、

山頭孤鶴向南飛。
載我南游到九疑。
下界何人也吹笛。
可憐時復犯龜茲。

山頭の孤鶴南に向つて飛ぶ、
我を載せて南游九疑に到る、
下界何人か也笛を吹く、
可憐時に復た龜茲を犯す、

【字解】〔一〕九疑　湖南省寧遠縣南六十里に在り。舜を葬りし山、〔二〕下界　人界を天上界に較べて云ふ、〔三〕犯龜茲　曲名である、元稹の連昌宮辭に、逡巡大遍梁州徹、色色龜茲轟絲續と、龜茲は鳩茲とも書す、西域に屬し、唐代都督府を置く、今の新疆庫車縣の地、

【題義】十二月十九日は東坡の生日である、自から賀せんと思うて、酒を赤壁磯下に置いて之を飲み樂しむ、身は高峰に踞し、眼は鵲巣を俯して瞰る、時に何處よりとなく笛聲が聞ゆる、郭古の二生は共に音律を解する者、曰く此の笛は新聲ありて、尋常俗士の吹くことが出來ないものであると、是に於て其の人を問へば答へて曰く李委なりと、公の生日を祝せん爲め鶴南飛の曲を吹いて以て之を獻ずと、乃ち座に請ずれば更に數曲を奏す、其の妙技に坐客皆歎賞する、公は返禮せんと欲するも李委に求むる者はない、唯公の詩を求むと、公是に於て此の詩を賦して與へたのである、

【詩意】山頭の孤鶴は南に向つて飛び去る、我を載せて南游して九疑山まで到達せしむ、然るに下界に於て何人か也笛を吹き、可憐なるは時に復た龜茲まで到らしむ、

【餘論】笛の曲に鶴南飛を聞く、又事實上我は鶴に從うて南の方九疑山まで吟魂が到る、然るに曲が一轉して犯龜茲を奏するを聞きて、我が吟魂は更に龜茲まで到るの意、然るに當に其の意を云ふは平凡公の嫌ふ所、故に此の奇句を爲すのである、

蜀僧明操思歸書龍邱子壁

蜀の僧明操歸を思ふ、龍邱子の壁に書す

久厭勞生能幾日。　久しく勞生を厭ふ能く幾日ぞ、
莫將歸思擾衰年。　歸思を將て衰年を擾す莫かれ、

【字解】〔一〕片雲　「傳燈錄」に惠忠國師、自受心印、肅宗上元二年赴京、帝問、師在曹溪得何法、

(一)片雲會得無心否。　片雲は無心を會得するや否や、
(二)南北東西只一天。　南北東西只一天、

東西一何處有二南北一と、

【題義】蜀地の僧明操が他鄉に雲游して其の游びに倦み故鄉に歸らんと思ふ、公之に戲れて此の詩を龍邱子の壁に題したるものである、

【詩意】久しく勞生を厭うて能く幾日を涉るやを余は知らない、が一朝歸思を起して其の衰年を擾してはいかぬ、片雲は本來無心で方處なぞ擇ばない、僧は雲水と同じきもの、師は其の理を會得するや如何、南北東西只一天である、

【餘論】紀曰く、亦厭二偈頌氣一と、此等の詩決して偈頌の氣は無い、僧を以て對手とする、是れ尋常の小詩である、

師曰、陛下見二空中一片雲一麼と、

【二】南北　「禮記檀弓」に、丘也東西南北之人也と、「禪錄」に、本來無二

蘇東坡詩集　卷二十二

古今體詩　四十二首

次韻孔毅父集二古人句一見贈五首

孔毅父が古人の句を集め贈らるるを次韻す　五首

羨君戲集二他人詩一。　羨む君が戲れに他人の詩を集むるを、
指呼市人如使兒。　市人を指呼すること兒を使ふが如し、
天邊鴻鵠不易得。　天邊の鴻鵠得易からず、
便令作對隨家雞。　便ち對を作して家雞に隨はしむ、
退之驚笑子美泣。　退之は驚き笑ひ子美は泣く、
問君久假何時歸。　君に問ふ久假何れの時にか歸る、
世間好句世人共。　世間の好句世人共にす、
明月自滿千家墀。　明月は自から滿つ千家の墀、

【字解】【一】市人　王梅谿曰く市人字、亦驅二市人一而戰之意と、

【二】家雞　「南史王僧虔傳」に、庾征西翼書、少時與二右軍一齊レ名、右軍後進、庾猶不レ分、在二荆州一、與二都下人書一云、小兒輩賤二家雞一皆學二逸少書一と、王梅谿の說、詳細なれば譯して出だす、「古詩を集む、前古未だ有らず、王介甫盛んに之を爲す、多きもの數十韻、蓋し古人の詩を誦する者多きを以て、或は座中率然として成り、往往對偶親切、其の後人多く之に

效ふ者あり、但し數十部の詩を取つて、諸家の詩を集むるのみ、故に公此の詩、之を美め、亦微しく以て之を譏るのみ、蓋し市人は之をして兒の如くならしむべからず、鴻鵠は家雞を對と爲さしむべからず、猶ほ古人の詩句美惡巧拙あり、其の初め各の思致あり、豈混じて一律と爲すべけんや」查初白は梅谿を破して王介甫に始まると謂ふは是にあらずと、【三】何時歸　韓退之の詩、公今此去何時歸と、【四】世人共　王梅谿曰く、東坡嘗對二歐陽文忠公一、師二文與可詩一、歐陽公云、此非二與可詩一、世間原有二此句一、與可拾得耳と、

【題義】孔毅父が古人の句を一句づつ拾うて以て我が詩と爲し、贈られたるに次韻して作る、譏意と戲意とを含んで居る、

【詩意】羨むは君が游戲に他人の詩を集むる、恰も市井の俗人を指呼して小兒を使用する如くである、例して見れば天邊の鴻鵠と家雞とは固より對すべきものでなく、一方は品位の高きもの、一方は品位の低きものである、それをして對と爲さしめたる君の技倆には退之は驚笑するであらうし子美は泣くことであらう、君に問ふが君が其の本領に歸るは定んで何れの時に在るぞや、世間の好句は世間の人が共に知つて居る、恰も明月は天上一輪にて影は千家の階墀に滿ちてあると同じ、

【餘論】四支と八齊と五微とを通韻として用ふ、

〔二〕

紫駝之峰人莫識。
雜以雞豚眞可惜。
今君坐致五侯鯖。

〔二〕

紫駝の峰人識ること莫し、
雜ふるに雞豚を以てす眞に惜む可し、
今君坐ながら致す五侯の鯖、

【字解】〔一〕紫駝之峰　杜子美の詩、紫駝之峯出二翠釜一、と、顏師固曰く、脊上有二一封隆高一也、如二封土一然、俗呼二封牛一、と、橐駝を謂ふ、峯

盡是猩脣與熊白。
路旁拾得半段槍。
何必開爐鑄矛戟。
用之如何在我耳。
入手當令君喪魄。

盡く是れ猩脣と熊白と、
路傍拾ひ得たり半段の槍、
何ぞ必ず爐を開いて矛戟を鑄ん、
之を用ふる如何ぞ我に在るのみ、
手に入れて當に君をして喪魄せしむべし、

「談賓錄」に、唐哥舒翰、捍二吐蕃一、賊衆三道、從レ山相續而下、翰持二半段折槍一、當レ前擊レ之、無レ不二披靡一、と、

【詩意】橐駝の肉味は人の識る者は無い、知らないから雞肉や豚肉と雜烹して食ふ、それは惜しいことである、今君は坐ながら五侯鯖の珍味を嘗む、君の食ふものは盡く是れ猩脣や熊掌の極めて得難き珍味であるに、何ぞや路傍に於て半段の槍を拾うて見たり、又新に爐を開き別に矛戟を鑄るの無益の勞をするのであるぞや、之を用ふること如何ぞ我に在るのみぞ、我が手に入らば當に君をして喪魄せしむるものである、

〔三〕

天下幾人學二杜甫一。

〔三〕

天下幾人か杜甫を學ぶ、

ではない、【二】五侯鯖　「西京雜記」に、五侯不二相能一、賓客不二相往來一、婁護豐辨、傳二會五侯間一、各得二其歡心一、競致二奇膳一、乃合以爲レ鯖、世稱二五侯鯖一、以爲二珍味一、と、【三】猩脣　李賀の大堤曲に、郎食二鯉魚尾一、妾食二猩猩脣一、と、【四】熊白　查初白云ふ、熊白熊肪也と、【五】半段槍

【字解】〔一〕天下　杜子美の詩、

誰得其皮與其骨。
劃如太華當我前。
跛牂欲上驚嶪崒。
名章俊語紛交衡。
無人巧會當時情。
前生子美只君是。
信手拈得俱天成。

誰か其の皮と其の骨とを得るや、
劃して太華の我が前に當るが如し、
跛牂上らんと欲して嶪崒に驚く、
名章俊語紛として交衡、
人の巧く當時の情を會する無し、
前生の子美只君是れ、
信手拈じ得て俱に天成、

【詩意】天下の詩人が幾人か杜甫の詩を學ぶ、而して誰か其の皮を得誰か其の骨を得るものである、我と杜との間は劃として太華山が我が眼前に當るが如くである、跛牂が之に上らんと思ふ先づ嶪崒の險峻に驚くのみ、杜甫の詩は名章俊語が紛として交衡して居る、後人は巧く杜甫が作る時の情を會得する者はない、所が前生の杜甫は今日の君である、是の故に手に信して拈得して俱に天成の珠玉と爲つてある、

【字解】〔一〕皮・骨　李太白上二裴長史一書、名章俊語、絡繹間起と、〔六〕天下幾人畫二古松一と、〔二〕其皮　「傳燈錄」に達磨欲二西返一天竺一、乃命二門人一曰、時將レ至矣、汝等盍各言一レ所レ得乎、師謂二道副一曰、汝得二吾皮一、謂二尼總持一曰、汝得二吾肉一、謂二道育一曰、汝得二吾骨一、最後慧可、依レ位而立、師曰汝得二吾髓一、乃付レ法と、〔三〕跛牂　「史記李斯傳」に、城高五丈、而樓季不二輕犯一也、太山之高、百仞而跛牂牧二其上一、夫樓季也、而離二五丈之限一、豈跛牂也、而易二百仞之高一哉、隋煬之勢異也と、跛牂はビツコヒツジ、〔四〕嶪崒　山長くして高き貌、〔五〕名章　李太白上二裴長史一書、名章俊語、絡繹間起と、〔六〕信手　「傳燈錄」に、洛普和尚頌云、入二荒田一不レ揀、信手拈二來草一、觸目未二嘗無一、臨レ機何不レ道と、

〔四〕

詩人雕刻閒草木。
搜二抉肝腎一神應哭。
不レ如默誦千萬首。
左抽右取談笑足。
夜吟石鼎聲悲秋。
可レ憐好事劉與侯。
何當二一醉百不問一。
我欲レ眠矣君歸休。

詩人の雕刻閒草木、
肝腎を搜抉して神應に哭すべし、
如かず默誦す千萬首、
左抽右取談笑足る、
夜吟ずれば石鼎聲悲秋、
憐む可し好事劉と侯と、
何か當に一醉百問はざるべき、
我眠らんと欲す君歸り休めよ、

【詩意】詩人は閒草木を材料として頻りに雕刻する、肝や腎を搜抉し盡くして其の神も泣哭することであらう、それよりは古人の詩を千首も萬首も默誦する方がよい、而して左抽し右取して談笑の用に供するに足る、作る技倆も無きに强ひて悲吟する侯喜を見玉へ、善詩の劉師服や彌明は笑つて對手と

【字解】〔一〕雕刻　「莊子天道篇」に、覆二載天地一、刻二雕衆形一と、〔二〕神應哭　「古詩話」に、賀知章、見二李白烏棲曲一曰、此詩可レ泣二鬼神一矣と、杳初白曰く、詩人搜二抉肝腎一、自傷二其神明一、故神應レ哭也と、苦辛するが故に精神の神哭する、鬼神が其の名篇なるが故に哭感するのではない、〔三〕左抽　「毛詩」に、左旋右抽、中軍作レ好と、〔四〕石鼎　韓退之の石鼎聯句序に、劉師服、侯喜、與二道士軒轅彌明一同宿、喜夜與二師服一說詩、視二彌明一若レ無人、彌明忽軒衣張眉、指二爐中石鼎一曰、子云二能詩一、能與レ我賦レ此乎、劉郎援レ筆、題二其首句一、傳二於喜一、道士啞然笑、卽袖レ手竦レ肩、高吟初不レ經レ意、詩旨似レ譏二喜二子一、每二營度、欲レ出二口吻一、聲益悲、竟亦不レ能レ奇と、〔五〕我欲眠　李白の詩、我醉欲レ眠卿暫去と、

しない、一層のことに唯一醉して百事皆問はぬもよい、我も眠りに入らんと思ふ君も歸りて休息し玉へ、

〔五〕

膏明蘭臭俱自焚。
象牙翠羽戕其身。
多言自古爲數窮。
微中有時堪解紛。
癡人但數羊羔兒。
不知何者是左慈。
千章萬句卒非我。
急走捉君應已遲。

〔五〕

膏明蘭臭俱に自から焚く、
象牙翠羽其の身を戕ふ、
多言は古より爲めに數ば窮す、
微中時あり紛を解くに堪へたり、
癡人但數ふ羊羔兒、
知らず何者か是れ左慈、
千章萬句卒に我にあらず、
急走して君を捉ふ應に已に遲かるべし

【字解】〔一〕蘭臭「周易」に、同心之言、其臭如蘭と、〔二〕象牙「左傳襄公二十四年」に、象有齒、以焚其身と、〔三〕翠羽 吳鈞の「玄猿賦」に、小則翡翠、殞於羽毛、大則犀象、殘於齒革と、〔四〕多言「老子」に、多言數窮、不如守中と、〔五〕微中 「史記滑稽傳」に、談言微中、亦可以解紛と、〔六〕羊羔兒 公の自注に世傳、陶穀學士、買得党太尉家故伎、遇雪、陶取雪水、烹團茶、謂伎曰、党家應不識此、伎曰、彼粗人、安有此景、但能於銷金煖帳下、淺斟低唱、喫羊羔兒酒、陶默然媿其言と、又「國策」に、中山君嘆曰、吾以一杯羊羹亡國と、羹は羊のスヒモノである、〔七〕左慈 「後漢左慈傳」に、曹操欲收殺之、遂慈於陽城山頭、遂走入羊羣、操知不可得、乃令就羊中告之曰、不復相殺、本試君術耳、忽一老羝、屈前兩膝、人立而言曰、遽如許卽競往赴之、而羣羊數百皆變爲羝、竝屈前膝、人立云、遽如許、遂莫知所取焉と、〔八〕千章 白樂天の詩、萬句千章無二字と、

【詩意】膏は明あるも蘭は臭あるも俱に自から焚き、象も牙の爲め翠も羽の爲めに其の身を戕ふのである、多言は古より言の爲め數ば窮するに至る、微微たる言中時ありては紛紜を解くことがある、癡人は但眼前のつまらぬ羊羔兒の多少を數へて大事を忘る、怪物の多き世の中誰が眞の左慈であるか分らない、千章も萬句も畢竟人の物にて我物ではない、急走に君の面目を捉へんと欲するは曹が左慈を捉へんと欲したると同樣に已に遲いのである、

【餘論】紀曰く、五首皆語雜二嘲弄一、頗有二率句一、不レ爲二傑作一と、案ずるに集句の例は傅咸に開くとせば傅は晉人なれば其の例は古に在ると謂つて可い、然るに唐人は此を學ばず、宋に至りて王荆公や石曼卿の如く盛んに作るもの出づるは、時代の趨向として認むることが出來る、然るに公は嘲弄して餘ず所がない、古に無くて不可なりとなれば、公は盛んに次韻の詩を作る、中唐に於て元白を除く外多く次韻の詩は作らない、晩唐以來盛賦するのである、是も嘲弄せざるべからず、然るに次韻に於て論ずる所なく、集句を此の如く痛罵する、公の思想として但聞くべきのみである、

六年正月二十日。復出東門。仍用前韻

六年正月二十日、復た東門を出づ、仍つて前韻を用ふ

亂山環合水侵門。

亂山環合して水門を侵す、

〜

【字解】〔一〕九重 「楚辭宋玉九

身在淮南盡處邨。
五畝漸成終老計。
九重新埽舊巢痕。
豈惟見慣沙鷗熟。
已覺來多釣石溫。
長與東風約今日。
暗香先返玉梅魂。

偶題其三四云、玉爲通體、依稀見、香號返魂、容易廻、結云、天桃莫倚東風勢、調鼎何曾用不才、詩意本此、蓋公之在黃、猶下致光之阨于崔昌遐、而在湖南、然時相雖力擠之、而神宗獨爲保全、亦猶下致光之見知于昭宗、先返玉梅魂、蓋以神宗之必不忍絕棄也、而語意渾然、恰是收足復出東門意、此老詩誠非淺人所能讀也と、

【題義】元豐四年の正月二十日に始めて女王城に游ぶの詩を作り、而して五年に再び原韻にて作り、今六年三たび原韻にて作るのである、

【詩意】高低定まらざる亂山が環り合して水は東門を侵してゐる、身は淮南盡處の邨に在る、五畝の宅地は漸く終老の計が成る、九重の埃塵は新に掃除する舊巢の痕を、沙上に游ぶ閒鷗は從來見て慣るるのは勿論、其の上猶は記憶して居る釣石の溫なるを、長く東風とは今日の游びを期約してある、吾に背かないで暗香は先づ玉梅の魂を返して開く、

【餘論】紀曰く、溫雅可誦と、女王城の詩は公の會心する所、乃ち三四重韻する所以である、今に至るまで公を敬する者是の詩に次韻するは、風情盡きざるものあるを見る、

食甘

一雙羅帕未分珍。
林下先嘗愧逐臣。
露葉霜枝翦寒碧。
金槃玉指破芳辛。
清泉蔌蔌先流齒。
香霧霏霏欲噀人。
坐客殷勤爲收子。
千奴一掬奈吾貧。

甘を食ふ

一雙の羅帕未だ珍を分たず、
林下先づ嘗む逐臣を愧づ、
露葉霜枝寒碧を翦り、
金槃玉指芳辛を破る、
清泉蔌蔌先づ齒に流れ、
香霧霏霏人に噀かんと欲す、
坐客殷勤爲めに子を收む、
千奴一掬吾が貧を奈んぞ、

【字解】〔一〕羅帕　黃色の羅にて、帕頭を著ける、「唐史蕭嵩傳」に、荆州進黃甘、帝以紫帕包賜之と、〔二〕先嘗　薛逢、謝西川相公賜甘子詩、滿合新甘破鼻香、相公恩重賜先嘗と、〔三〕蔌蔌　「詩小雅」に、蔌蔌方有穀と、字義は種種の形容に用ふ、今は水分が多きを言ふ、〔四〕噀人　劉孝標の送橘啓に采之風味照坐、噀之香霧噀人と、〔五〕千奴　千頭木奴である、李叔平が子の爲めに千株の甘橘を栽せしこと、

韓詩に、君之門兮九重と、今の句は宮門九重の意味とは異なる、舊巢痕の埃多きを謂ふ、〔二〕舊巢痕　「施德初注東坡詩陸放翁序」に、昔祖宗以三三館、養士儒、將相材、及官制行、罷三館、而東坡、蓋嘗直史館、然自謫爲散官、削去史館之職、久矣、至是史館亦廢、故云新埽舊巢痕、其用事之嚴如此、而鳳巢西隔九重門、則李義山詩也と、〔三〕玉梅魂　何焯曰く、韓致光、湖南梅花、一冬再開、

前詩に於て詳辨せり、

【題義】柑橘を食うて作る、

【詩意】内禁に於て高官の者でも未だ此の珍を分賜せられないのに、林下に於て先づ嘗めるは逐臣である身を愧づる、露葉霜枝は寒碧を翦りて光澤がある、金盤に盛つて玉指にて芳辛を破る、芳辛を破りて見れば清泉が蔌蔌として齒間に流るる、而して香霧は霏霏として其の香氣を以て人に噀く如くである、坐客は殷勤に一顆を袖に收めて去る、千奴を一掬して李家の子は富豪と爲るも吾は貧をどうすることも出來ない、

【餘論】紀曰く、千奴一掬四字、求レ新得レ拙と、一雙、一掬、先嘗、先流、此の同字あるは、是れ坡公の一家の宗旨、

大寒步至東坡贈巢三

春雨如暗塵。春風吹倒人。
東坡數間屋。巢子誰與鄰。
空牀斂敗絮。破竈鬱生薪。
相對不レ言レ寒。哀哉知我貧。
我有一瓢酒。獨飲良不仁。
未レ能レ賴我頰。聊復濡子脣。
故人千鍾祿。馭吏醉吐茵。
那知我與子。坐作寒螿呻。
努力莫レ怨レ天。我爾皆天民。
行看花柳動。共享無邊春。

【字解】〔一〕敗絮「陶淵明傳」に、敗絮自擁、何慙兒子と、〔二〕生薪　杜荀鶴の詩、時挑野菜和レ根煮、旋斫生柴帶レ葉燒と、〔三〕知我貧「史記」に、管仲曰、吾始困時、嘗與鮑叔賈、分財利多自與、鮑叔不以我爲貪、知我貧也と、〔四〕千鍾祿「史記魏世家」に、魏成子食祿千鍾と、〔五〕馭吏「前漢丙吉傳」に、馭吏嗜酒數逋蕩、嘗從吉出、醉嘔丞相車上、西曹主吏、白欲斥之、吉曰、以醉飽之失去士、使此人將復何所容、西曹第忍之、此不過汚丞相茵耳と、〔六〕寒螿「謝惠連搗衣詩」に、烈烈寒螿啼と、螿は蟬、俗にツクツクボウシである、〔七〕天民　天の法に從ふ民、「孟子盡心章」に、有天民者、達可行於天下、而後行之者也と、〔八〕無邊　杜子美の詩、無邊落木蕭蕭下と、

【題義】春寒なるが甚だしければ大寒と題す、其の寒を冒して東坡に至り、此の詩を作り巢三に贈るのである、巢は姓、名は谷、嘗て試して第せず、秦鳳涇原の間に游ぶ、此の時坡公黃州に在り、谷は江淮に走り、因つて共に游ぶ、公は子由と共に朝廷に用ひらるるに及んで、谷其の間之を見ず、後公

嶺海に謫せらる、谷慨然眉州より徒歩して之を訪ふ、梅州に至り、文定に書を遺りて曰く、我萬里歩行して公を見る、自から意はざりき、今梅州に至らんとは、文定驚喜して曰く、此れ今世の人にあらず、古の人なりと、既に見て相泣く、谷時に年七十三、去つて文忠を海南に見んとす、文定之を止めて曰く、今循より儋に至る數千里、老人の事にあらず、之を留むるも可かず、新會に至る、蠻隷の爲め其の槖裝を竊まる、谷は遂に新會に於て病死す、又曾て知る所の存寶と云ふ將軍あり、罪を得て自から死を期す、谷に謂つて曰く死は惜しむ所にあらず、妻子寒餓を免れず、銀數百兩あり、君にあらざれば託して遺るべきなし、谷許諾す、卽ち姓名を變じて、銀を懷にし、步して往いて其の子に授け、逃れて江淮の間に至り、蘇軾等と游ぶと、宋史卓行傳に在り、高士にして亦奇人なる者か、

【詩意】春雨は霏霏として暗塵の如くである、春風は烈烈として人を吹倒する勢である、東坡には數間の屋がある、巢子は誰と鄰を作してあるや、卽ち此の東坡居士である、空牀には敗絮を斂めて、破竈には生薪が鬱積してある、訪問して對坐し暖を取るの策なきも寒しと言はぬ、言はぬは我が貧を知ればである、我に聊か一瓢の酒がある、獨飲するは良に不仁と思ふ、主人が飲んで頰を赧うするまでに至らないが、聊か復た子が脣をも濡ほさんと思ふ、然るに我が故人の中には千鍾の祿を食んで、馭吏まで飽飲して醉うて車茵に嘔せしものまである、那ぞ知らんや我と子と、寒を忍んで坐して寒螿の呻吟を學ぶ、されど努力して天を怨むやうな心は起らない、我も爾も皆天民であることを自覺すればである、但し徐徐と春暖に赴くであらうから行いて花柳が生動するを見て、共に無邊の春を享樂せんと思ふ、

【餘論】紀曰く、沈痛之言、不レ傷二忠厚一と、春日に大寒の字面を用ひんと欲する者は、公の此の詩を以て論證とすれば可い、春寒は料峭とか悄悄とか定義があると論ずる者は、公の爲めに笑はるるものと知れ、

元修菜

菜之美者有二吾鄉之巢一。故人巢元修嗜レ之。余亦嗜レ之。元修云。使二孔北海見一。當復云吾家菜一耶。因謂二之元修菜一。余去レ鄉十有五年。思而不レ可レ得。元修適自レ蜀來。見二余於黃一。乃作二是詩一。使レ歸致二其子一。而種レ之東坡之下云。

【訓讀】菜の美なる者、吾鄉の巢有り、故人巢元修之を嗜む、余亦之を嗜む、元修云ふ、孔北海をして見せしめば、當に復た吾が家菜と云ふべきか、因つて之を元修菜と謂ふ、余鄉を去る十有五年、思うて得べからず、元修適ま蜀より來り、余を黃に見る、乃ち是の詩を作る、歸りて其の子に致し、而して之を東坡の下に種ゑしむと云ふ、

彼美君家菜。鋪田綠茸茸。

彼の美は君が家の菜、鋪田綠茸茸、

豆莢圓且小。槐芽細而豐。
種之秋雨餘。擢秀繁霜中。
欲花而未蕚。一一如青蟲。
是時青裙女。採擷何忽忽。
烝之復湘之。香色蔚其饛。
點酒下鹽豉。縷橙芼薑葱。
那知雞與豚。但恐放箸空。
春盡苗葉老。耕翻煙雨叢。
潤隨甘澤化。暖作青泥融。
始終不我負。力與糞壤同。
我老忘家舍。楚音變兒童。
此物獨嫵媚。終年繫余胸。
君歸致其子。囊盛勿函封。
張騫移苜蓿。適用如葵菘。

豆莢圓にして且小、槐芽細にして豐、
之を種う秋雨の餘、秀を擢んづ繁霜の中、
花ならんと欲して而かも未だ蕚ならず、一一青蟲の如し、
是の時青裙の女、採擷何ぞ忽忽なる、
之を烝し復た之を湘し、香色蔚として其れ饛たり、
酒を點し鹽豉を下し、縷橙芼薑葱、
那ぞ知らん雞と豚と、但恐る放箸空しきを、
春盡きて苗葉老ゆ、耕翻して煙雨叢、
潤は甘澤に隨つて化し、暖は青泥と作つて融す、
始終我に負かず、力は糞壤と同じ、
我老いて家舍を忘れ、楚音兒童を變ず、
此の物獨り嫵媚、終年余が胸に繫る、
君歸れば其の子に致せ、囊に盛り函封する勿かれ、
張騫苜蓿を移し、適用葵菘の如し、

馬援載薏苡。羅生等蒿蓬。
懸知東坡下。堵鹵化千鍾。
長使齊安民。指此說兩翁。

馬援薏苡を載せ、羅り生じて蒿蓬に等し、
懸かに知る東坡の下、堵鹵千鍾に化するを、
長く齊安の民をして、此を指さして兩翁を說かしめん、

【字解】〔一〕茸茸　盛んなる貌、令狐楚の詩、細稈緣レ領綠茸茸と、〔二〕豆莢「博雅」に、豆角謂二之莢一と、〔三〕槐芽「本艸」に、槐初生、嫩芽可レ食、亦可レ作レ飲と、〔四〕擢秀　文選趙景眞、與二嵇茂齊一書、植二根芳苑一、擢二秀清流一と、〔五〕青蟲　梁簡文帝の詩、珠槃雜二青蟲一と、王梅谿曰く、形容之工、蜀人皆識レ之、內地人、非レ親二見巢菜一者、不レ知二其工一也と、〔六〕採擷　杜子美の詩、採擷細瑣升二中堂一と、擷と採と同義の字、つまみとるのである、〔七〕湘之「詩」に、于以湘之と、湘は烹る、〔八〕其饛「詩」に、有二饛簋飧一と、盆器に盛滿の貌、〔九〕下鹽豉「晉書」に、陸機嘗指二王濟一、濟指二羊酪一謂レ機曰、卿吳中何以敵レ此、答曰、千里蓴羹、未レ有二鹽豉一と、時人以爲二名對一と、鹽豉とは鹽と豆とを和して造るもの、味噌の類である、〔一〇〕縷橙　ダイダイを細かに切ることである、〔一一〕芼薑葱　薑はシヤウガ、葱はネギ、芼は野菜を擇ぶのである、韓退之の詩、芼以二椒與レ橙と、〔一二〕放箸　杜子美の詩、落磧何曾白紙濕、放箸未レ覺金盤空と、〔一三〕糞壤「維摩經」に、糞壤之地、乃能滋茂と、〔一四〕嫵媚　前に辨あり、〔一五〕張騫　漢の武帝の時大宛に使と爲り、苜蓿と天馬を攜へて歸る、〔一六〕葵菘　俗にタウナ、白菜、黃芽菜である、王梅谿曰く、苜蓿亦可二爲レ菜茹一と、〔一七〕薏苡　ズズダマ、藥艸、〔一八〕羅生「宋玉高唐賦」に、芳草羅生と、

【題義】吾が鄉に野菜がある、故人の巢元修と余は之を嗜む、因つて之を元修菜と名を命じた、余は國を去つて已に十有五年、之を思ふも手に入らない、元修が適まま蜀より來りて余を黃州に訪はる、乃ち是の詩を作り、且つ元修の子に致して、之を黃の東坡の下に種ゑしめたのである、

【詩意】彼の美なるものは君が家の菜である、田面に鋪き滿ちて綠茸茸である、豆莢は圓く且つ小

にして、槐芽は細かにして豐肥である、之を秋雨の十分なる時に種うれば、忽ち芳秀を繁霜の中に於て擢んでる、花ならん欲するも而かも未だ夢にもならず、其の狀は一一青蟲の如くである、是の時や恰も採擷すべき時であれば、青裙を著けた女兒が皆忽忽として居る、採り來りて之を烝し復た之を湘す、而して香色は蔚として其れ饞である、酒を一點して之に鹽豉を下し、又橙を縷切して薑葱を擇びて料する、那ぞ知らん雞と豚とは、但恐る放箸して空乏なるを、春の晩に及んでは苗葉も老いて、耕鋤の時煙雨が其の叢に滿ち、潤は甘澤するがままに化し去り、暖に向うて青泥と作つて融する、下種より此に至る始終我が勤勞と背かずに、其の勞力と糞壤の力と同等である、我は老いて家舍を忘れ、外に在つて楚音が兒童を變ずる、此の物のみは獨り嫵媚である、終年余が胸臆には思が繫けて在る、請ふ君歸りなば其の子に致せよ、囊に盛り函に封ずる儘にしては不可ぬと、昔張騫は馬糧として苜蓿を移植する、適用すれば馬糧の苜蓿も人間の口に副ふ葵菘の如くになる、又馬援は薏苡を載せて歸る、其の薏苡は羅生して蒿蓬と等しく長ずる、懸かに知る東坡の下、埆鹵の地が千鍾の肥地と化するであらう、而して長く齊安一縣の民衆が、此の榮を指して是れ二翁の功であると云ふことを說くであらう、

【餘論】紀曰く、質而不レ俚、細而不レ瑣、此由二筆力不レ同と、又、張騫以下を評して有二襯貼一便不二單箸一、否則收二不レ住三一篇長詩一と、

三月三日點燈會レ客　三月三日點燈客を會す

江上東風浪接レ天。
苦寒無賴破二春妍一。
試開雲夢羔兒酒。
快瀉錢塘藥玉船。
蠶市光陰非二故國一。
馬行燈火記二當年一。
冷煙濕レ雪梅花在。
留二得新春一作二上元一。

江上東風浪天に接す、
苦寒無賴春妍を破る、
試みに開く雲夢羔兒の酒、
快く瀉ぐ錢塘藥玉の船、
蠶市光陰故國にあらず、
馬行燈火當年を記す、
冷煙雪を濕す梅花在り、
新春を留め得て上元を作す、

【字解】〔一〕浪接天　白樂天の詩、寒浪連レ天白と、〔二〕無賴　「史記高祖紀」に、始大人常以レ臣無賴、不レ能レ治二產業一と、始めは依賴する所無きの義、後轉じて强暴妄爲の者を謂ふ、〔三〕藥玉船　王梅谿曰く、藥玉船、蓋以レ藥煮二石而似レ玉者一也と、〔四〕蠶市　施德初曰く、成都記、蠶叢氏每春、勸二民農桑一、但鬻二蠶具一、謂二之蠶市一と、〔五〕馬行　王梅谿曰く、馬行者東京繁華之處、燈火最盛と、汴京の城下、馬を鬻ぎは正月十五日の燈夕である、

【題義】三月三日の上巳に點燈して客を會し詩を作る、

【詩意】江上の東風は浪を吹いて浪は天に接する、苦寒は無賴にして春の芳妍を破る、試みに雲夢の羔兒酒を開いて、之に交ふるに快瀉する錢塘の藥玉船である、蠶市を是の日設くるは故國の事にて客市を開く、〔六〕上元　馮應榴曰く、末二句追二憶當年景事一也、又先生律詩首句韻通用者多、至下如二此詩一之末韻通用者絕少と、上元

土の事ではない、馬行燈火を見る亦當年の事である、節は暮春であるのに冷煙や濕雪や梅花が猶ほ在る、新春正月を留め得て上元の燈夕を作すの思を作すのである、

【餘論】清潭案ずるに、白樂天の秋江送レ客の詩、秋鴻次第過、哀猿朝夕聞、是日孤舟客、此地亦離羣、濛濛潤レ衣雨、漠漠冒レ帆雲、不レ醉二潯陽酒一、煙波愁二殺人一と、古詩と今體は同一に論せざるも、公は樂天の詩に於て學ぶ所多ければ、或は樂天の韻法を學びしものか、

日日出二東門一

日日東門を出づ

日日出二東門一。(一)步尋二東城游。
城門抱關卒。(二)笑レ我此何求。
我亦無レ所レ求。駕言寫二我憂一。(三)
意適忽忘レ返。路窮乃歸休。
懸知百歲後。父老說二故侯一。
古來賢達人。此路誰不レ由。
百年寓二華屋一。千載歸二山邱一。

日日東門を出で、步して東城を尋ねて游ぶ、
城門抱關の卒、我を笑ふ此に何をか求むると、
我亦求むる所無し、駕して言に我が憂を寫す、
意適すれば忽ち返るを忘れ、路窮すれば乃ち歸休す、
懸かに知る百歲の後、父老故侯を說くことを、
古來賢達の人、此の路誰か由らざる、
百年華屋に寓するも、千載山邱に歸す、

何事羊公子。不二肯過西州。(四)

何事ぞ羊公子、肯て西州に過ぎざる、

【字解】【一】東門　王梅谿曰く、東坡圖云、東門近二東坡一之門也、在二乾明寺前五十步一、今無矣と、【二】抱關　「孟子萬章」に、抱關擊柝者、皆有二常職一と、門衞である、【三】我憂　「毛詩」に、知レ我者謂二我心憂一、不レ知レ我者謂二我何求一と、【四】西州　「晉書」に、羊曇嘗因二石頭大醉一扶レ路唱レ樂、不レ覺至二西州門一と、

【詩意】毎日毎日東門を出で、步して以て東城を尋ねて游ぶ、城門の抱關卒は我を見慣れて、我を笑ふ何事か求むるあつて日日來るのであらうと、我は畢竟何事も求むるのではない、此に來るは我が心憂を寫す爲めである、而して意が適すればいつまでも返るのを忘れて游び、路窮まれば乃ち歸休する、懸かに知る我が死後は、父老は定めて故侯を說くことであらう、古來より賢達の人、此の路は皆由る所である、人世は百年の間華屋に寓居するも、要するに千載は山邱に歸るの運命である、何事ぞや羊公子は、肯て西州を過ぎざる、

【餘論】紀曰く、渾渾有二古致一と、又曰く、接レ法入レ古と、漢の十九首を學んで其の痕跡を留めざるものである、

南堂五首

南堂　五首

江上西山半隱レ堤。

江上の西山半は堤に隱る、

【字解】【一】南堂　王梅谿曰く

此邦臺館一時西。　此の邦臺館一時西、
南堂獨有西南向。　南堂獨西南に向ふあり、
臥看千帆落淺溪。　臥して看る千帆の淺溪に落つるを、

【題義】黄州に於て自から南堂を建築して其の趣を敍す、

【詩意】大江の上の西山は半は堤に隱れる、此の邦の臺館は一時皆西面して作る、此の南堂は止だ是れ西南に向つて建築する、是の故に臥して千帆の淺溪に落ちるのを見ることが出來る、

〔二〕

暮年眼力嗟猶在。　暮年眼力嗟猶ほ在り、
多病顚毛却未華。　多病顚毛却つて未だ華ならず、
故作明窗書小字。　故に明窗を作りて小字を書し、
更開幽室養丹砂。　更に幽室を開きて丹砂を養ふ、

【詩意】暮年に及んでも眼力は壯年と同じく堅固である、多病なるも顚毛は却つて未だ白華を著けない、故に明窗を作りて其の窗下に於て小字を書く、其の上更に幽室を開きて此の中に於ては丹砂を養うて居る、

【字解】〔一〕丹砂　王梅谿曰く、先生與王定國書、近有人惠丹砂少許、光采甚奇、固不肯服、然其人教以養火觀其變化、聊以悅神度日と、

東坡圖云、南堂在州治南一里、俯臨大江、と、〔二〕千帆　施德初曰く牡牧之の詩、千帆美滿風と、

〔三〕

他時夜雨困移床。　他時夜雨移床に困しむ、
坐厭愁聲點客腸。　坐に厭ふ愁聲客腸に點ずるを、
一聽南堂新瓦響。　一たび聽く南堂新瓦の響、
似聞東塢小荷香。　聞くに似たり東塢の小荷の香を、

【詩意】他時夜雨の時は移床して聞くの不便は困みとする、坐に厭ふ雨が愁聲を齎らして客腸に點ずるには、一たび南堂の新瓦を打つの響を聞けば、東塢の小荷の香を聞くに似て是れのみは良によい、

〔四〕

山家爲割千房蜜。　山家爲めに割く千房の蜜、
稚子新畦五畝蔬。　稚子新畦五畝の蔬、
更有南堂堪著客。　更に南堂客を著くるに堪へたるあり、
不憂門外故人車。　憂へず門外故人の車、

門外多長者車轍、と、杜子美の詩、門多長者車と、

【字解】〔一〕移床　庾開府の詩就水更移床と、

〔四〕

【字解】〔一〕千房蜜　杜子美の詩、風落收松子、天寒割蜜房、と、〔二〕稚子　潘岳寡婦賦に、鞠稚子于懷抱、と、〔三〕五畝蔬　孟東野の詩、獨治五畝蔬と、〔四〕門外　「漢陳平傳」に、陳平家貧、席爲門、

【詩意】山家の生計として千房の蜜を割き、稚子の爲めには新畦に五畝の菜蔬を作る、更に南堂には賓客を容るるに足る坐席がある、門外に車聲あるも聊かも心配はしない、

〔五〕

掃レ地焚レ香閉レ閣眠。
(一)簟紋如レ水帳(二)如レ煙。
客來夢覺知何處。
挂起西窗浪接レ天。

〔五〕

地を掃ひ香を焚き閣を閉ぢて眠る、
簟紋水の如く帳は煙の如し、
客來りて夢覺め知る何れの處ぞ、
挂起すれば西窗浪天に接す、

【詩意】地を掃ひ香を焚き閣を閉ぢて眠る、簟紋は冷水の如くにて帳帷は煙の如くである、客來の聲を聞いて夢より覺めて客は何處ぞと云うて、挂起すれば西窗の外は浪が天に接する勢である、

【餘論】紀曰く、此首興象自然、不レ似二前四首一、有二宋人極叔之狀一、然以爲二夢得一、則未レ似、不レ知山谷何所レ見也と、黄山谷此の詩を讀みて劉夢得の作と疑ふ、紀評は之を言ふ、余少年の時、津阪東陽の絶句類選を讀む、此の五首中、掃レ地焚レ香の一首を采つて第三句を客來夢覺渾無事と作したるを記憶する、坡公の靈にして之を知らば、日本に人ありと言ふや否や、此の第五首を紀は稱揚するが、我が齋藤拙堂は尋常一樣と見做す、余を以て見れば宋絶として晩唐の地位に置くものと思ふ、

【字解】〔一〕簟紋　夏日に敷いて坐する具、〔二〕帳如煙　太白の詩、碧紗如レ煙隔レ窗語と、李義山の詩、水紋簟滑鋪二牙牀一と、

次韻子由種杉竹

子由が杉竹を種うるに次韻す

(一)吏散庭空雀噪レ簷。
閉レ門獨宿夜厭厭。
似レ聞梨棗同時種。
應與二杉篁一(三)刻(四)日添。
糟麴有レ神(五)熏不レ醉。
雪霜誇レ健巧相沾。
先生坐待清(六)陰滿。
空使二人人嘆一(七)滯淹。

吏散じ庭空しうして雀簷に噪ぐ、
門を閉ぢて獨宿夜厭厭、
聞くに似たり梨棗同時に種うるを、
應に杉篁と刻日に添ふべし、
糟麴神あり熏じて醉はず、
雪霜健に誇り巧に相沾す、
先生坐して待つ清陰の滿つるを、
空しく人人をして滯淹を嘆ぜしむ、

【字解】〔一〕吏散　官吏が役所を退出する、白樂天の詩、百吏放爾散と、〔二〕厭厭　「毛詩周頌」に、厭厭其苗と、又「秦風」に、厭厭良人と、又厭厭夜飲と、滿足して盛んなる貌、又安靜なる貌、〔三〕杉篁　陸龜蒙の詩、杉篁左右供二餘清一と、〔四〕刻日　期日を限定する、「宋史張浚傳」に、刻レ日決レ戰と、〔五〕熏　王梅谿曰く、懷寶至二楊羔舅家一、賜二熏肌酒一杯一、日、此酒柏葉草所レ造、亦云二千歲藁一也と、〔六〕清陰滿　陶淵明の詩、蕭蕭堂前林、中夏貯二清陰一と、〔七〕滯淹　「左傳文公六年」に、田滯淹と、久滯淹留である、韋莊の詩、帝里無レ成久滯淹、別レ家三度見二新蟾一と

【題義】子由が杉と竹とを官庭に種うる詩に次韻したのである、

【詩意】羣吏皆退散して後の官庭は雀が唯簷前に噪ぐのみ、門を閉ぢて獨り宿直して夜厭厭である、梨と棗とは同日に種うるが可いと聞いて居る、今杉と篁竹と同時に種ゑ日を限りて成長すると思ふ、

糟麴は神あり人を善熏せしむるも醉ふに至らない、雪霜にも杉竹は健を誇りて巧く相沾ふ、先生は坐して待つ清陰の滿つるに至るを、空しく人人をして官途に滯淹するを嘆ぜしむ、

孔毅父妻挽詞

結褵記初歡。同穴期晩歲。
擇夫得溫嶠。生子勝王濟。
高風相賓友。古義仍兄弟。
從君吏隱中。窮達初不計。
云何抱沈疾。俯仰便一世。
幽陰凄房櫳。芳澤在巾袂。
百年縱得滿。此路行亦逝。
那將有限身。長瀉無益涕。
君文照今古。不比山石脆。
當觀千字誄。寧用百金瘞。

結褵初歡を記し、同穴晩歲を期す、
夫を擇んで溫嶠を得たり、子を產んで王濟に勝る、
高風相賓友、古義仍つて兄弟、
君に吏隱の中に從ひ、窮達初め計せず、
云何ぞ沈疾を抱き、俯仰便ち一世、
幽陰房櫳凄たり、芳澤巾袂に在り、
百年縱ひ滿つるを得るも、此の路行いて亦逝く、
那ぞ有限の身を將て、長く無益の涕を瀉がん、
君が文今古を照らす、比せず山石の脆きに、
當に觀るべし千字の誄、寧ぞ用ひん百金の瘞、

【字解】【一】結褵　「毛詩東山」に、親結二其褵一、九十其儀、其新孔嘉、其舊如レ之何と、結褵又は結縭に作る、女の嫁する時、母が帨巾を帶に結び付ける、【二】同穴　毛詩に、死則同穴と、【三】溫嶠　「世說」云、晉溫嶠姑有レ女、屬レ嶠覓レ昏、嶠自有二昏意一、答曰、佳壻難レ得、如レ嶠云何、姑曰、何敢希二汝比一也、後日嶠報レ姑云、已得レ壻矣、門地壻身不レ減レ嶠、因下二一鏡臺一枚一、姑大喜、既交昏禮畢、姑女以レ手披二紗扇一、撫レ掌大笑曰、我固疑二是老奴一、果如レ所レ卜と、【四】勝王濟　「晉書」に、王渾妻鍾琰生レ濟、渾嘗共レ琰坐、濟趨レ庭而過、渾欣然曰、生レ子如レ此、足レ慰二人心一と、【五】賓友　「左傳僖公三十三年」に、臼季使過レ冀、見二冀缺耨一、其妻饁レ之、敬相待如レ賓と、【六】兄弟　毛詩、宴二爾新昏一、如レ兄如レ弟と、【七】吏隱中　高人は官吏と爲るも、要するに隱の意を離れない、杜子美の詩、吏隱適二性情一と、【八】房櫳　レンジマド、班婕妤の賦に、房櫳虛兮風泠泠と、【九】芳澤　「楚辭」に、粉白黛黑施二芳澤一と、【一〇】百年　韓退之の詩、百年未レ滿不レ得レ死と、【一一】有限身　有待身と義同じ、壽に限りある を云ふ、【一二】誄　死者の生前の功德を累列して讚稱する哀誄、誄辭である、【一三】瘞　うづむ、をさむである、埋藏、「漢書朱建傳」に、母死辟陽侯奉二百金祝一と、祝は死者の衣被である、

【詩意】結褵したる當時も初歡を記憶する、而して同穴偕老の誓を固くする、夫を擇んで溫嶠の如きの佳壻を得、子を生めば王濟に勝るの子を得、良人を賓友の如く敬待する古の高風を保ち、又兄の如く弟の如く、眞敬し眞愛する古義も知る、夫君が官海に出沒する中に隨從して、其の窮達は初めより計る所でない、一旦云何がして此の沈疾を抱き、俯仰頃刻の間に便ち一世を終る、今や幽陰房櫳の中良に凄氣である、されど夫人の芳澤は巾袂に在つて殘る、人生百年縱ひ其れ滿つるも、此の冥路は何人も竟に逝かざるを得ない、到底有限の身である、無益の涕を長く瀉ぐは止めよ、孔君の文は乃ち今古を照らす光暉がある、山石の脆きものとは比較にならない、當に千字の誄辭を觀れば足る、寧ぞ百金の厚贈を以て墓に瘞むるを用ひんや、

【餘論】友人の細君を弔せんと欲する者は、宜しく此等の詩を讀み、其の皮を得るも可、其の肉を得るも可、其の骨、其の髓を得る益す可である、

初秋寄子由

百川日夜逝。物我相隨去。
惟有宿昔心。依然守故處。
憶在懷遠驛。閉門秋暑中。
藜羹對書史。揮汗與子同。
西風忽淒厲。落葉穿戸牖。
子起尋袂衣。感歎執我手。
朱顏不可恃。此語君莫疑。
別離恐不免。功名定難期。
當時已悽斷。況此兩衰老。
失途既難追。學道恨不早。

百川日夜に逝く、物我相隨つて去る、
惟宿昔の心あり、依然として故處を守る、
憶ふ懷遠驛に在つて、門を閉づ秋暑の中、
藜羹書史に對し、汗を揮つて子と同じ、
西風忽ち淒厲、落葉戸牖を穿つ、
子起つて袂衣を尋ね、感歎我が手を執る、
朱顏恃む可からず、此の語君疑ふ莫かれ、
別離恐らくは免れざらん、功名定んで期し難し、
當時已に悽斷、況んや此の兩衰老、
失途既に追ふこと難し、道を學ぶ早からざるを恨む、

買田秋已議。築室春當成。
雪堂風雨夜。已作對牀聲。

田を買ひ秋已に議す、室を築き春當に成るべし、
雪堂風雨の夜、已に對牀の聲を作す、

【字解】〔一〕日夜逝　「論語子罕篇」に、子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜と、〔二〕宿昔心　鮑照の詩、何堅宿昔意、猜恨坐相仍と、〔三〕懷遠驛　施德初曰く、懷遠驛、在汴京麗景門河南岸、按東坡嘉祐六年、與子由同奉制策、寓懷遠驛と、〔四〕藜羹　王梅谿曰く、陸龜蒙、復友生論文書云、讀古聖人書、每涵泳義味、獨坐日昃、案上一杯藜羹、如五鼎太牢、饋於左右と、〔五〕袂衣　袷衣、アハセである、〔六〕朱顏　歐陽修の詩、須知朱顏不可恃、有酒當飲且相屬と、〔七〕恨不早　「唐書裴度傳」に、上已宴羣臣曲江、裴度不赴、帝賜詩曰、注想待元老、識君恨不早と、〔八〕買田　歐陽永叔の詩、築室買田清潁尾と、〔九〕雪堂　黄州の東坡に於て築きし堂名、大雪中に成りしを以て名づけ、且つ雪を堂壁に畫く、

【詩意】百川の水滾滾として日夜に流れ逝く、自も他も我も彼も相隨つて去る、我等は唯宿昔の素心あつて、是れのみは依然として故處を守りて動かない、追憶する曾て懷遠驛に在つて、門を閉ぢて秋暑の中に住せし事を、藜羹を飲みながら書史に對し、汗を揮うて勉强すること子と同じうした、然るに西風は忽ち淒厲にして、落葉は戸牖を穿ちて入る、其の時子は起つて袂衣を尋ね、感歎して我が手を執つて言ふ、朱顏は恃むべからず、衰顏に變ずるは遠くない、此の語君疑うてはいかぬ、別離は恐らくは免れざる所、功名富貴は到底期することは出來ない、此の談を爲して當時已に悽斷する、況んや此の兩衰老と成るに及んでは、壯年の失途は既に追ふことが出來ない、道を學ぶこと唯早からざるを恨むのみ、唯買田歸計の事は秋已に君と商議した、室を築き是の業も春時には落成するものと思ふ、回

思するに雪堂風雨の夜、君と已に對牀の聲を作せしことを、

【餘論】紀曰く、發端深警、又曰く、音節似二香山桐花詩一、但收斂謹嚴耳、王摩詰寄二祖三二詩、亦此格、而氣體各別と、

和黃魯直食筍次韻

黃魯直筍を食ふに和す次韻

飽食有二殘肉一。饑食無二餘菜一。
紛然生二喜怒一。似レ被二狙公賣一。
爾來誰獨覺。凜凜白下宰。

【自注】太和古白下。

一飯在家僧。至樂甘二不壞一。
多生味二蠹簡一。食レ筍乃餘債。
蕭然映二樽俎一。未肯雜二菘芥一。
君看霜雪姿。童稚已耿介。
胡爲遭二暴橫一。三嗅不レ忍レ嘬。
朝來忽解レ籜。勢迫二風雷一噫。
尙可下餉二三閭一。飯筒纏二五采一。

飽食して殘肉あり、饑食して餘菜無し、
紛然喜怒を生じ、狙公に賣らるるに似たり、
爾來誰か獨覺、凜凜たり白下の宰、
一飯在家の僧、至樂不壞を甘しとす、
多生蠹簡を味ふ、筍を食ふ乃ち餘債、
蕭然樽俎に映ず、未だ肯て菘芥を雜へず、
君看よ霜雪の姿、童稚已に耿介、
胡爲れぞ暴橫に遭ふ、三嗅して嘬ふに忍びず、
朝來忽ち籜を解き、勢は風雷迫る噫、
尙ふ三閭に餉して、飯筒五采を纏ふべし、

【字解】【一】飽食「漢霍去病傳」に、既還重車、餘棄二粱肉一、而士有二飢者一と、【二】饑食「毛詩」に、權二輿於我一乎、夏屋渠渠、今也每食無レ餘と、【三】狙公賣「莊子齊物論篇」に、狙公賦レ芧曰、朝三而暮四、衆狙皆怒、然則朝四而暮三、衆狙皆悅と、芧は橡子である、【四】獨覺 聲聞と緣覺と菩薩を三乘と謂ふ、其の緣覺は一名を獨覺と云ふ、自から飛花落葉を觀て、無常を悟り、一人の師をも求めざる人、【五】白下宰 王梅谿曰く、按魯直是時、爲二吉州太和縣宰一、先レ是魯直、作二食筍詩一、寄二先生一、其序云、太和諸生窘二於用韻一、而先生次二其韻一と、太和は古白下と稱す、【六】在家僧「名勝志」に、元豐四年、魯直令二太和一、嘗出二東郊一勸農、歸登二快閣一、晝臥、夜飯二鮓魚一、及レ覺猶若レ在レ口也、起散步行二林中一、見二一老嫗哭二墓下一、前置二飯鮓一、試詢レ之、則曰、只有二此女一、死若干年矣、訊二其月日一、卽庭堅所生之辰、因自贊曰、似レ僧有レ髮、似レ俗無レ塵、非二夢中夢一、無二身外身一と、【七】不壞「淮南子」に、孟孫至樂不壞と、【八】蠹簡 古書の義、【九】餘債「楞嚴」に、償二其宿債一と、【一〇】樽俎 酒樽と肉俎、【一一】菘 タウナ、【一二】芥 カラシナ、辛菜、【一三】耿介「楚辭」に、彼堯舜之耿介と、志操堅固にして庸俗と合せざるを言ふ、【一四】三嗅 論語の語、【一五】嘬「孟子滕文公」に、蠅蚋姑嘬レ之と、一口に食ふ貌、【一六】解籜 籜は竹皮、筍の皮、【一七】三閭 屈原を以て公自から譬ふ、【一八】飯筒 荆楚の俗、五月五日に竹筒に飯を盛り、五采の絲を以て縛り以て水に投じ、屈原を弔ふのである、

【題義】黃山谷が筍を食ふの詩に次韻して作る、

【詩意】飽くまで食うて猶ほ貴き殘肉がある、飢ゑて食へば賤しき餘菜も無い、紛然或は喜色を爲し或は怒色を生じて、殆んど人間も狙と同じく狙公に弄賣せらるる感がある、爾來誰人か獨覺の悟りを開くやと言はば、それは凜凜たる白下の長宰たる君である、一日一飯其の生活は出家せざる僧であ

る、至樂は不壞を甘しとし、多生には蠹魚と爲つて簡冊を食うたのであらう、今筍を食ふは其の餘債を償却するのである、蕭然として樽俎に映じて、未だ聊かも菘芥を雜へない、君看玉へ竹の霜雪の姿を、童稚乃ち筍の時代より已に耿介である、胡爲れぞ人間の暴横に遭ふや、我は三嗅して嘬ふに忍びない、考へて見れば朝來忽ち籜粉を解き、勢風雷に迫る氣がある、尙はくは一飯を三閭に餉りて、而して竹筒を五色の絲にて纏ひ玉ふがよい、

【餘論】紀曰く、忽然自寓、不レ粘不レ脫、信手無レ痕、而玲瓏四照と、韓退之の詠笋五排、白樂天の食笋五古各の一家の妙を極む、今公險韻を見ること穩韻と異ならず、山谷の原作は其の足下に在るを覺ゆ、

聞子由爲郡僚所レ捃。恐當レ去レ官

子由が郡僚の捃する所と爲つて、恐らくは當に官を去るべしと聞く

少學不レ爲レ身。宿志固有レ在。　少學身の爲めならず、宿志は固に在るあり、
雖レ然敢自必。用舍置度外。　然りと雖も敢て自から必とせん、用舍度外に置く、
天初若レ相レ我。發跡造宏大。　天初め我を相くる若く、發跡宏大を造す、
豈敢負レ所レ付。捐レ軀欲投會。　豈敢て付する所に負かん、軀を捐てて投會せんと欲す、
寧知事大繆。舉步得狼狽。　寧ぞ知らん事大に繆まるを、舉步狼狽を得、
我已無レ可レ言。墮レ甑難追悔。　我已に言ふ可き無し、甑に墮して追悔し難し、
子雖僅自免。雞肋安足レ賴。　子は僅かに自から免ると雖も、雞肋安んぞ賴むに足らん、
低回畏罪罟。黽勉敢言退。　低回罪罟を畏る、黽勉敢て言に退く、
若人疑或使。爲レ子得微罪。　若し人或使を疑はば、子が爲めに微罪を得ん、
時哉歸去來。共抱東坡耒。　時なる哉歸去來、共に東坡の耒を抱かん、

【字解】〔一〕少學　柳子厚の詩、少時陳レ力希二公侯一、許レ國不二復爲レ身謀一と、〔二〕置度外　「後漢書隗囂傳」に、帝曰且當レ置二此兩子於度外一と、〔三〕發跡　「司馬相如封禪文」に、公劉發二跡於西戎一と、〔四〕捐軀　曹子建の詩、誰言捐レ軀易、殺レ身誠獨難と、〔五〕大繆　「莊子繕性篇」に、時命大繆と、〔六〕狼狽　「酉陽雜俎」に、或言狼狽是兩物、狽前足絶短、每レ行常駕二於狼腿上一、狽失レ狼則不レ能レ動、故世言二事乖者一、稱二狼狽一と、〔七〕無可言　「後漢張步傳」に、負負無レ可レ言也と、〔八〕墮甑　「後漢郭太傳」に、孟敏客二居太原一、荷甑墮レ地、不レ顧而去、林宗見而問二其意一、對曰、甑已破矣、視レ之何益、林宗異レ之、因勸令二游學一、十年知レ名と、〔九〕雞肋　「晉書」に、劉伶嘗醉、與二俗人一相忤、其人攘レ袂奮レ拳而往、伶徐曰、雞肋不レ足二以安一尊拳一、其人笑而止と、〔一〇〕畏罪罟　「毛詩」に、豈不レ懷レ歸、畏二此罪罟一と、〔一一〕黽勉　「毛詩」に、黽勉從レ事、不二敢告一勞と、〔一二〕或使　意義明白を缺く、〔一三〕時哉　「尙書」に、時哉弗レ可レ失と、

【題義】子由の意見が郡僚の捃摭卽ちひろひとる所と爲り、子由は以て不平なるに由り辭職せんとするやに聞いて此を賦して子由を慰むるのである、

【詩意】少年より學に志したるは一身の爲めのみではない、宿志の確乎たる所は固より在ることあり、されど事を作す必ず吾が意見を是とするのではない、意見の通ると通らざるとは度外に置く、天は最初は我を相くるが若く、發端の跡は宏大を造すに至ると思はる、然らば我は天の付する所に負かない樣に心を注ぐ、此の軀を捐てて會に投ずるの覺悟である、斯く考へたるは寧んぞ知らん事の大に謬まりであつたことを、一擧一步皆狼狽するのである、されど我は已に何事も言はない、肩から墮した甑は已に壞れて揮り回り視るも詮はない、子は僅かに大事に至るを免れたるも、雞肋は舍つるも惜しくないもの何ぞ賴むに足らん、左低右回して罪罟を畏るるを知る、黽勉敢て言に勇退すべきである、若しや他人が子瞻も同類であると疑はば、子が爲めに甘んじて微罪を得るを辭しない、時なる哉歸去來を歌ひ、共に東坡に未を把つて畊すであらう、

【餘論】當時の事情が明白ならざれば、古人も已に詩意を解するに苦しむ、余が解する所の詩意も大に繆まるものあらんと考ふ、明達の士の敎を乞ふ、紀は捐軀欲二投會一の五字を拙と評す、此の如き詩は全體が巧拙以外に在る、五字のみ拙と云ふは、評する者が拙である、

次二韻王鞏南遷初歸二首

王鞏の南遷初めて歸るに次韻す　二首

問君謫南賓。野葛食幾尺。　問ふ君南賓に謫せられ、野葛食ふこと幾尺ぞ、

人に逢へば瘴髮黃、市に入つて胡眼碧なり、

三年過ぎ易からず、坐睨して天壁に倚る、

歸來貌故の如く、妙語仍ほ鏑を破る、

那ぞ能く詩酒を廢せん、亦未だ禪寂を妨げず、

願はくは尙書郎と爲つて、還た上方の舄を賜へ、

【字解】【一】南賓　賓州は唐始めて置く、今の廣西の南寧道、【二】野葛　宋の朱翌の「猗覺寮雜記」に「嶺表錄異記」を引いて曰く、野葛俗呼爲二胡蔓一、蔓生如レ蘭、香光而厚、置生二菜中一毒レ人、用二羊血一解、羊食レ之肥大と、【三】髮黃　王梅谿曰く、嶺南人瘴癘所レ感、則鬢髮皆黃、其眼皆作二胡人碧色一と、【四】倚天壁　邨嶺を謂ふ、白樂天の詩、容顏盡怪長如レ故と、【六】破鏑　「世說」に、劉尹至二王長史許一、淸言旣去、長史曰、詔音令辭不レ如レ我、往輒破レ的勝レ我と、的を鏑とする意は同じ、【七】禪寂　「淨名經」に、維摩詰、以二善方便一、毘耶離、一心禪寂、攝二諸亂意一と、【八】上方舄　後漢の王喬は朝する毎に雙鳧が之に從ふ、一日羅を張り之を捕ふるに但一雙舄のみ、乃ち上方に詔して諦視するに、鄭に賜ふ所の舄にて尙書郎の用ふるもの、

【題義】王鞏が南賓に謫遷せられてより年を經て初めて歸り感を述べたる詩に次韻して作る、

【詩意】君に問ふ君は南賓に謫せられて、南賓に多く產する野葛を食ふこと凡そ幾尺であるぞ、其の國は逢ふ人毎に瘴髮が黃である、市街往來の者の眼は皆碧である、他鄕から往きては三年の生活は過ぎ易しとは思はぬ、日日坐睨する天に聳ゆる山を、然るに君は歸來しても容貌は故の如くにして變らない、妙語も亦鏑を破るの元氣がある、其の元氣では那ぞ能く詩酒を廢せんや、亦時ありては禪寂に

入つて觀察することを妨げない、古の神仙の如く尙書郎と爲つて、上方より賜うた舄を返上して俗界を離れ去るの志を願ふのである、

〔一〕

江家舊池臺。修竹圍一尺。
歸來萬事非。惟見秦淮碧。
平生痛飲處。遺墨鴉棲壁。
西來故父客。金印雜鳴鏑。
三槐老更茂。花絮春寂寂。
中微未可料。家廟藏赤舄。

〔二〕

江家の舊池臺、修竹圍むこと一尺、
歸來萬事非なり、惟見る秦淮の碧なるを、
平生痛飲の處、遺墨鴉壁に棲む、
西來故父の客、金印鳴鏑雜はる、
三槐老いて更に茂し、花絮春寂寂たり、
中ごろ微未だ料るべからず、家廟は赤舄を藏す、

【字解】〔一〕修竹　劉禹錫の詩、青松鬱成ㇾ塢、修竹盈尺圍と、〔二〕秦淮　川の名、江蘇省溧水縣より出で、西北に流れて江寧城を貫き、大江に入る、秦始皇之を鑿つ、江總の詩、歸來唯見秦淮碧と、〔三〕鴉棲壁　盧仝示ニ添丁一詩に、閒來案上翻ニ墨汁一、塗ニ抹詩書一如ニ老鴉一と、〔四〕故父客　「漢吳王濞傳」に、周亞夫、問ニ故父絳侯客一と、「史記張耳傳」に、外黃富人女亡、其夫去抵ニ父客一と、〔五〕金印　「漢書百官表」に、金印紫綬と、〔六〕雜鳴鏑　「漢匈奴傳」に、冒頓廼作ニ鳴鏑一、習ニ勒其騎射一と、鏑はヤジリ、矢の稽古をする、〔七〕三槐　「周禮」に、面ニ三槐一三公位焉と、公の三槐堂銘に故兵部侍郎晉國王公、嘗手植ニ三槐於庭一曰、吾子孫必有ㇾ爲ニ三公一者ㇾ已而魏國文正公、相ニ眞宗一、享ニ福祿榮名一者、十有八年、其子懿敏公、事ニ仁宗一、出ニ入侍從將帥一三十餘年、鞏蓋其子也と、〔八〕花絮　徐彥伯、雪の詩、花絮落ニ殘機一と、〔九〕中微　「史記楚世家」に、其後中微、或在ニ中國一、或在ニ蠻夷一と、〔一〇〕未可料　圖南未ㇾ可ㇾ料と、〔一一〕家廟　「唐禮樂志」に、諸臣之亭、其親廟室、服器之數、視ニ其品一、開元十二年著令、一品二品四廟、三品三廟、五品二廟、嫡士一廟、四品五品、有ニ兼爵一亦三廟と、〔一二〕赤舄　「詩」に、王錫ニ韓侯一、玄袞赤舄と、

【詩意】江總が家の舊池臺は、修竹が圍むこと一尺である、歸來して見れば萬事非なるに、依然として同じきものは秦淮水の碧のみである、嘗て住して平生痛飲の處、壁上には吾が書したる字が遺つてある、西來故父の客を見れば、金印を佩び鳴鏑を雜ふる者が在る、三槐は老木と爲りて葉は益す茂盛である、が花絮は飛んで春寂寂である、家も人も前後は盛んなるも中間は微なること未だ料り知るべからずと思ふ、併し乍ら家廟には赤舄を藏して名門であることは人が皆知る、

【餘論】後首の江家以下二十字を紀が評して曰く、用事欠ニ親切一、江令乃亡國之餘、非ニ謫宦一也と、余も亦言ふ、江總は（江令とも稱す）梁陳隋の三朝に仕して、人品は論ずるに足らざる者、此の者を拉し來りて王鞏の謫官歸來と同架に論ずるは、紀が後世の評を待たず、王鞏が不滿足なりしならんと思ふ、諺に云ふ善泳する者は善溺すと、公が此の句は善溺せるものである、

孔毅父以ㇾ詩戒ニ飲酒一問ニ買田且乞墨竹一次ニ其韻一

孔毅父、詩を以て飲酒を戒め、買田を問ひ、且墨竹を乞ふ、其の韻に次す

酒中眞復有ニ何好一。　酒中眞に復た何の好きかある、

〜【字解】〔一〕孟生　「晉書」に、孟

(一)孟生雖レ賢未レ聞レ道。
醉時萬(二)慮一掃空。
醒後紛紛如二宿草一。
十年揩(三)洗見二眞妄一。
石女無レ兒焦穀槁。(四)
此身何異貯酒瓶。
滿輒予レ人空自倒。
武昌痛飲豈吾意。
性不レ違(五)レ人遭レ客惱。
君家長松十畝陰。
借二我一菴一聊洗心。
我田方寸耕不レ盡。(六)
何用百頃麋(七)千金一。
枕レ書睡熟呼不レ起。

孟生賢と雖も未だ道を聞かず、
醉ふ時萬慮一掃して空し、
醒むる後紛紛として宿草の如し、
十年揩洗眞妄を見る、
石女兒無く焦穀槁る、
此の身何ぞ異ならん貯酒の瓶に、
滿つれば輒ち人に予へ空しければ自か[ら倒]る、
武昌痛飲する豈吾が意ならん、
性人に違はず客に遭うて惱む、
君が家の長松十畝の陰、
我に一菴を借して聊か洗心せん、
我が田方寸耕し盡きず、
何ぞ用ひん百頃千金を麋するを、
書を枕にし睡熟して呼べども起たず、

嘉好二酣飲一、愈多不レ亂、桓溫問レ嘉、酒有二何好一、而卿嗜レ之、嘉曰、公未レ得二酒中趣一耳と、【二】萬慮　韓退之の詩、數杯澆レ腸雖二暫醉一、皎皎萬慮醒還新と、【三】揩洗　淨揩清洗と成語して、洗ひ清める、「北史」に、則防二揩洗之僞一と、是は別意である、【四】石女　「淨名經」に、文殊室利、問二維摩詰一言、菩薩云何觀二於衆生一、維摩詰言、如二焦穀芽一、如二石女兒一と、又「普燈錄」に、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌と、石女とは龜毛兎角と同じく、非有の譬である、【五】性不違人　晉の嵇康の詩、性不レ違レ物、頻致二怨憎一と、【六】我田　丹田方寸である、【七】麋　麋爛、消費すること、【八】雜擬　施德初曰く、雜謂レ非二一類一、擬比二古志一、以明二今情一と、【九】潤色　「論語憲問篇」に、行人子羽、修二飾之一、東里子產、潤二色之一と、

好學憐君工二雜擬一。(八)
且將二墨竹一換二新詩一。
潤(九)色何須待二東里一。

好學憐む君が雜擬に工なるを、
且墨竹を將て新詩に換へん、
潤色何ぞ須ひん東里を待つを、

【題義】孔毅父が詩を作りて、公の飲酒を戒め、買田の事實を問ひ、且墨竹の揮毫を乞はる、其の返詩を作る、

【詩意】酒中に眞に復た何の好きことあるや、と問うたら孟嘉は趣味を以て答へたるは賢は賢である、が未だ眞に聖人の道を聞いた人とは言へない、酒に醉ふ時は千思も萬慮も一掃して空しきも、醒めて後は千思萬慮が紛紛として宿草の如くに生ずる、過去十年間の事を揩洗して眞と妄とを見る、石女無兒にて焦穀槁の類、酒中の眞境は石女の如き人には解らない、考ふれば此の一身は渾て貯酒の瓶と同樣である、自からも飲み人にも予へ空しければ倒臥するのみ、武昌に於て痛飲せしことは吾が本意ではない、吾が性人に逆ふことを忌む、從つて客に逢へば飲んで惱む、孔君が家の長松は十畝を陰する底の大である、乞ふ我に其の一菴を借して洗心するを許可せよ、洗心する我が田地は心其の物にて僅に方寸であるが一生畊し盡きざるもの、亦別に何ぞ百頃の田を買うて千金を消費する必要あらん、書を枕にして熟睡して呼べども起たない、好學憐む君が雜擬に工なるを、君の乞ふが儘に我が墨竹を將て君が新詩と交換せんとする、詩成らば直ちに贈り玉へ、潤色を東里の子產などに求むるに及ばない、

【餘論】紀曰く、隨事作レ答、自是倡和正格、而限ニ於韻脚一、收束處、未レ能ニ圓足一と、宋人の詩は鈎章棘句は定評である、十年、石上の二句、新創は新創なるも棘句たるを免れない、天魔外道の類のみ、觀奕道人痛罵せざるは不思議である、

任師中挽詞

大任剛烈世無レ有。
疾レ惡如レ風朱伯厚。
小任溫毅老更文。
聰明慈愛小馮君。
兩任才行不レ須レ說。
疇昔竝友ニ吾先人一。
相看半作ニ晨星沒一。
可レ憐太白配ニ殘月一。
大任先去冢未レ乾。
小任相繼呼不レ還。
强寄一樽生死別。
樽中有レ淚酒應レ酸。
貴賤賢愚同盡耳。
君今不盡緣ニ賢子一。
人間得喪了無レ憑。
只有ニ天公終可倚一。

任師中挽詞

大任は剛烈世に有ること無し、
惡を疾むこと風の如し朱伯厚、
小任は溫毅老いて更に文、
聰明慈愛小馮君、
兩任の才行說くを須ひず、
疇昔竝んで吾が先人に友たり、
相看るに半は晨星沒すると作る、
憐む可し太白殘月に配す、
大任先づ去つて冢未だ乾かず、
小任相繼ぎ呼べども還らず、
强ひて寄す一樽生死の別れに、
樽中淚あり酒も應に酸なるべし、
貴賤賢愚同盡のみ、
君今不盡なるは賢子に緣る、
人間の得喪了に憑ること無し、
只天公の終に倚る可きあり、

【字解】〔一〕大任　師中の兄名は孜、字は邈聖、〔二〕朱伯厚「後漢書陳蕃傳」に、朱震字伯厚、爲ニ州從事一、奏ニ濟陰太守臧罪一、諺曰、車如ニ雞棲一馬如レ狗、疾レ惡如レ風朱伯厚と、〔三〕小任　師中名は伋、〔四〕小馮君「前漢馮奉世傳」に、子九人、野王爲ニ上郡太守一、立五原太守、徙ニ上郡一、治行畧與ニ野王一相似、吏民嘉美、相代爲ニ太守一、歌レ之曰、大馮君小馮君、兄弟繼レ踵相因循、聰明賢知惠ニ吏民一、政如ニ魯衞一德化鈞、周公康叔猶二君と、〔五〕疇昔　前日とか昨夕とか云ふの義、「左傳宣公二年」に、疇昔之羊、子爲レ政と、〔六〕晨星　張華の詩、廓落晨星稀と、〔七〕殘月　韓退之の詩、東方未レ明大星沒、獨有ニ太白對ニ殘月一と、〔八〕未乾　「駱賓王傳」に、一抔之土未レ乾、六尺之孤安在と、〔九〕一樽　李太白の詩、一樽齊ニ生死一、萬事固難レ審と、〔一〇〕酒應酸　白樂天の詩、送レ我和レ淚酒と、「揚子法言」に、日昃不レ飲レ酒酒必酸と、〔一一〕貴賤　白樂天の詩、賢愚貴賤同歸レ盡、北邙冢墓高嵯峨と、〔一二〕賢子　師中の子、名は大防、字は仲微、

【詩意】兄の大任は性剛烈なること世に少い、惡を疾むこと風の如き朱伯厚に似て居る、弟の小任は性溫毅なるが老いては更に溫醇であつた、而かも聰明慈愛は今日の小馮君とも言ふべきである、君等兄弟の才行は詳說する必要がない、疇昔吾が先人が君等を友として游ぶのを見ても君等の人品は解かる、先人の友人は今日半は失して存在する者は晨星の如くである、太白が殘月に配する曉天の景色の如くでもある、兄の遵聖は先きに逝いて冢未だ乾かざるのであるに、弟の君も繼ぎて逝き呼ぶも復た還らない、强ひて一樽を寄せて生死の別を表せんとするも、樽中に淚點が落つれば酒味も酸味と爲る、思へば貴賤賢愚を問はず早晩皆同盡である、然るに君の任家の盡きざるは賢子が有るに緣る、人間の

得喪は了に憑ることが無い、只天公のみ有つて終に倚るべきである、

【餘論】紀曰く、亦是凡語と、凡語なるも東坡先生の百有餘字の弔詞を受ける任師中は死して餘榮あるものと思ふ、

子由作二頌。頌石臺長老。問公手寫蓮經。字如黑蟻。且誦萬遍。脇不至席二十餘年。予亦作二首

子由二頌を作り、石臺長老を頌す、問公蓮經を手寫し、字黑蟻の如く、且誦すること萬遍、脇、席に至らざること二十餘年、予も亦二首を作る

眼前擾擾黑蚍蜉。
口角霏霏白唾珠。
要識吾師無礙處。
試將燒却看瞋無。

【題義】子由が二頌を作りて石臺長老を頌讚す、問公は法華經を手寫して、其の字が黑蟻の如く、而して、誦經も亦萬遍、横臥せざること二十年、公乃ち弟の此の頌に倣うて此の二首を作り、石臺を讚したのである、

【詩意】問公の書したる經字は眼前擾擾たる黑蚍蜉の如きである、其の蟻の口角は霏霏として白く珠を唾く狀を爲してある、世人が若し吾師問公の圓融無礙の境地を識らんと思ふ者は、問公が一切の瞋毒を燒却したる處を看るがよい、

【字解】〔一〕蚍蜉　蟻の大なるもの、〔二〕白唾珠　「莊子秋水篇」に、子不レ見二夫唾者一乎、噴則大者如レ珠、小者如レ霧と、「後漢趙壹傳」に、咳唾自成レ珠と、〔三〕無礙處　「維摩經」に辨才無礙と、〔四〕瞋無瞋　は三毒の一、

〔一〕

眼睛心地兩虛圓。
脇不沾牀二十年。
誰信吾師非不睡。
睡蛇已死得安眠。

〔二〕

眼睛も心地も兩ながら虛圓、
脇牀に沾はざること二十年、
誰か信ぜん吾師睡らざるにあらざるを、
睡蛇已に死して安眠を得たり、

【字解】〔一〕脇不沾牀　「傳燈錄」に、西天脇尊者、未二嘗睡眠一、其脇不レ至レ席、震旦四祖、道信大師、攝レ心無レ寐、脇不レ至レ席、僅六十年と、〔二〕睡蛇　睡眠煩惱に譬ふ、

【詩意】眼睛も心地も兩ながら虛圓である、脇が席に沾はざること二十年の永きに涉る、誰か信ずるや吾師の睡らざるにあらざることを、睡眠の煩惱毒たる蛇が已に死するに依つて反對に安眠を得たのである、

【餘論】紀曰く、二首大偈頌氣と、余案ず前首の結末試將の句は殆んど語を成して居らぬ、鈎棘は宋人の癖とは言へ、此は其の尤なるものである、

鄧忠臣母周氏挽詞

微生眞草木。無ㇾ處ㇾ謝(一)天力。
慈顏如春風。不ㇾ見桃李實。
古今抱此恨。有志俯仰失。
公子豈先知(二)。戰戰常惜ㇾ日。
吾君日月照(三)。委曲到肝鬲(四)。
哀哉人子心。吾何愛一邑(五)。
家庭拜前後(六)。粲然發笑色(七)。
豈比黃壤下(八)。焚瘞千金璧(九)。
若人道德人。視ㇾ此亦戲劇(一〇)。
聊償曾閔意(一一)。遽與仙佛寂(一二)。
孤纍臥江渚(一三)。永望墳墓隔(一四)。
作ㇾ詩相楚挽(一五)。感動淚再滴(一六)。

【字解】〔一〕天力　「漢書霍光傳」に、乃天力也と、〔二〕俯仰　陸士衡の詩、眷我耿介懷、俯仰媿ニ今古一と、〔三〕先知　知識が

鄧忠臣が母周氏挽詞

微生に眞に草木、天力を謝する處無し、
慈顏春風の如く、見ず桃李の實、
古今此の恨を抱く、有志俯仰失す、
公子豈先知ならんや、戰戰常に日を惜しむ、
吾が君日月照らす、委曲肝鬲に到る、
哀しい哉人の子の心、吾何ぞ一邑を愛せん、
家庭前後を拜す、粲然として笑色を發す、
豈比せん黃壤の下、焚瘞す千金の璧を、
若き人道德の人なり、此を視て亦戲劇、
聊か償ふ曾閔の意、遽かに仙佛と寂す、
孤纍江渚に臥す、永く墳墓の隔りを望む、
詩を作りて楚挽を相く、感動して淚再び滴る、

常人より較や先なること、「孟子萬章」に、使ニ先知覺ニ後知一、使ニ先覺覺ニ後覺一也と、〔四〕戰戰　「論語」に、戰戰兢兢と、恐懼戒謹の意、〔五〕日月照　「莊子天道篇」に、舜曰天德而出寧、日月照而四時行と、〔六〕肝鬲　肝膈、心と脾との間が膈である、〔七〕一邑　周氏は永嘉縣の太君に封ぜらる、一邑は卽ち永嘉を指す、〔八〕前後　王梅谿曰く、「公羊傳文公十三年」に、周公何以稱ニ太廟於魯一、封ニ魯公一、以爲ニ周公一也、周公拜ニ於前一、魯拜ニ於後一と、〔九〕粲然　笑ふ形容、「穀梁傳昭公四年」に、軍人粲然皆笑と、〔一〇〕黃壤　黃土と同じ、樂天の詩、厚夜背敎ニ黃壤曉一と、〔一一〕千金璧　「莊子山木篇」に、棄ニ千金之璧一、負ニ赤子一而趨と、〔一二〕若人　「論語」に、子謂ニ子賤一、君子哉若人と、「もし人」ではなく「かくのごとき人」である、〔一三〕戲劇　「五代史南唐李景傳」に、便議ニ班旋一、眞同ニ戲劇一と、〔一四〕曾閔　曾參と閔損、共に孝道に厚き人、元稹の詩、昔公孝ニ父母一、行與ニ曾閔一儔と、〔一五〕孤纍　罪あるも死せざるを孤纍と曰ふ、漢揚雄傳注に見ゆ、公自から謂ふ、〔一六〕相楚挽　「史記商君傳」に、童子不ニ歌謠一、舂者不ニ相杵一、此五羖大夫之德也と、相はキネウタ、舂くに杵を送る時歌ふ、辛楚哭挽に勝へず、〔一七〕淚再滴　公は前年成國太夫人の艱に丁る、今年亦鄧母を哭する故に云ふ、

【題義】鄧忠臣字は眷思の母を挽む詞である、

【詩意】微微たる此の生は眞に草木の如くであるが、人と生れたるは天力を謝するに處は無い、母氏の慈顏は春風の如く溫なるも、惜しい哉桃李の實の大なるを見ずに逝く、古今共に此の恨を抱くもの多く、志あるも俯仰の間に失する、公子は先知の人ではない、唯戰戰として光陰を惜み勉强する、吾が太君たる母氏は日月の照臨する如くである、訓育する旨の委曲は肝膈に到り徹する、哀しい哉人の子の心、吾は一邑を愛するのみではない、家庭は甲邑乙邑と前後に拜して居る、粲然と笑顏の色を發する、豈比せんや黃土の下に、千金の重璧を焚瘞し去るには、若のごとき人は眞に道德の人である、此等の事を視ること戲劇と同樣である、聊か曾閔の孝意を以て償ふ、何ぞ料らん仙佛と歸寂する、余

や孤槀の身を以て江渚に臥す、永く墳墓隔るを望む、今詩を作りて以て楚挽を歌ふを相く、感動して涙が再び滴るに禁へない、

【餘論】挽詞此に至りては鈎句棘語、人の死に於て己が才學を示す具に供するものの如くで、讀む者は感動しないと思ふ、公の挽詞は多く此の類、

徐君猷挽詞

徐君猷の挽詞

一舸南游遂不歸。
清江赤壁照人悲。
請看行路無從涕。
盡是當年不忍欺。
雪後獨來栽柳處。
竹間行復采茶時。
山城散盡尊前客。
舊恨新愁只自知。

一舸南游して遂に歸らず、
清江赤壁人の悲みを照らす、
請ふ看よ行路從涕無く、
盡く是れ當年欺くに忍びず、
雪後獨來して柳を栽うる處、
竹間行くゆく復た茶を采る時、
山城散じ盡くす尊前の客、
舊恨新愁只自から知る、

【字解】【一】一舸　舸は船の大なるもの、【二】赤壁　山の名、湖北に三處ある、黄岡縣と嘉魚縣と武昌縣と、三國の戰爭は嘉魚縣で、公の游地は黄岡縣である、公は三國の戰地に誤る、【三】行路　王梅谿曰く、「禮記」に、孔子之ゝ衞遇ニ舊館人之喪一、入而哭ゝ之哀、出曰、予惡ニ夫涕之無ニ從也一と、【四】不忍欺　「史記滑稽傳」に、「子產治ゝ鄭、民不ゝ能ゝ欺、子賤治ニ單父一、民不ゝ忍ゝ欺」と、【五】栽柳處　馮應榴曰く、先生醉蓬萊詞題云、謫ニ居黄州一、三見ニ重九歲一、與ニ徐君猷一、會ニ樓霞樓一、今年公將ニ去乞ニ郡湖南一、故作ニ是詞一、中云、搖落霜風、有ニ手栽雙柳一、此詩蓋紀ゝ實也と、【六】舊恨　李後主の詩、往愁新恨有ゝ誰知と、柳子厚の詩、徘徊只自知と、

【題義】徐君猷が黄州知事にて卒するを挽む詞、

【詩意】一舸に乘じて南游中遂に不歸の人と爲る、清江赤壁が人の悲む狀を照らす如くである、請ふ看よ行路の他人は涕に從ふもの無きも、徐君が當年州を治めし功は欺くことは出來ない、余は今憶ひ起す曾て雪後に來りて栽柳の處を、又竹間に行いて復た采花の時を、然るに今や山城散じ盡くす尊前の客、誰も其の時の樣を知る者はない、舊恨と新愁と幷せて只自から知るのみ、

【餘論】紀曰く、三四太拙と、之を周氏挽詞に比すれば稍や勝れたるかと思ふ、不歸、不忍の同字は例の疵である、

洗兒戲作

洗兒戲れに作る

人皆養ゝ子望聰明。
我被聰明誤一生。
惟願孩兒愚且魯。
無ゝ災無ゝ難到ニ公卿一。

人は皆子を養うて聰明を望む、
我は聰明に一生を誤らる、
惟願ふ孩兒愚且魯、
災無く難無く公卿に到るを、

【字解】【一】孩兒　一本生子に作る、生子の方が勝る、

【詩意】千人が千人皆其子の聰明なることを願望するが、我は聰明の爲めに一生を誤つたのである、願はくは生まれた子が愚にして且魯、而して何の災も無く何の難も無く公卿の位に到らんことを、

【餘論】紀曰く、此種詩、豈可レ入レ集と、聰明の者は縱令公卿に到るも災難を蒙る、又兒刃に斃るるもの多く、公卿にて一生無事なるもの大抵愚物である、余は云ふ公の集中眞實の詩であると、

和蔡景繁海州石室

蔡景繁の海州石室に和す

芙蓉仙人舊游處。
蒼藤翠壁初無レ路。
戲將桃核裹黃泥。
石間散擲如風雨。
坐令空山作錦繡。
倚天照レ海花無數。
花間石室可レ容車。
流蘇寶蓋窺靈宇。

芙蓉仙人舊游の處、
蒼藤翠壁初めは路無し、
戲れに桃核を將て黃泥に裹み、
石間に散擲して風雨の如し、
坐して空山をして錦繡と作らしむ、
天に倚り海を照らし花無數、
花間の石室車を容るべし、
流蘇寶蓋靈宇を窺ふ、

【字解】【一】芙蓉仙人　公が亡友石曼卿、【二】桃核　桃の實子、「歐陽修詩話」に、石曼卿、通判海州、以山嶺高峻、人路不通、了無花卉點綴映照、使下人以泥裹桃核、爲彈拋擲於山嶺之上、一二歲間、花發滿山、爛如錦繡、と、【三】流蘇寶蓋　貴人の車の裝飾を云ふ、又仙車の形容と見るも可い、【四】霹靂　電雷が急激に鳴る貌、「後漢王喬傳」に、喬爲葉令、天降玉棺於堂前、吏入

何年霹靂起神物。
玉棺飛出王喬墓。
當時醉臥動千日。
至今石縫餘糟酳。
仙人一去五十年。
花老室空誰作主。
手植數松今偃蓋。
蒼髯白甲低瓊戶。
我來取酒酹先生。
後車仍載胡琴女。
一聲冰鐵散巖谷。
海爲瀾翻松爲舞。
爾來心賞復何人。
持節中郎醉無伍。

何れの年か霹靂神物を起す、
玉棺飛び出づ王喬の墓、
當時醉臥動もすれば千日、
今に至りて石縫糟酳を餘す、
仙人一たび去つて五十年、
花老い室空しくして誰か主と作る、
手植の數松今偃蓋、
蒼髯白甲瓊戶に低る、
我來り酒を取つて先生に酹ぐ、
後車仍ほ載す胡琴の女、
一聲冰鐵巖谷散ず、
海は瀾翻を爲し松は舞を爲す、
爾來心賞復た何人ぞ、
節を持する中郎醉へば伍無し、

推排、終不搖動、喬曰、天帝獨召レ我耶、乃沐浴寢其中、蓋便立覆、宿昔葬於城東、而土自成レ墳と、【五】糟酳　糟は ニゴリサケ、酳は シタミザケ、施德初曰く「博物志」昔劉元石、於中山酒家酤酒、酒家與千日酒、而忘言其節度、歸至家當醉、家人以爲死、權葬之、酒家計千日滿、往視之、開棺始醒と、【六】偃蓋　松の枝葉が横に廣く覆ふ貌、【七】瓊戶　玉にて飾りたる戶、宋之問の詩、畫堂瓊戶特相宜と、【八】酹　酒を地に沃ぎて神を祭る、【九】後車　「楚辭惜誓章」に、載玉女於後車と、【一〇】一聲　白樂天の詩、鐵擊珊瑚一兩曲、冰瀉玉盤千萬聲と、【一一】海爲瀾翻　「傳燈錄」に、乾闥婆王奏レ樂、須彌震動、大海騰レ波、迦葉起舞と、【一二】中郎　後漢の蔡邕は左中郎、以て景繁

獨臨斷岸呼日出。
紅波碧巘相呑吐。
徑尋我語覓餘聲。
拄杖彭鏗叩銅鼓。
長篇小字遠相寄。
一唱三歎神悽楚。
江風海雨入牙頰。
似聽石室胡琴語。
我今老病不出門。
海山巖洞知何許。
門外桃花自開落。
牀頭酒甕生塵土。
前年開閤放柳枝。
今年洗心歸佛祖。

獨り斷岸に臨んで日出を呼ぶ、
紅波碧巘相呑吐す、
徑ちに我語を尋ねて餘聲を覓む、
拄杖彭鏗として銅鼓を叩く、
長篇小字遠く相寄す、
一唱三歎神悽楚、
江風海雨牙頰に入る、
聽くに似たり石室胡琴の語を、
我今老病門を出でず、
海山巖洞知る何許ぞ、
門外桃花自から開落、
牀頭の酒甕塵土を生ず、
前年閤を開きて柳枝を放ち、
今年心を洗うて佛祖に歸す、

夢中舊事時一笑。
坐覺俯仰成今古。
願君不用刻此詩。
東海桑田眞旦暮。

夢中の舊事時に一笑、
坐に覺ゆ俯仰今古と成る、
願はくは君用ひざれ此詩を刻するを、
東海桑田眞に旦暮、

【題義】淮南轉運使たる蔡景繁が石室を歌ふ詩に和して作る、此の石室は石曼卿が曾て此の處に知府と爲つて功績があれば詩中多く曼卿が事を言うたのである、

【詩意】芙蓉仙人が舊游の處を見れば、蒼藤が翠壁に垂れて初めは路が無い、是の故に仙人が戯れに桃核を黄泥に裹んで山上に抛げて見たれば、其の核が石間に風雨の如き勢にて飛んだ年を經てから、此の空山が桃花錦繡の壯觀と爲る、上は天に倚り下は海を照らして花無數である、而して其の花間の石室も今日は車を容るるの餘地がある、宛も神仙の境の流蘇寶蓋の靈宇を窺ふことが出來る、何れの年か知らず霹靂の響とともに神物を起したるかを、玉棺飛んで出でし王喬の墓は乃ち此處である、當時寸刻醉臥せしと思ふも動もすれば千日餘である、故に今に至るまで石縫に尙ほ當時の糟醋を餘すを見る、芙蓉仙人は一去してより已に五十年である、花は老い室は空しく誰か桃花石室の主人公と爲るや、仙人當時手植の數松も今は偃蓋の如くにして、蒼髯白甲が瓊戸に低れてある、我も來りて酒を取りて先生の靈に沃ぎ祭る、其の祭の助役として後車には胡琴を彈ずる女を載せて居る、一彈一聲冰

に響ふ、景繁は淮南に漕使と爲つて來るに由る、【一三】碧巘　絶巘の碧色、【一四】彭鏗　彭は鼓聲の形容、鏗は銅聲の形容、【一五】入牙頰　王梅谿曰く、松陵詩集添漁具詩序云、江風海雨、械械生牙頰間、眞世外漁者之才也と、【一六】開閤　閤は閨閤、白樂天、不能忘情吟序に、樂天既老又病風、乃錄家事、會經費、去長物、妓有樊素者、年二十餘、綽綽有歌舞態、善唱楊枝、人多以曲名名之、由是名聞洛下、籍在經費中、將放之、素慘然立且拜、嬭變有辭、辭畢泣下、予愍默不能對、且命反袂飲、素酒自飲一杯、快吟數十聲、因自哂題其篇、曰不能忘情吟と、【一七】俯仰　陸士衡の詩、俯仰媿今古と、【一八】東海　「神仙傳」に、麻姑謂王方平曰、接待以來、已見東海三爲桑田と、

鐵の如く響き巖谷に散ずる、其の妙奇に感じて海水は瀾翻を爲し松葉は歌舞を爲す狀である、仙人以來之を心賞する者は復た何人である、それは持節の中郎である、中郎は醉うて伍なき人、伍する人無きも獨り斷岸に臨んで日出を呼び出す、日出づるが爲めに紅波と碧巘と相呑吐する、徑ちに我が語を我れ自から尋ねて何處まで達するやと餘聲を覓めて、拄杖して彭鏗と銅鼓を叩く、而して長篇が就り小字に書き遠く此の東坡に寄す、東坡此の詩を讀んで一唱三歎して神が悽楚と爲る、江風海雨が牙頰に入るの感が起る、又石室に胡琴の彈聲を聽くの感も起る、奈にせん我は老病の身にて門を出ない、海山巖洞其れ何許に在るやを知らない、門外の桃花は自から開落して、牀頭の酒甕は久しく飲まざるゆゑ塵土を生ずる、今年は清淨に洗心して清淨の佛祖に歸命する、夢中の舊事は萬事皆時に一笑に供するのみ、坐に自覺する年時は俯仰の間に直ちに今古と成ることを、君にも願ふが此の詩を石に刻し玉ふな、陸が忽ち海、海が忽ち陸と變化すること眞に旦暮である、

【餘論】此の篇に至りて、始めて東坡居士の本領を發揮する、紀曰く、情往興來處、有二宛轉關生之妙一、東坡得意之筆と、又、我來取レ酒の四句を評して只四語而淋漓酣足と、又、徑尋二我語一より以下の句を評して前後縈拂、有二情致一、亦有二法度一、鈎心鬬角、觸手玲瓏と、曼卿は認レ桃無二綠葉一、辨レ杏有二青枝一の句を作りて公の爲め叱呵せられし人、今此の稱讚を得て、前恨は悉皆消滅するであらう、

橄欖

紛紛青子落二紅鹽一。
正味森森苦且嚴。
待二得微甘回一齒頰一。
已輸崖蜜十分甜。

【詩意】橄欖の青色の實が紛紛と紅鹽落ちる、其の正味は森森として苦く且つ嚴である、少しく甘味を增し齒頰に適するころを待ち得たり、已に其の時は崖蜜が十分甜き節なれば之が爲めに橄欖は輸ける、

【餘論】紀曰く、未レ免二傖氣一と、席上卒爾の作、往往小說を粉本として賦することもある、傖氣を免れざるも當然である、

【字解】〔一〕落紅鹽　王梅谿曰く、江南有二紅鹽橄欖一、樹高以二紅鹽一塗二其樹一、而子自落と、若溪の「漁隱叢話」に曰く、余在二嶺南一七年、見二土人采二橄覽一、未二嘗以レ鹽擦二樹身一、只以レ梯采レ之、或以レ杖擊レ之、東坡語、蓋自別出二小說一也と、〔二〕待得　王梅谿曰く、小說有二橄欖與レ棗爭一、棗謂二橄欖一曰、待二得深回味一、我已甜了と、〔三〕崖蜜　朱翌の「猗覺寮雜記上」に、王立之詩話云、崖蜜櫻桃、出二金樓子一、坡意正爲レ蜜爾、言二餘甘一者、甘味有レ餘、非二果中餘甘一也、立之見二餘甘一爲レ果、遂以二崖蜜一、爲二櫻桃一、杜詩云、充腸多二薯蕷一、崖蜜亦易レ求、又云崖蜜松花白、皆蜜蜂之蜜也、然則崖蜜豈專是櫻桃、且櫻桃非二十分甜者一、又不下與二橄欖一同時上也、

東坡

雨洗東坡月色清。　東坡
市人行盡野人行。　雨は東坡を洗うて月色清し、
莫嫌犖确坡頭路。　市人行き盡くして野人行く、
自愛鏗然曳杖聲。　嫌ふこと莫かれ犖确坡頭の路、
　　自から愛す鏗然曳杖の聲、

【詩意】晩來一雨が東坡を洗ひ去つて月色正に清し、其の時には市人は已に行き盡くして今は野人が行く、犖确たる坡頭の險路を嫌はないのは、杖を曳く聲の鏗然と音するを愛するが爲めである、

【餘論】紀曰く、風致不レ凡と、公の詩としては無難に屬する者、

【字解】〔一〕犖确　韓退之の詩、小石犖确行徑微と、山路巨石の多くある貌、〔二〕曳杖　「禮記」に、孔子蚤作、負レ手曳レ杖、消ニ搖于門一と、

生日王郎以詩見慶。次ニ其韻一并寄ニ茶二十一片一

生日王郎詩を以て慶せらる、其の韻に次し、并せて茶二十一片を寄す

折楊新曲萬人趨。　折楊の新曲萬人趨る、
獨和先生于蔿于。　獨り和す先生の于蔿于を、
但信櫝藏終自售。　但信ず櫝藏終に自から售るるを、

【字解】〔一〕折楊　「莊子天地篇」に、大聲不レ入ニ於俚耳一、折楊皇華、則嗑然而笑と、〔二〕于蔿于　「唐元德秀傳」に、玄宗、酺ニ五鳳樓下一、命ニ

豈知盌脫本無レ橅。　豈知らんや盌脫本と橅無きを、
竭從ニ氷叟一來游宦。　竭りて氷叟に從ひ來りて游宦、
肯伴ニ臞仙一亦號レ儒。　肯て臞仙に伴はれ亦儒と號す、
棠棣竝爲ニ天下士一。　棠棣竝に天下の士と爲り、
芙蓉曾到海邊郛。　芙蓉曾て到る海邊の郛、
不レ嫌霧谷霾ニ松柏一。　嫌はず霧谷松柏を霾らすを、
終恐虹梁荷ニ棟桴一。　終に恐る虹梁棟桴を荷ふを、
高論無窮如ニ鋸屑一。　高論無窮にして鋸屑の如し、
小詩有レ味似ニ連珠一。　小詩味あり連珠に似たり、
感君生日遙稱レ壽。　感ず君が生日遙に壽を稱せらるるを、
祝我餘年老不レ枯。　祝す我が餘年老いて枯れざるを、
未レ辨報レ君青玉案。　未だ辨せず君に報ずる青玉案を、
建溪新餅截ニ雲腴一。　建溪新餅雲腴を截る、

い、去の字と意義同じ、詩の考槃に、庶子有レ竭は別の意義、【六】氷叟　「世說」に、衞玠妻父、樂廣有ニ重名一、議者以爲ニ嬭翁氷清、三百里縣令刺史一、各以ニ聲樂一集、河內太守、輦ニ優伎數百一、瓌譎光麗、德秀時爲ニ魯山令一、唯樂工數十人、聯レ袂歌ニ于蔿于一、于蔿于者、德秀所レ爲歌也、帝聞異レ之、嘆曰、賢人之言哉、河內人、其塗炭乎、乃黜ニ河內一、德秀益知レ名と、【三】櫝藏　「論語子罕篇」に、子貢曰、有レ美ニ玉於ニ斯、韞レ匱而藏レ諸、求ニ善賈一而沽レ諸、子曰、沽レ之哉、沽レ之哉、我待レ賈者也と、櫝と匱と同じ、【四】盌脫　唐の張鷟が纂と號する「朝野僉載」に、武后時宮中諺曰、補闕連車載、拾遺平斗量、把推侍御史、盌脫校書郎と、「通鑑注」に、脫者盌之形橅、言ニ人如ニ模ニ脫盌杯一、簡箇相似也と、則天が革命、舉人が考試を經ずして皆官を與ふ、其の事を云ふ、【五】竭　竭來の語多く、竭從と用ふる例は少

女壻玉潤」と、王郎は子由の女壻である、【七】游宦　「史記」に、韋元成、復自游宦、而起至二丞相一と、【八】臘仙　司馬相如、大人賦序に、形容甚臘、此非二帝王之仙意一也と、【九】棠棣　兄弟を謂ふ、王郎が兄の子高と、弟の子敏である、【一〇】芙蓉　荷花、杳初白曰く、先生在二湖州一有下與二王郎昆仲一遶レ城觀二荷花一詩上、詩句卽指二此事一と、【一一】虹梁　「班固西都賦」に、抗二應龍之虹梁一、荷二棟桴一而高驤と、梁はウツバリ、【一二】棟桴　ムネ、【一三】鋸屑　ノコギリクヅ、「晉書胡毋輔之傳」に、王澄與二人書一曰、彥國吐二佳言一、如二鋸木屑、霏霏不レ絕、誠爲二後進領袖一也と、【一四】連珠　文章の一體、明かに其の物を指さず、譬を借りて、以て其の本義を表はし、文字歷歷貫珠の如く、觀て悅ぶべきもの、之を連珠と謂ふ、【一五】青玉案　漢の張衡四愁詩に、美人贈レ我錦繡段、何以報レ之青玉案と、【一六】建溪　閩江の北原、崇溪とも東溪とも云ふ、茶の產地、【一七】雲腴　名茶の名、

【題義】公の生日乃ち十二月十九日に子由の女壻なる王子立が生日を賀して贈らるる詩に次韻して作り、幷に茶二十一片を寄贈したるのである、

【詩意】折楊の新曲は萬人が趨きて聽く解り易いからである、先生が歌ふ于蔿于の歌は解り難いから和する者は唯一人である、但し信ずる美玉は平生深く藏して置くも其の價を知る者の爲めには售る、盌脫を混雜して同架に置かるる事は我は關知しない、汝は媒介の氷叟に從つて來りて宦途に游ぶの身となり、而かも肯て臘仙に伴はれて亦儒と號するを憚らない、汝等兄弟は竝んで天下の士である、我は記憶する曾て汝を伴うて芙蓉を海邊の郛に觀しことを、嫌はない霧谷が松柏を霾らすの陰氣なる狀態を、只終に恐るる虹梁が棟桴を荷ふの力あるや否やを、余は稱讚するが汝が高論は無窮なること鋸屑の如くなるを、又其の小詩は妙味ありて連珠の如く美であることを知る、感喜する君は余が生日を遙かに壽し、又我が餘年老いて身尙ほ枯れざるを祝せらる、余は君が厚志に報ゆるに青玉案を以てすることは未だ辨ずる力はない、只建溪の新餅と雲腴の截片を以て報の意を表する事とする、

【餘論】題に生日とあるも、生日の祝賀すべき事は一言も及ばない、後世生日を祝ふ者は此等の詩を作例とするが可い、棠棣竝爲二天下士一の句は用處大に過ぐと思ふ、不レ知二天下士一、猶作二布衣看一、范雎は秦の宰相である、「魯仲連傳」に、今日知二先生爲二天下之士一、魯連や范雎には天下之士は當然であるが、王郎如何に大才なるも天下之士の字を以てするは、郡長も郡長も知事も皆天下の士である、東坡先生時に文字濫用の弊がある、後生は此等の事は倣うてはいかぬ、

柏石圖の詩

陳公弼家。藏二柏石圖一。其子愷季常傳寶之。東坡居士作レ詩。以爲二之銘一。

【訓讀】陳公弼の家、柏石の圖を藏す、其の子愷季常、傳へて之を寶とす、東坡居士詩を作り、以て之が銘と爲す、

柏生二兩石間一。天命本如レ此。　柏は兩石の間に生ず、天命本と此の如し。
雖レ云二生之艱一。與レ石相終始。　生の艱を云ふと雖も、石と相終始す、
韓子俯仰人。但愛平地美。　韓子俯仰の人、但愛す平地の美を、

土膏雜糞壤。成壤幾何耳。　土膏糞壤を雜ふ、成壤幾何のみぞ、
君看此槎牙。豈有可移理。　君看よ此の槎牙を、豈移す可き理あらん、
蒼龍轉玉骨。黑虎抱金柅。　蒼龍玉骨を轉り、黑虎金柅を抱く、
畫師亦可人。使我毛髮起。　畫師亦可人なり、我をして毛髮起たしむ、
當年落筆意。正欲譏韓子。　當年落筆の意、正に韓子を譏らんと欲す、

【字解】〔一〕柏生　韓退之の詩、柏生二兩石間一、百歲終不レ大と、〔二〕俯仰人　「莊子天運篇」に、不レ見二彼桔槔者一乎、引レ之則俯、舍レ之則仰、彼人之所レ引、非レ引レ人也、故俯仰而不レ得二罪於人一と、〔三〕平地美　韓退之の詩、柏移就二平地一、柏有レ傷二根容一、傷レ根柏不レ死、千丈不レ難レ至と、〔四〕成壤　佛經に、成住壞空を四劫と云ふ、成は物の發達すること、壞は物の敗毀すること、字音「エ」で、クヤイではない、〔五〕槎牙　木の枝が角だちて入りくむ貌、〔六〕玉骨　王維の詩、闌干玉骨齊と、〔七〕金柅　柅は車の下に在りて、輪を止むる木、「易」に、繫二於金柅一と、〔八〕可人　「三國志蜀費禕傳」に來敏曰、君信可人、必能辨レ賊と、〔九〕落筆　杜子美の詩、觀我落筆中書堂と、

【題義】陳希亮字は公弼と云ふ公と同鄉人の家に柏石圖を藏す、公弼の第四子慥季常が之を家寶として珍重する、乃ち此の詩を作りて其の銘と爲したのである、

【詩意】柏が兩石の間に生ずるが天命は自然にて本と此の如きである、柏は如何にも艱難なる狀である、而かも生長するも枯死するも石と相終始する、韓子は元來賢人にて世と俯仰する人でありながら但簡短にも平地の美のみを愛する、土が膏肥なる上に糞壤を雜ふるの功を施すも、成長すると朽敗すると幾何である、君看玉へ自然に任して置いて此の槎牙たる狀を、韓子は移せと言ふが僕は考ふ移すべき理なしと、其の狀や蒼龍玉骨を轉じ、黑虎が金柅を抱くに似て居る、畫師の名は知らないが亦解意の人である、此の圖を看る我をして毛髮を起たしむる概がある、之を描くの當時、正に韓子を譏りて反對に描きたるものと思はる、

【餘論】骨を描きて肉を描かざるもの、後世詩人も畫師も粉本として然るべきものと思ふ、

和秦太虛梅花

秦太虛が梅花を和す

西湖處士骨應槁。　西湖處士骨應に槁るべし、
只有此詩君壓倒。　只此の詩あり君壓倒す、
東坡先生心已灰。　東坡先生心已に灰す、
爲愛君詩被花惱。　君が詩を愛する爲めに花に惱まさる、
多情立馬待黃昏。　多情馬を立てて黃昏を待つ、
殘雪消遲月出早。　殘雪消すること遲く月出づること早し、
江頭千樹春欲闇。　江頭千樹春闇からんと欲す、

【字解】〔一〕西湖處士　林逋字は君復、錢塘の人、廬を西湖の孤山に結んで、恬澹好古、榮利に趨らず、二十年、足城地を踏まず、自から西湖處士と號す、卒して和靖先生と諡す、梅花の詩、絕唱と稱せらる、〔二〕君壓倒　寶歷中、楊嗣復、宴二諸生於新昌里第一、元白俱在、賦レ詩、唯楊汝士詩、後成而最佳、元白歎服、汝士醉歸、語二子弟一曰、我今日壓二倒

竹外一枝斜更好。
孤山山下醉眠處。
點綴裙腰紛不掃。
萬里春隨逐客來。
十年花送佳人老。
去年花開我已病。
今年對花還草草。
不知風雨捲春歸。
收拾餘香還畀昊。

竹外の一枝斜にして更に好し、
孤山山下醉眠の處、
點綴裙腰紛として掃はず、
萬里の春逐客に隨ひ來る、
十年花は佳人を送りて老ゆ、
去年花開き我已に病む、
今年花に對し還た草草、
知らず風雨の春を捲いて歸るを、
餘香を收拾して還た昊に畀ふ、

畀昊　「詩小旻之什」に、投畀有昊」と、

【題義】秦觀、字は太虛、一の字は少游、揚州の人、其の詩歐陽修や公の稱する所と爲つて、名を天下に揚ぐ、建溪梅花を參寥と同賦して公に示さる、公は其の詩に次韻したるもの、詩に云ふ、海陵參軍不枯槁、醉憶梅花愁絶倒、爲憐一樹傍寒溪、花水多情自相惱、清淚班班知有恨、恨春相逢苦不早、甘心結子待君來、洗雨梳風爲誰好、誰云廣平心似鐵、不惜珠璣與揮掃、月沒參橫畫角哀、暗香銷盡令人老、天分四時不相貸、孤芳轉盼同衰草、要須健步遠移歸、亂插繁華向晴昊、

【詩意】梅を咏じて絶唱なる西湖處士の骨は已に枯槁したであらう、今梅を歌ふ君が此の詩は處士の詩を壓倒する妙がある、東坡先生は心已に死灰同然であるが、君が詩を讀んで今や花に惱まさるるの想を爲す、乃ち多情にも馬を立て黃昏の時を待つ、殘雪は消すること遲きも月の出づるは早い、江頭の千樹は春も將に闌澹たらんと欲する景色である、竹外に橫はる一枝は斜にして更に好感を與ふ、西湖の孤山山下に醉眠する處、裙腰を點綴せる如くにして紛として掃はざる趣がある、萬里の春風は私無ければ逐客の我に隨つて來る、而かも十年の花は佳人を送りて老ゆ、去年梅花開きし時我は臥病の人であつた、今年は幸に健在で花に對したるが還た草草である、知らず風雨の春を捲いて歸りしを、今餘香を收拾して還た昊天に畀へしむるのである、

【餘論】紀曉嵐、江頭千樹の二句を評して曰く、實是名句、謂在和靖暗香疎影一聯上、固無媿色」と、又結末を評して悲壯似高適岑參口吻」と、「詩人玉屑」に云ふ、竹外一枝斜更好、語雖平易、頗得梅之幽獨閒靜之處」と、後世の詩家、「竹外一枝梅」を以て詩題とするに至る、畢竟警句や妙語は五字六字の間に含蓄の味を見るにある、

再和潛師

再び潛師に和す

化工未議蘇羣槁。

化工未だ羣槁を蘇へすを議せず、

【字解】〔一〕傾倒　杜子美の詩元白」と、〔二〕被花惱　杜子美の詩、江上被花惱不徹、無處告訴只顚狂と、〔四〕一枝　林逋の詩、屋簷斜入一枝低と、〔五〕裙腰　白樂天の詩、誰開湖寺西南路、草綠裙腰一道斜、注云、孤山寺、在湖洲中、草綠時望如裙腰」と、〔六〕逐客　「史記」に、秦大索逐客、又止逐客令、又「李斯傳」に、宗室大臣請一切逐客、斯亦在逐中」と、〔七〕捲春歸　歐陽修の詩、落絮風卷盡、春歸不留迹と、〔八〕收拾　「漢書光武紀」に、不能收拾」と、〔九〕

先向寒梅一傾倒。　先づ寒梅に向つて一に傾倒す、
江南無雪春瘴生。　江南雪無く春瘴生ず、
爲散冰花除熱惱。　爲めに冰花を散じ熱惱を除く、
風清月落無人見。　風清く月落ち人の見る無く、
洗妝自趁霜鐘早。　洗妝して自から趁ふ霜鐘の早きを、
惟有飛來雙白鷺。　惟飛來の雙白鷺あり、
玉羽瓊枝鬬清好。　玉羽瓊枝清好を鬬はす、
吳山道人心似水。　吳山の道人心水に似たり、
眼淨塵空無可掃。　眼淨く塵空しくして掃ふべき無し、
故將妙語寄多情。　故に妙語を將て多情を寄す、
橫機欲試東坡老。　橫機試みんと欲す東坡老、
東坡習氣除未盡。　東坡習氣除くも未だ盡きず、
時復長篇書小草。　時に復た長篇小草を書す、
且撼長條饗落英。　且長條を撼かして落英を餐するを、
忍飢未擬窮呼昊。　飢を忍び未だ擬せず窮して昊を呼ぶを、

志士懷感傷、心即已傾倒と、心を傾けて感歎すること、【二】除熱惱　熱惱は普通に言へば萬慮の義、佛語で之を煩惱又は熱惱と曰ふ、【三】風清　皮日休、白蓮の詩、無情有恨何人見、月墮風清欲曉時と、【四】霜鐘　施德初曰く、「龍城錄」に、隋開皇中、趙師雄、遷羅浮、一日憩於松林中、見一女澹妝出迎、因與之叩酒家門、相與飲、頃之醉寢、師雄亦懵然久之、東方已白、起視乃在大梅樹下、上有翠羽、啾嘈相須、月落參橫、但惆悵而已、蜀注云、宋武帝宮人、早朝聞景陽樓鐘聲と、杜子美の詩、金吼霜鐘散と、【五】飛來　杜子美の詩、飛來雙白鷺、過去杳難攀と、【六】玉羽　鮑照の舞鶴賦に、振玉羽而臨霞と、【七】瓊枝　「楚辭」に、折瓊枝以爲羞兮と、【八】吳山　杭州城中に在り、仁宗

門如市、臣心如水と、【一〇】習氣　「述記」に、言習氣者、是現行氣分、薰習所成、故名習氣と、既に惑の現行を伏し、且つ惑の種子を斷ずるも、尙ほ惑の氣分ありて、時に惑相を現ずるを習氣と云ふ、【一一】長條　杜子美の詩、狂風挽斷最長條と、【一二】落英　「楚辭」に、夕餐秋菊之落英と、

【題義】　潛師は名は道潛、參寥子と號す、錢塘の人、哲宗の朝に妙總大師と號を賜ふ、公の門客と爲つて諸詩客と交はる、石門の學は無きも、詩は淸妙讀むべきもの多し、臨平道中や、江上秋夜や東園や令歌舞者等の七絕は人口に膾炙するもの、但此の梅花詩は「宋詩鈔」中載せざるが爲め今は其の原作を擧ぐる能はざるは遺憾である、

【詩意】　造化の神工は未だ羣槁を蘇活することを評議しない、先づ第一に寒梅に向つて敬意を表する、江南の地雪が無く春瘴生ずるに至る、爲めに氷の如き梅花を散發して熱惱や瘴氣を除滅する、而して風淸く月落つるの曉景は人の見る者がない、羅浮の花神は洗妝して自から霜鐘の早きを趁うて發く、時に何處よりか飛來する雙白鷺あり、鷺の玉羽と花の瓊枝とが淸好を鬬はすのを見る、吳山道人たる潛師は心澄んで水に似てゐる、法眼は淨く俗塵は空しければ別に塵の掃ふべきは無い、是の故に妙語を將て多情を我に寄せたのである、縱橫の機氣は畢竟此の東坡を試驗するのであらう、然るに此の東坡は人間としての習氣は多少は除きたる考へなれども全盡とは言へない、時には復た長篇を作り小草を以て書く娑婆氣がある、且つ長條を撼かして其の落英を餐ふ、飢を忍んで昊天に呼ぶ如き古人の窮

には擬しないつもりである、

【餘論】紀曉嵐は起句を評して曰く、先著二四語一入二參寥一、便覺レ有レ情と、參寥は熱惱を除き、東坡は習氣未だ除かずと對照する所、人を知つて法を說く者、

海棠

東風渺渺泛崇光。
香霧空濛月轉レ廊。
只恐夜深花睡去。
高燒銀燭照紅妝。

海棠

東風渺渺崇光泛ぶ、
香霧空濛月廊に轉ず、
只恐る夜深うして花睡り去るを、
高く銀燭を燒いて紅妝を照らす、

【詩意】東風が渺渺と吹いて花の崇光を泛ぶ、香霧は濛濛と滿ちて月色は廊に轉ずる、只恐る夜深ければ花が睡り去ることを、是の故に高く銀燭を燒きて其の紅妝を照らし花の睡らざる樣にする、

【餘論】秋日牡丹の詩が「烏臺詩案」に入つて、此の詩が入らざるは不思議であると思ふ、或は此の詩は後れて作れるものか、查初白云ふ、此詩極爲二俗客所レ賞、然非二先生老境一と、陸放翁の句、常恐

【字解】〔一〕渺渺　一本嬝嬝に作り、一本嫋嫋に作る、孰れが公の眞なるや、樂天の詩、青雲高渺渺と、渺渺は廣くして涯なき貌、〔二〕香霧　杜子美の詩、香霧雲鬟濕と、〔三〕花睡去　「明皇雜錄」に、上皇曰、海棠睡未レ足耳と、〔四〕銀燭　李義山の詩、更持二紅燭一賞二殘花一と、

夜寒花索寞、錦茵銀燭按二涼州一と、我が津阪東陽は放詩坡詩に勝ると爲し、齋藤拙堂は坡詩放詩に勝ると爲す、余も亦坡詩を以て優と爲すものである、

次韻曹九章見贈

曹九章の贈らるるに次韻す

蘧瑗知レ非我所レ師。
流年已似二手中著一。
正平獨肯從二文舉一。
中散何曾靳二孝尼一。
賣レ劍買レ牛眞欲レ老。
得レ錢沽レ酒更無レ疑。
雞豚異日爲二同社一。
應レ有千篇唱和詩。

蘧瑗非を知る我が師とする所、
流年已に手中の著に似たり、
正平獨り肯て文舉に從ひ、
中散何ぞ曾て孝尼に靳しまん、
劍を賣つて牛を買ふ眞に老いんと欲す、
錢を得て酒を沽ふ更に疑ひなし、
雞豚異日同社たらば、
應に有るべし千篇唱和の詩、

【字解】〔一〕蘧瑗　「論語憲問篇」に、蘧伯玉、使二人於孔子一、孔子與レ之坐而問焉と、伯玉は衞の大夫、名は瑗、〔二〕知非　「淮南子」に、蘧伯玉、年五十、而知二四十九年非一と、〔三〕手中著　施德初曰く、周易大衍之數五十、其用四十九、按世之明二易占一者、以二蓍四十九、揲レ之而成レ象と、著とは五十本の竹の棒である、〔四〕正平　後漢の禰衡、字は正平、〔五〕文舉　北海の孔融、字は文舉、〔六〕中散　晉の嵇康は魏に仕へて中散大夫と爲る、〔七〕孝尼　「嵇康傳」に、將レ刑二東市一、顧二視日影一、索レ琴彈レ之曰、昔袁孝尼、嘗從レ吾學二廣陵散一、吾每靳二固之一、廣陵散、於レ今絕矣と、祕曲を吝みて眞祕を敎へざるを靳固と云ふ、〔八〕賣劍　「漢書」に、龔遂爲二渤海太守一、民有下帶二持刀劍一者上、使二賣レ劍

買レ牛、賣レ刀買レ犢と、【九】得錢　杜子美の詩、醉時歌、得レ錢卽相覓、沽レ酒不二復疑一と、【一〇】雞豚　韓退之の詩、願爲二同社人一、雞豚燕二春秋一と、

【題義】曹九章名は煥、子由の壻である、是の人の贈る所に次韻して作る、

【詩意】蘧伯玉が五十にして四十九年の非なるを知つたことは我も師として居る、年華流れて四十九過ぎることは宛も手中の著の如く容易である、汝は今日の正平であるが我は今日の孔文舉である、乃ち汝は我に從つて肯て學ぶ、我は今日の中散で汝は今日の孝尼の如くである、我は汝に敎ふることは吝でない、我は劍を賣つて牛を買ひ畊田に老いんと欲する志望がある、而かも錢を得れば酒を沽うて鄉黨と與に樂むことは眞實にて疑ふものはない、雞豚を烹て異日に同社の人と爲るときは、應に千篇も唱和詩あるものと思ふ、

【餘論】紀曰く、屢用二此事一、實不二親切一と、多作の結果、集中同事を處處に見るは、已むを得ざることならんが、詩に言ふ所、徒らに文字を使用するのみにて、其の眞意にはあらずやと思はるるものがある、曉嵐の評語は、余も然りと思ふのである、

上巳日與二三子一攜レ酒出遊。隨二所見一輒作二數句一。明日集之爲レ詩。故辭無二倫次一

上巳の日二三子と酒を攜へて出遊、所見に隨つて輒ち數句を作り、明日之を集めて詩と爲す、故に辭に倫次無し、

薄雲霏霏不レ成レ雨。
杖藜曉入千花塢。
柯邱海棠吾有レ詩。
獨笑深林誰敢侮。
三杯卯酒人徑醉。
一枕春眠日亭午。
竹間老人不レ讀レ書。
留レ我閉レ門誰敎レ汝。
出レ簷蓑枳十圍大。
寫二眞素壁一千蛟舞。
東坡作レ塘今幾尺。
攜レ酒一勞農工苦。

薄雲霏霏雨とならず、
杖藜曉入る千花の塢に、
柯邱の海棠吾詩あり、
獨笑深林誰か敢て侮らん、
三杯の卯酒人徑に醉ふ、
一枕の春眠日亭午、
竹間の老人書を讀まず、
我を留めて門を閉ぢ誰か汝に敎ふる、
簷を出づる蓑枳十圍大、
眞を素壁に寫し千蛟舞ふ、
東坡塘を作る今幾尺ぞ、
酒を攜へて一たび勞す農工の苦を、

【字解】【一】杖藜　杜子美の詩、杖藜徐步立二芳洲一と、【二】柯邱　王楙谿曰く、柯山四望、直南高邱、故亦名二柯邱一、東西隅、海棠一株甚茂と、【三】誰敢侮　「孟子公孫丑」に、今此下民、或二敢侮一予と、【四】三杯　韓退之の詩、三杯取レ醉不二復論一、一生長恨春何許と、【五】竹間　「晉王徽之傳」に、吳中士大夫家有レ竹、欲レ觀レ之便出、造二竹下一嘯詠良久、主人掃灑請レ坐、徽之不レ顧、將レ出、主人閉レ門、徽之賞レ之、盡レ懽而去と、【六】蓑枳　蓑は叢と同じ、枳はカラタチ、【七】鵁鶄　和名ゴキサギ、アヲサギ、鷺の一種、【八】韓家圃　東門外に在り、【九】轆轤　盧仝の詩、轆轤無レ繩井百尺と、

却尋流水出東門。
壞垣古塹花無主。
臥開桃李爲誰妍。
對立鵁鶄相媚嫵。
開尊藉草勸行路。
不惜春衫汚泥土。
褰裳共過春草亭。
扣門却入韓家圃。
轆轤繩斷井深碧。
秋千挂索人何所。
映簾空復小桃枝。
乞漿不見鷹門女。
南上古臺臨斷岸。
雪陣翻空迷俯仰。

かへつて流水を尋ねて東門を出づ、
壞垣古塹花主無し、
臥して開く桃李誰が爲めに妍なる、
對立する鵁鶄相媚嫵す、
尊を開き草を藉いて行路を勸む、
惜まず春衫泥土に汚るるを、
裳を褰げて共に過ぐ春草亭、
門を扣き却つて入る韓家の圃、
轆轤繩斷えて井深碧、
秋千挂索人は何れの所ぞ、
簾に映じて空しく復た小桃枝、
漿を乞うて見ず鷹門の女、
南のかた古臺に上りて斷岸に臨めば、
雪陣空に翻つて俯仰に迷ふ、

五五四

【一〇】秋千　鞦韆に同じ、俗に言ふブランコ、【一一】乞漿「裴硏傳奇」に、長慶間、裴航、僦舟襄漢、同舟有樊夫人者、國色也、航以詩及珍果獻、夫人以詩答曰、一飲瓊漿百感生、元霜杵盡見雲英、藍橋便是神仙窟、何必崎嶇上玉京、後航歸鄜下、經藍橋驛、因渴乞漿于茅舍老嫗、嫗咄曰、雲英擎一甌漿來、郎君要飲、航異之、又憶夫人雲英之句、俄於草箔下、出雙手捧瓷飲之、眞玉液也、航謂嫗曰、願納厚禮娶之可乎、嫗乃使求玉杵臼、杵刀圭藥百日、以女妻之、遂入玉峯洞中、超爲上仙、襄漢同舟、卽其婦也と、【一二】鷹門　杜子美の詩、曉藥能無婦、鷹門幸有兒と、【一三】餽我　查初白曰く、「本集雜記」に、步出城東、入何氏韓氏竹門、遂置酒竹陰下、有劉唐年主簿者、餽油煎餅餌、其名爲甚酥、味極美と、【一四】東緼　「漢書蒯通傳」に、里婦夜亡肉、姑逐之、里母東緼請火於亡肉家、曰、昨夜犬得肉相殺、請以火治之、亡肉家、遽追呼其婦、注緼亂麻也と、【一五】嫭蛇　嫭は兩壻相呼ぶの稱、己の妻の姉妹の夫、蛇は弱年の女、又美くしき女、【一六】洗足眠　「吳志呂蒙傳」に、上岸擊賊、洗足入船と、【一七】鐘鼓　杜子美の詩、睡美不聞鐘鼓傳と、【一八】泥一尺　白樂天の詩、雨暗三秋日、泥深一尺時と、【一九】無一遂　「司馬遷傳」に、所以自惟、四者無一遂と、【二〇】豈弟　詩小雅に、豈弟君子、神所勞矣と、樂易の貌、愷悌と同じ、

故人餽我玉葉羹。
火冷煙消誰爲煮。
崎嶇束緼下荒徑。
嫭蛇隔花聞好語。
更隨落影盡餘尊。
却傍孤城得僧宇。
主人勸我洗足眠。
倒牀不必聞鐘鼓。
明朝門外泥一尺。
始悟三更雨如許。
平生所向無一遂。
茲游何事天不阻。
固知我友不終窮。
豈弟君子神所予。

故人我に餽る玉葉羹、
火冷かに煙消え誰か爲めに煮る、
崎嶇束緼して荒徑を下る、
嫭蛇花を隔てて好語を聞く、
更に落影に隨つて餘尊を盡くす、
却つて孤城に傍うて僧宇を得、
主人我に勸む洗足して眠るを、
倒牀必ずしも鐘鼓を聞かず、
明朝門外泥一尺、
始めて悟る三更雨許の如きを、
平生向ふ所一遂無し、
茲の游何事ぞ天阻まざる、
固に知る我が友終に窮せず、
豈弟の君子神の予ふる所、

【題義】三月三日、二三の諸生と酒を攜へて出游し、途上に於て見る所を歌うて句を得たるも一詩とならず、其の翌日之を纏めて一詩と爲す、是の故に辭に次第順序が無いと辨じて置く、

【詩意】薄雲が霏霏たるも未だ雨は降らない、杖藜を引いて曉天に千花の集る塢堤に入る、柯邱の海棠は曾て觀賞して已に詩がある、深林にて獨笑するは興が發する故である誰か敢て侮るものぞ、三杯の卯酒にて人は徑に醉ふ、醉へば枕を求めて眠に入る、覺むれば日は亭午である、竹間の老人は何者であるか書を讀まない、我を留めて門を閉ぢ去らしめざるは誰か汝に此の事を敎ふるや、簷を出づるの叢枳は十圍もある大木である、其の圖を壁に寫せば陰は千蛟の舞ふ狀である、東坡先生塘を作る今幾尺であるや、時に酒を攜へて塘を作る農人や工人の苦勞を慰める、却つて流水を尋ねんと思うて東門を出て去る、忽ち認む壞垣と古塹の側に花開きて主なきを、下に臥して開くの桃李は誰の爲めに妍であるや、之に鵁鶄が相對立する樣はいかにも媚嫵の態がある、酒尊を開き草の上に坐して行路を勸助する、惜まない春衫が泥土に汚るるを、裳を褰げて共に春草亭を過ぎ、門を扣きて却つて韓家の圃に入つて看る、轆轤の繩は切斷してある井中は深碧である、鞦韆は索を挂けて游戲の用を爲すが人は何所に在るや、去年見る所の花の如き女は無く、簾に映ずるものは空しく復た小桃枝のみ、漿を乞ふも返事をする女の聲はしない、去つて南の方角の古臺に上りて斷岸を下瞰すれば、雪陣が空に翻翻と飛んで俯仰に迷ふ、故人は我に玉葉羹を餽らるるも、火は冷かに煙は消して煮る術が無い、崎嶇たる路に此の羹を束縕して荒徑を下ることにする、忽ち姹蛇が花を隔て喃喃の好語が聞える、我は更に落日ならんとする景に於て殘酒を飲み盡くす、此れより去つて孤城に傍うて一僧宇を認む、主人の和尙は我に足を洗うて眠休し玉へと勸む、乃ち倒床するも必ずしも鐘鼓を聞くに及ばない、明朝は定んで門外泥一尺、之を見て始めて昨夜は雨の多量であつたことを悟るのである、平生向ふ所乃ち志す所は一も遂げたものはない、茲の游のみは何事ぞや天も阻害しないのは、固に知る我友は情が終窮せず、豈弟の君子は神の予ふる所であつたに由る、

【餘論】紀曰く、此永叔所レ謂、一林亂石、天然位置者也、其法始自二元白一、而筆力則非二元白所一及と、查初白曰く、得二平生二語一、全篇方有二收來一と、公自から道ふ辭無二倫次一と、倫次無き中に、往復曲折の味がある、大家の本領、小家の夢想せざる所である、

劉監倉家。煎二米粉一作二餅子一。余云爲二甚酥一。潘邠老家。造二逡巡酒一。余飲レ之云。莫レ作二醋錯著一水來否。後數日。攜レ家飲二郊外一。因作二小詩一。戲二劉公一求レ之

劉監倉の家、米粉を煎て餅子を作る、余云ふ甚酥爲り、潘邠老の家、逡巡酒を造る、余之を飲みて云ふ、醋錯水に著け來るを作す莫きや否や、後數日、家を攜へて郊外に飲む、因つて小詩を作り、劉公に戲れ之を求む

野飲花間百物無。　野飲して花間に百物無し、
杖頭惟挂一葫蘆。　杖頭惟挂く一葫蘆、
已傾潘子錯著水。　已に傾く潘子の錯著水、
更覓君家爲甚酥。　更に覓む君が家の爲甚酥、

【餘論】字解も詩意も讀んで字の如く解して可い、一時突嗟の作、詩としての味は無い、紀曰く、此亦後人炫博拾拾、轉爲二古人之累一者と、

和二參寥一　參寥に和す

芥舟只合レ在二坳堂一。　芥舟只合に坳堂に在るべし、
紙帳心期老孟光。　紙帳心は期す老孟光、
不レ道山人今忽去。　道はず山人今忽ち去ると、
曉猿啼處月茫茫。　曉猿啼く處月茫茫、

大家皐伯通、居二廡下一、爲レ人賃舂、每レ歸妻爲具レ食、不レ敢於二鴻前一仰視上、舉レ案齊レ眉と、【四】猿の俗字、ヒヂナガザルである、

【字解】【一】芥舟「莊子逍遙游篇」に、覆二杯水於坳堂之上一、則芥爲二之舟一、置レ杯焉、則膠、水淺而舟大也と、芥は塵芥である、【二】坳堂　床の窪みたる處、【三】孟光「後漢書」に、梁鴻妻孟光、鴻至レ吳、依二

【題義】參寥が示されたる詩に和して作る、案ずるに參寥が公の家に宿し明日辭して去る其の旨を說きしものかと、

【詩意】芥舟は只合に坳堂に在るべし、我と酒盃を對酌するがよい、紙帳は疎末であるが我が老婦は慇懃に懽待する積りで居る、道はず山人が今忽ち辭し去ると、曉猿の啼く處は月茫茫の景色である、

蘇東坡詩集　卷二十三

古今體詩　四十四首

別黃州

病瘡老馬不任韉。
猶向君王得敝幃。
桑下豈無三宿戀。
尊前聊與一身歸。
長腰尚載撐腸米。
闊領先裁蓋瘦衣。
投老江湖終不失。
來時莫遣故人非。

黃州に別る

病瘡の老馬韉に任へず、
猶ほ君王に向つて敝幃を得、
桑下豈三宿の戀なからん、
尊前聊か一身と歸る、
長腰尚ほ載す撐腸の米、
闊領先づ裁す蓋瘦の衣、
老を投ずるの江湖終に失せず、
來時故人の非を遣ること莫し、

【字解】【一】病瘡　杜子美の詩、日莫不レ收烏啄レ瘡と、瘡は瘡痍即ち一種の皮膚病、キズ、又瘡腫即ち一種の皮膚病、【二】韉　オモガヒ、馬の口に在るキヅナ、【三】敝幃　敝は破、幃は單帳、ヒトヘノトバリ、【四】桑下豈無三宿戀　「律文」に、日中一食、樹下一宿と、三宿を許さざるは愛著を此に生ずるからである、【五】尊前　牛僧孺の贈二汝州劉中丞一詩に、休レ論世上升沈事、且關尊前見在身と、【六】撐腸　盧仝の詩、三椀撐二枯腸一、唯有二文字五千卷一と、【七】瘦衣　葛立方の「韻語陽秋」に、汝人多苦レ瘦、故歐陽公、汝瘦詩云、傴嫗垂二甕盎一、嬌嬰包二卵轂一、無レ由レ辨二肩

頸に有レ類ニ龜縮一瘿と、梅聖俞の詩、女慙高掩レ襟、男衣闊裁領と　瘿は頸の瘤、

【題義】元豐七年正月に黄州を去つて汝州に移る時の作、

【詩意】病瘡の老馬は意の如く轡を自由にすることは出來ないが、猶ほ君主に向つて敝幃を請ひ得る光榮がある、桑下でも三宿したのであるから猶ほ戀戀の情は免れない、尊前に對すれば黄も汝も無い一身無事に歸りたるを喜ぶ、無事なる證據は長腰に尙ほ腸を撐へる米を載せて居る、闊領には身體に相應する瘿を蓋す衣を著けて居る、老に投向して到る處に終に失策は無い、來る時には決して故人の非を遣ることは莫い、

【餘論】紀曰く、婉轉清切、薄而不レ弱、來時作ニ將來一解、非字作ニ非議一解と、不任、不失、例の小疵、

過レ江夜行ニ武昌山一聞ニ黄州鼓角一

江を過ぎ、夜武昌山に行き、黄州の鼓角を聞く

清風弄レ水月銜レ山。
幽人夜度吳王峴。
黄州鼓角亦多情。
送レ我南來不レ辭遠。

清風水を弄し月山を銜む、
幽人夜度る吳王峴、
黄州の鼓角亦多情、
我を送りて南來遠きを辭せず、

【字解】〔一〕月銜山　太白の詩、青山欲レ銜半邊日と、〔二〕吳王峴　山の名、「地志」に、吳造峴、俗呼ニ吳王峴一耳と、武昌襄陽に在る、〔三〕鼓角　吳兢の「樂府古題要解」に、横吹曲、有ニ鼓角一、蚩尤氏、帥ニ魑魅一、

江南又聞出塞曲。
半雜ニ江聲一作ニ悲健一。
誰言萬方聲一槩。
罍憤龍愁爲レ余變。
我記江邊枯柳樹。
未レ死相逢眞識レ面。
他年一葉泝レ江來。
還吹ニ此曲一相迎餞。

江南又聞く出塞の曲、
半ば江聲に雜はりて悲健を作す、
誰か言ふ萬方聲一槩と、
罍憤龍愁余が爲めに變ず、
我記す江邊枯柳樹、
未だ死せず相逢うて眞に面を識る、
他年一葉江に泝り來る、
還た此の曲を吹いて相迎餞するを、

【題義】夜武昌山に游んで黄州の鼓角を聞き、其の聲の悲壯なるに凄氣を催して作りし詩である、

【詩意】清風は颯颯と水面を弄して月は山を銜んで居る狀である、此の時に幽人は夜吳王峴を度りて來る、忽ち黄州鼓角の聲が多情なるを聞く、我を送りて南來して其の遠きを辭しない、而して南來して又出塞の曲を聞く、曲聲と江聲と相雜はりて一層悲健の響を作す、罍も憤り龍も愁へて余が爲めに變ずるものの如くである、我は記憶する江邊の枯れたる柳樹を、未だ全く枯死せざるは眞に識面であ

興ニ黄帝一戰、帝始命吹レ角、爲ニ龍鳴一以禦レ之、其後魏武、北征ニ烏丸一、涉ニ沙漠一、軍士聞レ之、悲而思歸、於レ是減爲ニ半鳴一、尤更悲矣と、〔四〕出塞曲　「古今樂錄」に、横吹胡樂也、張騫入ニ西域一、傳ニ其法於長安李延年一、因レ之更造ニ新聲一、後漢以給ニ邊將一、萬人將軍得レ之、有ニ黄鵠隴頭、出塞、入塞等十曲一と、〔五〕一槩　杜子美の詩、鼓角緣ニ邊郡一、川原欲レ夜時、萬方聲一槩、吾道竟何之と、〔六〕識面　杜子美の詩、李邕求レ識レ面、王翰願レ下レ鄰と、

る、他年に一葉の扁舟にて江に泝り來るときは、還た此の曲を吹いて相迎へ相餞することであらう、

【餘論】紀曰く、語特深秀と、又曰く、屢以幽人一自稱、其實假借、此何不直曰行人一と、幽人と稱するは公の癖である、紀評の如く行人と改めば更に切なるを覺ゆ、

岐亭五首

岐亭　五首

元豐三年正月。余始謫黃州。至岐亭北二十五里。山上有白馬青蓋來迎者。則余故人陳慥季常也。爲留五日。賦詩一篇而去。明年正月。復往見之。季常使人勞余於中途。余久不殺。恐季常之爲余殺也。則以前韻作詩。爲殺戒。以遺季常。自爾不復殺。而岐亭之人。多化之。有不食肉者。其後數往見之。往必作詩。詩必以前韻。凡余在黃四年。三往見季常。季常七來見余。蓋相從百餘日也。七年四月。余量移汝州。自江淮徂洛。送者皆止慈湖。而季常獨至九江。乃復用前韻。通爲五首以贈之。

【訓讀】元豐三年正月、余始めて黃州に謫せられ、岐亭の北二十五里に至る、山上白馬青蓋來り迎ふる者有り、則ち余が故人陳慥季常なり、爲めに留まること五日、詩一篇を賦して去る、明年正月、復た往いて之を見る、季常人をして余を中途に勞はしむ、余久しく殺さず、季常の余が爲めに殺すを恐るるなり、則ち前韻を以て詩を作り、殺戒と爲し、以て季常に遺る、爾してより復た殺さず、而して岐亭の人、多く之に化し、肉を食はざる者あり、其の後數ば往いて之を見る、往けば必ず詩を作る、詩は必ず前韻を以てす、凡そ余、黃に在ること四年、三たび往いて季常を見る、季常七たび來りて余を見る、蓋し相從ふ百餘日なり、七年四月、余汝州に量移す、江淮より洛に徂く、送る者皆慈湖に止む、而して季常獨り九江に至る、乃ち復た前韻を用ひ、通じて五首と爲し、以て之に贈る、

昨日雲陰重。東風融雪汁。
遠林草木暗。近舍煙火溼。
下有隱君子。嘯歌方自得。
知我犯寒來。呼酒意頗急。
撫掌動鄰里。遶邨捉鵞鴨。
房櫳鏘器聲。蔬果照巾冪。
久聞蔞蒿美。初見新芽赤。
洗盞酌鵞黃。磨刀削熊白。

昨日雲陰重し、東風雪汁を融す、
遠林草木暗く、近舍煙火溼ふ、
下に隱君子あり、嘯歌方に自得、
我が寒を犯して來るを知り、酒を呼ぶ意頗る急、
撫掌鄰里を動かす、邨を遶りて鵞鴨を捉ふ、
房櫳器聲鏘たり、蔬果巾冪を照らす、
久しく聞く蔞蒿の美を、初めて見る新芽の赤きを、
盞を洗うて鵞黃を酌み、刀を磨して熊白を削く、

須臾我徑醉。坐睡落巾幘。
醒時夜向闌。唧唧銅缾泣。
黃州豈云遠。但恐朋友缺。
我當安所主。君亦無此客。
朝來靜菴中。惟見峰巒集。

須臾に我徑ちに醉ふ、坐睡巾幘落つ、
醒むる時夜闌に向ふ、唧唧銅缾泣く、
黃州豈遠しと云はんや、但恐る朋友の缺くるを、
我當に主とする所に安んずべし、君も亦此客無し、
朝來靜菴の中、惟見る峰巒の集まるを、

【字解】【一】雪汁　「禮記月令」に、天時雨汁、注雨汁者、水雪雜下也と、【二】煙火溼　孟郊の詩、儒宮煙火濕と、【三】隱君子　「史記」に、老子隱君子也と、【四】犯寒來　沈休文の詩、春色犯寒來と、【五】呼酒　韓退之の詩、呼酒持勸君と、【六】撫掌　成化の「杭州志」に、玉泉寺、在錢唐門西、青芝塢、南齊建元中、靈悟禪師曇超、卓菴講經、龍於菴前撫掌、泉自湧出、號撫掌泉と、【七】鏘器聲　「魏志」に、曹操、過呂伯奢、聞其食器聲、以爲圖己、遂夜殺之と、【八】巾冪　料理人の頭巾、又果物を覆ふ具、【九】蔞蒿　ヨモギ、【一〇】鶯黃　杜子美の詩、鶯兒黃似酒、對酒愛新鶯と、【一一】熊白　「淮南子」に、熊當心有白脂如玉、味甚美、俗呼熊白と、【一二】巾幘　「晉庾敳傳」に、頹然而醉、幘墮凡上と、【一三】唧唧　蟲聲を形容する語、【一四】朋友缺　毛詩、伐木廢則朋友缺矣と、【一五】此客　「晉書桓溫傳」に、桓溫請謝安爲司馬、既至、溫甚喜言平生、歡笑竟日、溫問左右、頗嘗見我有如此客否と、

【題義】始めて黃州に謫せらるる時、白馬青蓋を以て迎へらるる者は舊友の陳季常である、陳が家に五日滯在して去る、其の明年に再び往く、季常は使を以て復た余を途中まで迎へらる、余は久しく殺生はしない、が季常は余を馳走する爲めに雞豚を殺すであらう、是に於て殺戒の詩を作りて示せば、其より殺を罷む、岐亭の人も多く之に化して、肉を食はざる者が多くなる、其の後、度度岐亭に游ぶ、季常を訪ふこと三度、季常より訪はるること七度、余に隨從すること百有餘日、七年に余は去つて汝州に移るとき、江淮より洛に徂く、送者は大底慈湖までであるが、季常一人は九江まで送らる、乃ち前韻を用ひて五首を作りて與ふるのである、

【詩意】昨日より雲陰が重く、東風が雪汁を融下する、遠林を望めば草木が暗澹で、近舍を看れば煙火が溼ひを帶びて居る、其の下に隱君子が住して居り、嘯歌して方に自得の境界を樂しむ、其の隱君子は我が寒を犯して訪ひ來りしを知り、酒を呼んで意頗る急である、掌を撫して其の元氣は鄰里を動かす、邨里を奔走して鶩鴨を捉へて來る、それを料理する爲めであらう房櫳には鏘として器の聲がする、又看る蔬果の類が巾冪を照らして居るを、我は久しく精進料理を食うて蔞蒿の美味なるを知つて居る、初めは見る其の新芽の赤きを、暫くして盞を洗うて鶩黃の斗を酌み、又刀を磨して熊肉の美を削る、須臾にして我は徑ちに醉ふ、醉ふが爲めに坐睡して巾幘を落すに至る、醒むる時は夜も已に闌となりて、唧唧として銅缾の泣くを聞く、黃州は遠しと云ふのではない、但恐るるは朋友の缺くることである、併し我は其の主とする所に安んずる覺悟である、君には復た此の如く無遠慮の客は多く無からう、朝來靜菴の中、坐して唯峯巒の窗に集まるを見る、

【餘論】紀曰く、泣字押得生而穩、結得超逸と、

〔一一〕

(一)我哀籃中蛤。閉レ口護ニ殘汁一。
又哀網中魚。開レ口吐ニ微溼一。
(三)刳レ腸彼交(四)病。過レ分我何得。
相逢未ニ寒(六)溫一。相勸此最急。
不レ見盧懷慎。(七)烝レ壺似レ烝レ鴨。
坐客皆忍レ笑。(八)髡然發ニ其羃一。
不レ見王(九)武子。每食刀几赤。
琉璃載ニ烝狘一。(一〇)中有ニ人乳白一。
盧公信寒(一一)陋。(一二)衰髮得ニ滿幘一。
武子雖ニ豪華一。未死神(一三)已泣。
先生萬金璧。護ニ此一(一四)蟻缺一。
一年如ニ一夢一。百歲眞(一五)過客。
君無レ廢ニ此篇一。(一六)嚴詩編ニ杜(一七)集一。

〔一一〕

我は哀れむ籃中の蛤、口を閉ぢて殘汁を護す、
又哀れむ網中の魚、口を開いて微溼を吐く、
腸を刳かれて彼交も病む、分に過ぐるは我れ何ぞ得ん、
相逢うて未だ寒溫せず、相勸む此の最急、
見ずや盧懷慎、壺を烝す鴨を烝すに似たり、
坐客皆笑を忍ぶ、髡然其羃を發く、
見ずや王武子、食ふ毎に刀几赤し、
琉璃に烝狘を載す、中に人乳の白きあり、
盧公信に寒陋、衰髮滿幘を得、
武子豪華と雖も、未だ死せず神已に泣く、
先生萬金の璧、此の一蟻缺を護す、
一年一夢の如く、百歲眞に過客、
君此の篇を廢する無かれ、嚴詩杜集に編せん、

【字解】〔一〕我哀　哀は愍哀、「東坡題跋」に、去年下レ獄得レ脫、自レ此不レ殺ニ一物一、有下餉ニ蟹蛤一者上、皆放ニ之江中一と、〔二〕開口　「莊子大宗師篇」に、泉涸、魚相與處ニ於陸一、相呴以レ濕、相濡以レ沫、不レ如レ相ニ忘於江湖一と、〔三〕刳腸　「莊子外物篇」に、乃刳レ龜、七十二鑽、而無ニ遺筴一、不レ能レ避ニ刳腸之患一と、〔四〕交病　「陶淵明歸去來序」に、飢凍雖レ切、違レ己交病と、〔五〕過分　白樂天の詩、榮寵尋過分と、〔六〕寒溫　「唐武攸緒傳」に、親貴來謁、道ニ寒溫一外、默無レ所レ言と、〔七〕烝壺　王梅谿曰く、據ニ盧氏雜說一、烝壺是鄭餘慶、而先生指爲ニ盧懷慎一、豈懷慎事、同レ此而別有ニ出處一耶、〔八〕髡然　馮應榴曰く、未レ詳レ所レ出と、〔九〕王武子　「晉王濟傳」に、字武子、性豪侈、麗服玉食、武帝嘗幸ニ其宅一、供レ饌甚豐、悉貯ニ琉璃一器中烝狘甚美、帝問ニ其故一、答曰、以ニ人乳一烝レ之、帝色甚不レ平、食未レ畢去、濟死年四十六歲と、〔一〇〕狘　豚と同じ、キノコ、〔一一〕寒陋　「北齊書樊遜傳」に、門族寒陋と、〔一二〕衰髮　王梅谿曰く、衰髮滿幘、言ニ其壽一也、而新舊唐書、竝不レ見ニ其死之年歲一、唯鄭餘慶則云、死年七十六也と、〔一三〕神已泣　「黃庭經」に、長生至レ愼ニ房中一、急何謂レ死、作レ令ニ神泣一と、〔一四〕蟻缺　「抱朴子」に、以ニ蟻鼻之缺損、無價之淳鈞一と、〔一五〕過客　李太白の桃李園序に、光陰者百代之過客と、〔一六〕嚴詩　嚴武の詩集、〔一七〕杜集　杜子美の詩集、

【詩意】我は哀憐の情を以て籃中の蛤を看る、口を閉ぢて生を保つ爲めに猶ほ殘汁を護して居る、又哀憐する網中の魚を、是は口を開きて微しく呴を吐いて溼を保ちて居る、腸を刳かるることは籃魚も網魚も共に苦痛とする、此等の事を思ふと、過分なるは我も得ようとは思はぬ、相逢うて未だ寒溫の挨拶もしないで、先づ此の物を憐む最急なることを勸告する、見ずや鄭餘慶が事を、餘慶は大官ではあるが貧なれば壺を烝して鴨を烝すに似たる狀を爲すことを、坐客は笑ふに忍びずして辛抱したのである、髡然として其の羃を發く、又見ざるや王武子が事を、此の人豪侈にて食ふ毎に赤色の琉璃盆に狘を載せて、而して人乳の白きを雜ふ、鄭餘慶は信に寒陋の人である、が年壽は相當に高くあつた、武子は鄭と反對に豪華であつた、が身未だ死せざるに神は已に泣いて居る、先生は萬金の璧にて

圓滿貴ぶ可き人であるが、唯此の一蟻缺卽ち殺を意とせざる缺點がある、凡そ一年の經過するは一夢の如く、百年の經過は旅客の如くである、君は此の區區たる情を敍べたる篇を廢棄すること無く、我が此の篇を君の集末に附屬さして吳れ玉へ、

【餘論】紀曰く、純是香山門徑、又未レ死神已泣五字警策、又君無レ廢二句、未レ免二牽率一と、公初めは殺生を意とせず、殺牛殺羊の句多し、然るに下獄以來生を憐むに至る、眞詩人と爲るは後半生である、

〔三〕

君家蜂作レ窠。歲歲添二漆汁一。
我身牛穿レ鼻。卷舌聊自澀。
二年三過レ君。此行眞得得。
愛君似劇孟。扣レ門知二緩急一。
家有紅頰兒。能唱綠頭鴨。
行當隔レ簾見。花霧輕羃羃。
爲レ我取黃封。親拆官泥赤。

〔三〕

君が家蜂窠を作す、歲歲漆汁を添ふ、
我身は牛鼻を穿ち、卷舌聊か自から澀す、
二年三たび君に過ぐ、此の行眞に得得、
愛す君が劇孟に似たるを、門を扣けば緩急を知る、
家に紅頰兒あり、能く唱ふ綠頭鴨、
行いて當に簾を隔てて見るべし、花霧輕くして羃羃、
我が爲めに黃封を取り、親しく拆く官泥の赤きを、
仍ほ須らく素手を煩はすべし、自から點す葉家白、
樂しい哉一事無く、十年幘を蓄へず、
門を閉ぢて添丁を弄す、哇笑呱泣に雜ふ、
西方正に戰に苦む、誰か補ふ將帥の缺、
圖を披きて八陣を見る、合散主客を更ふ、
須ひず親しく戎行するを、坐論君集を敎へん、

【字解】〔一〕蜂作窠　「物類相感志」に、蜂窠極大者、圍一二尺、其綴不レ過二小索許大一云、是十姑樹汁、猶漆類、故綴牢耳と、馮應榴云、二句似レ喩二其屋小而人增一也、與二下句添丁一意合と、〔二〕牛穿鼻　「莊子秋水篇」に、牛馬四足是謂レ天、落二馬首一穿二牛鼻一是謂レ人と、〔三〕得得　韓退之の詩、上去無二得得一、下來亦悠悠と、〔四〕劇孟　「漢爰盎傳」に、洛陽劇孟、嘗過レ盎、盎善待レ之、安陵富人、有レ謂レ盎曰、劇孟博徒、將軍何自通レ之、盎曰、劇孟雖二博徒一、然母死、客送二喪車一千餘乘、此亦有二過レ人者一、且緩急人所レ有、夫一旦扣レ門、不下以二親疎一爲レ解、不下以二在亡一爲レ辭、天下所レ望者、獨季心劇孟、今公陽從二數騎一、一旦有二緩急一、寧足レ恃乎と、〔五〕紅頰　韓退之の詩、青娥翳二長袖一、紅頰吹二鳴篪一と、〔六〕綠頭鴨　王梅谿曰く、曲名、〔七〕隔簾　「南史夏侯亶、有二妓妾十數人一、並無二被服妻容一、每レ有レ客、常隔レ簾奏レ伎と、〔八〕黃封　施德初曰く、京師官法、酒以二黃紙一、或黃羅絹一封二羃餅口一、名二黃封酒一と、〔九〕官泥赤　劉禹錫の西山試茶詩、何況蒙山顧渚春、白泥赤印走二風塵一と、〔一〇〕素手　「漢古詩」に、纖纖擢二素手一、札札弄二機杼一と、〔一一〕葉家白　建谿の茶名、製茶の家一千餘戶、葉氏の茶を第一とする、〔一二〕添丁　其の子を言ふ、〔一三〕哇笑　小兒の聲、〔一四〕八陣　上古風后の作る八ツの陣立、天と地と風と雲と龍と虎と鳥と蛇、「蜀志」に、諸葛亮、作二八陣圖一と、〔一五〕主客　「老子」に、用兵有レ言、吾不二敢爲一レ主而爲レ客と、〔一六〕戎行　「左傳成公二年」に、韓厥曰、屬當二戎行一、無レ所二逃隱一と、杜子美の詩、涿鹿親戎行と、戎行は軍行、〔一七〕君集

「唐侯君集傳」に、始太宗、命二李靖一、教二君集兵法一、既而奏、靖且レ反、兵之隱微、不二以示一臣、帝以讓レ靖、靖曰、方中原無事、臣之所レ教、足レ以制二四夷一、而求レ盡二臣術一、此君集欲レ反耳と、

【詩意】君が家の蜂は窠を作りて、歳歳に漆汁を添ふるの賑かさである、我が輩は譬へて見れば牛が鼻を穿たれて居ると同じ、舌を卷いて聊か自から溼すに過ぎない、二年の間に君を訪ふこと三度、僅に三度なれど此の行は眞に得得たる者である、それは君の氣性が劇孟に似たるを愛すればである、門を扣く者の爲めには緩急共に承知して吳れる、君が家には紅頰の兒がある、能く綠頭鴨の曲を歌ふ、行きし時は必ず簾を隔てて見る、花霧が輕く羃羃たる景色を、君は我に供するに黃封酒を以てせられ、又親しく自から名茶を煎じて吳れる、猶ほ此の上美人を煩はして、自から葉家白の名茶を點せらる、樂しい哉君の一事も無き身分は、十年も禮幘を蓄へずに、日日閉門して唯佳兒を弄するのみ、兒孫の哇笑の聲は呱呱の泣聲と雜はる、然るに今や西方は正に苦戰最中である、誰か將帥の缺を補ふ者ぞ、圖を披きて八陣の陣立を見玉へ、或は合し或は散じて主客を更代するではないか、然りと言うて必ずしも自身軍行は必要としない、坐論して君集に兵法を教授すればよいのである、

【餘論】紀曰く、此首有二補湊之痕一と、

〔四〕

酸酒如二虀湯一。甜酒如二蜜汁一。

酸酒は虀湯の如く、甜酒は蜜汁の如し、

三年黃州城。飲レ酒但飲レ溼。
我如更揀擇。一醉豈易レ得。
幾思壓茆柴。禁網日夜急。
西鄰椎二甕盎一。醉倒猪與鴨。
君家大如レ掌。破屋無二遮羃一。
何從得二此酒一。冷面妬二君赤一。
定應二好事人一。千石供二李白一。
爲レ君三日醉。蓬髮不レ暇幘。
夜深欲レ踰レ垣。臥想春甕泣。
君奴亦笑レ我。髮齒行禿缺。
三年已四至。歳歳遭二惡客一。
人生幾兩屐。莫レ厭頻來集。

三年黃州城、酒を飲んで但溼を飲む、
我如し更に揀擇せば、一醉豈得易からん、
幾たびか思ふ壓茆柴、禁網日夜急なり、
西鄰甕盎を椎す、醉倒す猪と鴨と、
君家大さ掌の如く、破屋遮羃無し、
何くよりか此の酒を得たる、冷面君が赤さを妬む、
定んで應に好事の人、千石李白に供するなるべし、
君が爲めに三日醉ふ、蓬髮幘に暇あらず、
夜深けて垣を踰えんと欲す、臥して想ふ春甕の泣くを、
君が奴亦我を笑ふ、髮齒行くゆく禿缺、
三年已に四たび至る、歳歳惡客に遭ふ、
人生幾兩屐、厭ふ莫かれ頻りに來集するを、

【字解】〔一〕酸酒　「揚子法言」に、日炅不レ飲レ酒酒必酸と、〔二〕甜酒　白樂天の詩、戶大嫌二甜酒一と、〔三〕飲酒　乏酒に作る本がある、飲酒の方が善、〔四〕壓茆柴　任曰、黃州人造二私酒一、俗謂二之壓茆柴一と、〔五〕禁網　飲酒の禁令、「漢循吏傳序」に、禁網疎闊と、〔六〕甕盎　甕は甕と同字、カメ、盎はハチ、ホトギ、「漢書趙廣漢傳」に、守二京兆尹一、至二霍光子、博陸侯禹第一、直突二入其門一、廈二索私屠酤一、椎二

破盧盎」と、【七】醉倒　韓退之の詩、花前醉倒歌者誰と、【八】破屋　司空圖の詩、落葉穿ニ破屋一と、【九】君赤　施德初曰く、俗諺、有レ無レ錢レ喫レ酒、妬ニ人面赤一之語ニと、【一〇】好事人　陶淵明の詩、時賴ニ好事人一、載レ醪祛レ所レ惑と、【一一】千石　李太白の詩、愁來飲レ酒二千石、寒灰重暖生ニ陽春一、山翁醉後能騎レ馬、別是風流賢主人と、【一二】三日「漢高祖紀」に、張飲三日と、【一三】蓬髮「漢揚雄傳」に、頭蓬不レ暇レ梳と、【一四】踰垣「孟子滕文公」に、段干木、踰レ垣而辟レ之と、【一五】春甕泣「漢畢卓傳」に、比舍郎、酒熟、夜至ニ其甕間一盜取と、酒熟して響くを云ふ、【一六】惡客　酒を飲まざる者と、大に飲む者と二樣に通ずる、「羣碎錄」に、元結以レ不レ飲レ酒、爲ニ惡客一と、【一七】兩屐「晉阮籍傳」に、祖約好レ財、孚好レ屐、同是累而未レ判ニ得失一、有ニ詣レ約見一、正料ニ財物一、客至、屏當レ不レ盡ニ餘兩一、小籠以著ニ背後一、傾レ身障レ之、意未レ能レ平、或詣レ孚、正見ニ白蠟屐一、因自嘆曰、未レ知一生、當レ著ニ幾緉屐一、神色閒暢、於レ是勝負始分と、

【詩意】酸酒を飲めばナマスの湯を飲むが如きの感である、甜酒を飲めば蜜汁を飲むが如きの感であるる、三年間黃州城に在りて、酒を飲むと言ふもののホンの濕を飲む氣持である、我は如し之を揀擇して居れば、一醉すらも得ることが出來ない、幾たびか壓茆柴のことを思ひ出す、が酒稅官吏は日夜に眼が光る、已に西鄰の舍は私釀を發覺され、家宅搜索の結果罎盎を椎破せらるる狀態である、醉うて居りし主人は猪と鴨との料理鉢を打倒す、然るに君が家は大きさ掌の如きものである、而して破屋は物を遮る羃も無い、此の如き始末であるに何の術あつて此の酒を得たるや、冷面の者は君が面の赤きを妬むのである、定んで察するに好事の人が、千石の美酒を攜帶して來て李白に供したるものと考へる、我も君の爲めに三日醉うて蓬髮も亂れしままにて幘するに暇が無い、夜深けて惡事と知り乍ら垣を踰えんと欲する氣が起る、臥して春甕の泣くを聞いては奴の事を笑へない、君が奴僕は反つて僕を笑ふことであらう、髮は禿し齒は缺けてよい年である、三年間に四度も至りて、歲歲惡客に遭はしむ、考ふれば人生は幾兩屐ぞや、厭うてはいかぬ頻りに來集することを、

【餘論】紀曰く、此首亦眞朴と、又、醉倒猪與レ鴨の五字を評して曰く、豈有ニ此理一、語亦不レ雅と、座敷の中にて猪や鴨を倒すなぞ狂人の夢以外には無い、それを眞面目に見る觀奕道人は餘りに小兒に類す、其の料理が載せてある鉢や盆の類と見れば少しも支障はない、況んや鴨は韻字なるに於てをや、

〔五〕

枯松强鑽(一)膏。槁竹欲レ瀝(二)汁。
兩窮相値遇。相哀莫(三)相溼(四)。
不レ知我與レ君。交游竟何得。
心法幸相語。(五)頭然未レ爲レ急。
願爲ニ穿(六)雲鶻。莫レ作レ將雛(七)鴨一。
我行及ニ初夏。煮レ酒映ニ疏羃(八)一。
故鄉在ニ何許一。西望千山赤。
茲游定安歸。東泛ニ萬頃白一。

〔五〕

枯松强ひて膏を鑽り、槁竹汁を瀝まんと欲す、
兩窮相値遇し、相哀れんで相溼す莫し、
知らず我と君と、交游竟に何をか得る、
心法幸に相語らん、頭然未だ急と爲さず、
願はくは穿雲の鶻と爲らん、將雛の鴨と作る莫かれ、
我が行初夏に及ぶ、酒を煮て疏羃に映ず、
故鄉何許に在る、西望すれば千山赤し、
茲游定んで安くに歸らん、東のかた萬頃の白きに泛ばん、

一歡寧復再。起舞花墮〔八〕幘。　一歡寧ぞ復た再びせん、起つて舞へば花幘に墮つ、
將行出苦語〔九〕。不用兒女泣〔一〇〕。　將に行かんとして苦語を出す、用ひず兒女の泣くを、
吾非固多矣。君豈無一缺。　吾が非固に多し、君豈一缺無からんや、
各念別時言。閉戶謝衆客。　各の別時の言を念ふ、戶を閉ぢて衆客を謝す、
空堂淨〔一一〕掃地。虛白〔一二〕道所集。　空堂淨掃の地、虛白は道の集まる所、

【字解】〔一〕鑽膏　松膏を鑽斬する、〔二〕相涇　第二首に注したる莊子大宗師の意、〔三〕心法　白樂天の詩、自三我學二心法一、萬緣成二一空一と、心法とは形相なくして用を表はすものを謂ふ、形相ありて體を表はすものを色法と謂ふ、今此の句は佛法の意味にて見よ、〔四〕頭然　「梵網經序」に、當レ求二精進一、如レ救二頭然一、但念二無常一、愼勿二放逸一と、然は燃である、〔五〕穿雲鵲　杜子美の詩、莫下作二翻雲鵲一、聞呼向レ禽急上と、鵲はクマゲカ、〔六〕雛鴨　憑應瑠曰く、「宣和畫譜」、易元吉、有二雛鴨圖一と、〔七〕羃　巾羃、幕とは異なる、覆ふと云ふ義は羃も幕も同じ、〔八〕墮幘　「漢灌夫傳」に、夫起舞、屬レ蚡墮レ幘と、〔九〕苦語　韓退之の詩、苦語感二我耳一と、〔一〇〕兒女泣　「後漢來歙傳」に、謂二蓋延一曰、呼巨卿、欲二相屬以二軍事一、而反效二兒女子涕泣一乎と、〔一一〕淨掃地　白樂天の詩、深閉竹問扉、淨掃松下地と、〔一二〕虛白　「莊子人間世篇」に、虛室生レ白と、缺孔あれば、空室自から光を生ず、

【詩意】已に枯死したる松は膏を鑽ることは出來ない、已に槁朽したる竹から汁を瀝むことは出來ない、其枯松と槁竹の兩窮が相値遇して、相哀れむも相涇すことは出來ない、知らず我と君との交游は、畢竟互に何の得る所かある、道の根本を語ることを得たるは幸福である、頭上に火が燃えるも未だ緊急問題とはしない、願はくは堂堂と穿雲の鵲と作つて、微微たる雛を將く鴨と作らぬことを、我が出立する方に初夏に及ぶ、別燕の酒を煮れば疏羃に映ずる、故鄕は其れ何れの許である、西方を望めば千山皆赤赭禿である、茲の游は定んで安くにか歸るや、東の方は江水が萬頃白い、そこで今日の一歡は再び容易にない、起つて舞ひ花が幘に墮つるもよい、離別に泣くは兒女の事である、吾は固に圓滿具足の人ではない、君と雖も一缺無き人とは思はぬ、各の別時の言を念ふより外の事はない、乃ち戶を閉して衆客を謝絕し、而して空堂淨掃の地に居れば、虛白は道卽ち眞の道の集まる所である、

【餘論】紀曰く、此首最深至と、又結末を評して、此古人臨レ別贈言之義、不レ似下後人但以二好語一相媚上と、前餘論に記せざりしが、第三首は紅頰兒、綠頭鴨、素手、黃封、泥赤、家白、此の五色を見るが、是は偶爾ではなく、用意して成ることを知れ、王右丞なども往往此の用字法を見る、

初入廬山三首　　初めて廬山に入る　三首

青山若〔一〕無素。偃蹇〔二〕不相親。　青山素無きが若く、偃蹇相親しまず、
要識廬山面。他年是故人〔三〕。　要識す廬山の面、他年是れ故人、

【自注】山南山面也。

【字解】〔一〕無素　「漢張禹傳」に、忽忘二雅素一と、平素、平生、モトカラの意、〔二〕偃蹇　山の怪奇なる形容、〔三〕故人　公の自注に、山南山面也と、

【題義】廬山は江西星子縣の西北、九江縣の南に在る、古名南障山、一名匡山、總名匡廬、江西の名